文化財保護課

群馬県前橋市

弥　勒　遺　跡

宅地造成事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1990

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

前橋市は、北に赤城山西に榛名山を望む関東平野の北部を市域とした県都であります。北から南に貫流する利根川の清流は「水と緑と詩の町」を潤し、かつては「糸の町」として養蚕製糸で栄えました。今人口は２８万を擁し生涯教育都市を目指し教育文化・商工業の調和のある街づくりが進められています。弥勒遺跡の所在する前橋市元総社町字弥勒は市中心街地から西の利根川右岸前橋台地にあり、周辺地域には古来より国府や国分寺がおかれ、古代上野国の政治・文化の中心地域でありました。近世には天狗岩用水や五千石堰が開削されるなど、今でも事業の偉大さがうかがわれる。また昭和３６～５３年の土地区画整理事業が行われ、大規模工場の誘致など、消費都市から生産都市へ踏み出すさきがけとなった地域であります。

この調査は、民間宅地開発事業に先駆けて、埋蔵文化財の緊急発掘調査を実施したもので、古墳時代から平安時代にかけての住居跡２１軒、土坑８基を確認し、多数の土師器、須恵器等の出土遺物を検出することができました。

この調査に当り大山貞治郎氏をはじめ多くの方々の御理解と御協力により調査報告書が刊行できました。ここに厚く御礼申し上げます。

平　成２年３月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団　長　　二　瓶　益　巳

例　　言

1　本書は、都市計画法第２９条（開発行為の許可）にさきがけて、開発予定地の埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、前橋市教育委員会のもとに組織された前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長二瓶益巳）の委託を受け、スナガ環境測設株式会社（前橋市青柳町２１１－１代表取締役須永眞弘）が実施した。

3　調査担当者　新保一美（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査員）
　　荻野博巳（スナガ環境測設株式会社文化財第１チーフ）

4　遺　跡　名　弥勒（みろく）遺跡　略称６３Ａ－４０

5　所　在　地　前橋市元総社町字弥勒１２３７，１２３８番地

6　期　　間　発掘調査　平成元年５月１６日～平成元年７月１５日
　　調査整理　平成元年７月１６日～平成２年３月１０日

7　調査面積　２０００m²

8　出土遺物は、前橋市教育委員会に保管している。

9　本書の作成は、スナガ環境測設株式会社文化財部（取締役専務兼部長金子正人）が作成に当り、編集総括を金子正人、執筆と遺構トレースを白石光男（調査チーフ）・荻野博巳（第１チーフ・調査員）、遺物実測とトレースを佐々木智恵子・角田朱美・小林裕美、版下作成を鈴木赳夫、須永薫子、作業事務を柴崎信江、須永豊、金子恵子が担当した。

１０　測量・調査・計画を須永眞弘（測量士第５２６１４号）が行い、測量は板垣宏（測量設計チーフ）、勝田貞査、樺沢高幸が当った。発掘調査安全管理は石島正二（総務役）が行った。

１１　調査に御協力を戴きました開発事業者中央群馬土地株式会社代表取締役大山貞治郎氏や地元の方々、並びに調査及び整理に際して種々と御指導、御助言を賜った各方面の方々に心より感謝申し上げます。

１２　調査に参加した方々（順不同）

近藤充郎　　石川サワ子　　内山恵美子　　中川類子　　辻みつる
小林康典　　須田シゲル

目　　次

序
例言
目次
凡例
Ⅰ　調査概要……1
　1　発掘調査に至る経緯と経過……1
　2　調査方法……2
　3　基本土層……2
　4　遺跡の位置と環境……3
Ⅱ　調査内容……4
　1　住居跡……4
　2　土　坑……12
　3　その他……13
　4　出土遺物観察表……14
Ⅲ　おわりに……17
　遺構実測図……19
　遺物実測図……36
　遺物実測図・拓本……44
　遺物拓本……50
　図　　版……51
　全体平面図……73

凡　　例

1　遺構の略号

　H－住居跡　D－土坑　S－石

2　実測図の縮尺

　全体図1 /250　住居跡1/60　カマド1/30　土坑1/60

　遺物実測図　土器1/3　瓦1/6　瓦の文字1/2　鉄製品1/3　石1/3

3　周辺図は、国土地理院発行の２万５千分の１「前橋」を使用した。

4　遺構の位置の基準 X=40660.0m　　Y=-71960.00m　（Ａ－０グリット）

基準点　国土地理院の三角点及び水準点より移動（ＢＭ＝１１８．００ｍ）

グリット　５ｍ間隔

等高線　１０cm

5　土層断面の土色名及び土器類の色調名は「新版基準土色帳」による。

6　遺物観察表、出土位置の表記

Ｈ－１－１　１号住Ｎｏ１、	Ｈ－２鉄１　２号住鉄Ｎｏ１
Ｈ－８Ｓ１　８号住石Ｎｏ１、	Ｈ－11カ３　11号住カマドＮｏ３
Ｈ－12確１　12号住確認Ｎｏ１、	１Ｇ－１　１グリットＮｏ１
２Ｇ－６　２グリットＮｏ６、	２Ｇ－カ１　２グリットカマドＮｏ１
３Ｇ－１　３グリットＮｏ１、	４Ｇ－６　４グリットＮｏ６
２トレ－１　２トレンチＮｏ１、	Ｄ－４Ｓ１　４号土拡石Ｎｏ１
Ｄ－７Ｓ１　７号土拡石Ｎｏ１、	

Ⅰ　調査概要

1　発掘調査に至る経緯と経過

弥勒遺跡は、中央群馬土地株式会社（代表取締役大山貞治郎・所在地群馬県群馬郡群馬町大字引間929 番地、以下「開発行為者」と言う。）の宅地造成事業計画に先駆けて都市計画法（昭和43年法律第100 号）第29条（開発行為の許可）及び前橋市宅地開発指導要綱（昭和48年前橋市告示第10号）第 9号（文化財保護）の規程により前橋市教育委員会に事前協議による試掘調査依頼があり調査の結果、奈良・平安時代の住居跡を確認したため、開発行為者と協議調整し、平成元年５月１６日より発掘調査を行うことになった。

調査経過（調査日誌より）

平成元年５月	１６日～１８日	発掘調査機材の準備休息所等の設置
	１９日～３０日	重機による表土排除とジョレン精査作業及び方眼測量
６月	１日～　５日	プラン確認、住居跡、土坑調査開始
	６日～１５日	住居跡番号付け（１号～２１号）
		土坑番号付け（１号～７号）
		平面図、セクション図、写真撮影等の作業
	１６日～２１日	住居跡内遺物取り上げ作業
		その他グリット内調査、写真撮影
	２２日～３０日	住居跡、グリット内調査とレベリング開始
７月	１日～　５日	グリット内、出土遺物、平面図作成
	６日～１５日	全体図修正、グリット調査、遺跡全体空中撮影
		発掘調査機材、休息所の搬出、弥勒遺跡調査終了

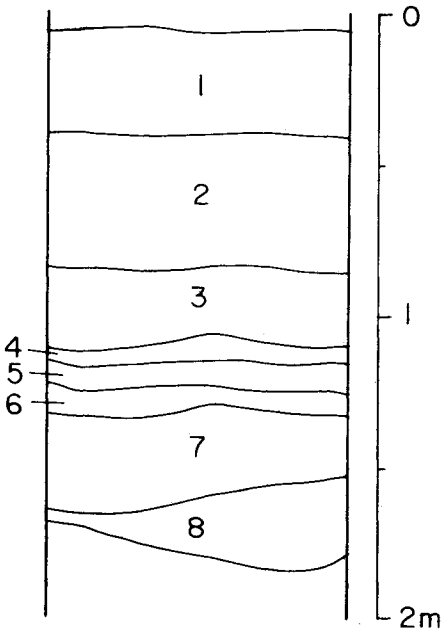
2　調査方法

調査は、試掘調査時のトレンチを基準にバックホウによる排土後、ジョレン精査により遺構プランの確認を進め、同時に公共座標を基に５ｍ メッシュで区画し遺構の位置基準のグリットを設定した。グリット名は、北西隅より緯線をA、B、C・・・・・・・・Iまで、経線を0、1、2・・・・・・・12まで定めた。住居跡及びカマド等重要な遺構は十字にベルトを設け土層観察をした。また、遺構の可能性のある場所はトレンチを設けその確認に勉めた。出土遺物はナンバー付をし、高さ、出土位置を平面図に記録した。表土（耕作土）中の遺物はグリット毎に、住居跡・土坑などの流れ込み遺物は、遺構ごとに一括として取り上げた。

測量図の縮尺は、全体平面図 S＝ 1：250、住居跡・土坑及びグリット遺物出土図は S＝ 1：20

カマド S= 1：10で記録した。写真撮影は、現況各遺構遺物出土現況、空中撮影等を行い、使用フィルムは白黒、カラー、リバーサルフィルムを用い撮影記録した。

3 基本土層



基本土層

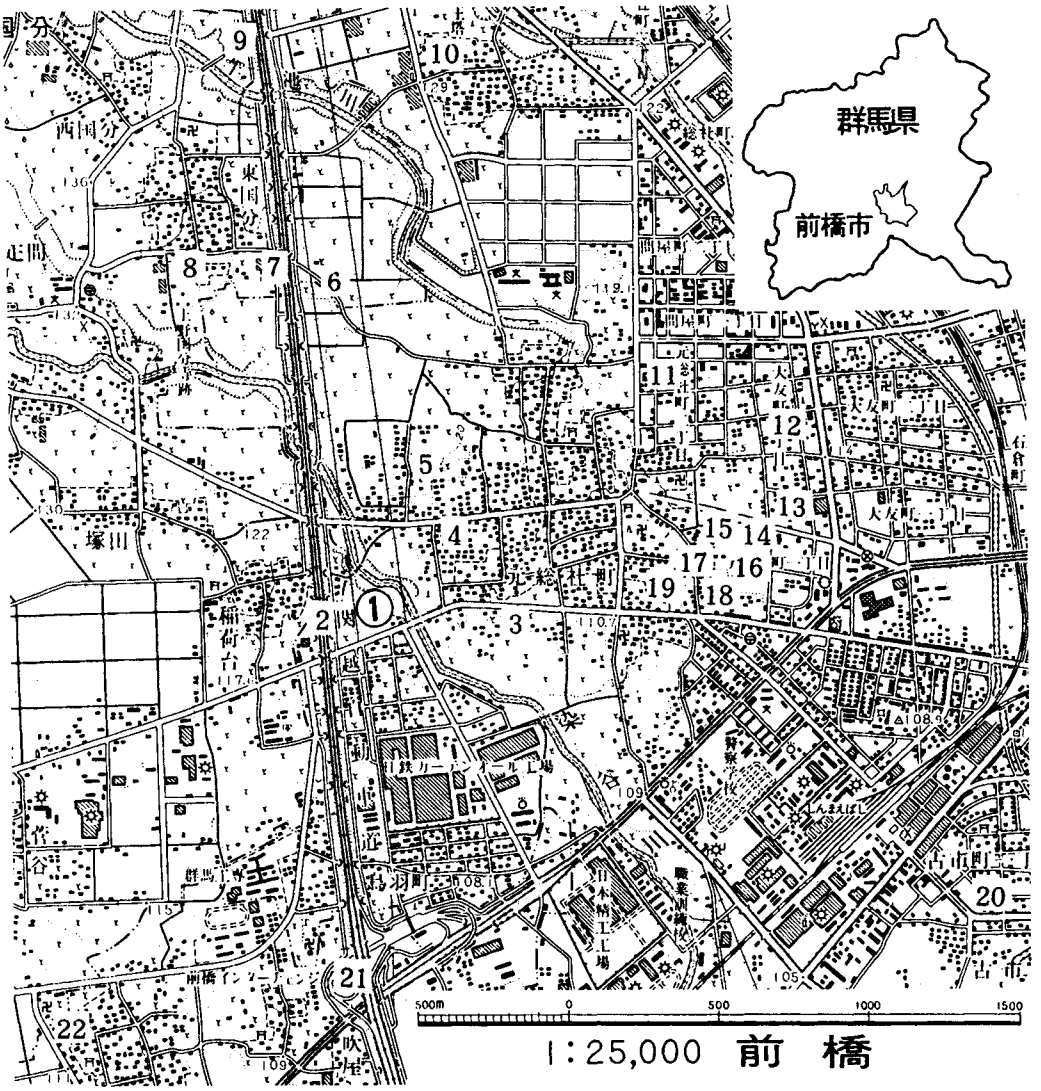
1層	褐色土層	粘性が有り、締まりがある。二次的なC軽石粒を含む。
2層	黄色土層	堅く締まりがあるローム層。
3層	暗褐色土層	堅く良く締まっている。
4層	褐色土層	砂質で川砂を含む。キメが細かい。
5層	黄色土層	砂質で川砂を多く含む。
6層	褐色土層	砂質で2～3mmの小石を含む。
7層	褐色土層	砂質の堅い層で4mm程の小石を含む。
8層	淡褐色土層	砂質の堅い層で、良く締まっている。

第1図 基本土層

4 遺跡の位置と周辺の環境

榛名山東麓に広がる火山傾斜面相馬ケ原扇状地を榛名水系の一つ染谷川が流下している。この染谷川は旧来豪雨時は益水氾濫し沿線は被害を受け、一方農業用水は不便で主に畑、桑園地が多い地域である。染谷川右岸台地に当遺跡が在り、地域周辺は市街地化が進み、南方向150mを東西に走る主要地方道前橋群馬高崎線を挟んで南側地区は土地区画整理事業による前橋3号（鳥羽）工業団地に連がる。西150mには、群馬郡群馬町稲荷台地内を南北に走る関越自動車道がある。

周辺の遺跡は、染谷川の左岸400m程東方向に上野国府推定地や天神遺跡などがある。南方向約6 ～700m付近を東西に東山道（推定）が走っている他、北方向5 ～600m付近に上野国分寺・国分尼寺跡がある。他に周辺の状況を次ページ第2図に示す。



第2図 周辺の遺跡

1 弥勒遺跡　2 鳥羽遺跡　3 天神遺跡　4 屋敷遺跡　5 草作遺跡　6 国分尼寺
7 国分寺中間地域遺跡　8 国分僧寺　9 国府境遺跡　10 山王廃寺　11 閑泉樋遺跡
12 堰越Ⅱ遺跡　13 堰越遺跡　14 大友Ⅱ遺跡　15 大友Ⅲ遺跡　16 元総社明神遺跡
17 寺田遺跡　18 明神東遺跡　19 元総社小学校校庭遺跡　20 赤烏遺跡　21 中尾遺跡
22 正観寺遺跡

Ⅱ 調査内容

1 住居跡

H－1号住居跡（第3図、図版1）

調査区の北西隅に位置し、B－0グリット内に所在する。本住居は2号住居跡と重複しており、切り合い関係から本住居が2号住居より新しいと思われる。規模は、南北方向で約 3.4m を測り、東西方向は区域外であるため不明である。平面形態は、隅丸方形を呈す。確認面より床面までの掘り込みは、30cm前後で、床面ははっきりしない。住居跡の主軸方位はN－90°－Eで、覆土はC軽石粒を含む褐色土を基調にしている。カマドは東壁の中央部に位置するが、すでに覚乱を受けており焼土範囲を残すのみでカマドの形態はなしていない。遺物は土師器片等が出土した。

H－2号住居跡（第3図、図版1）

調査区の北西隅に位置し、B－0からC－0グリットにかけて所在する。本住居は、1号住居と重複関係にあり、前後関係から、本住居が旧いと思われる。規模は南北方向で約 3.8m を測り、東西方向は区域外であるため不明である。平面形態は隅丸方形を呈す。確認面より約15cm掘り込んで床面に達し、床面は凸凹がなく平坦であまり堅くない。住居跡の主軸方位は、N－85°－Eで覆土はC軽石粒を含む褐色土を基調にしている。カマドは東壁中央よりやや南寄りに位置し、わきには灰の分布が見られた。燃焼部幅は約80cm、奥行は約60cmを測る。遺物はカマド内より土師器、須恵器の破片、石、鉄片等が出土した。

H－3号住居跡（第4図、図版2）

調査区の北隅に位置し、A－1からA－2グリットにかけて所在する。規模は、東西方向で約 3.1m を測り、南北方向は一部区域外に在り不明である。平面形態は隅丸方形を呈すと思われる。確認面より約11cm程掘り込んで床面に達し、床面は、凸凹がありあまり堅くない。床面全体に貼床の存在が認められた。住居跡の主軸方位はN－72°－Eで、覆土はC軽石粒を含む褐色土を基調にしている。カマドは東壁南に位置する。すでに覚乱を受けており、焼土範囲を残すのみで、カマドの形態はなしていない。遺物は土師器片、石等が出土した。

H－4号住居跡（第5図、図版2）

調査区の北隅に位置し、A－2からA－3グリットにかけて所在する。規模は東西方向で約 3.3

m を測り、南北方向は一部区域外であるため不明である。平面形態は隅丸方形を呈す。確認面より約１０cm程掘り込んで床面に達し、床面は凸凹がありあまり堅くない床面全体に貼床の存在が認められた。住居跡の主軸方位はＮ－９０°－Ｅで、覆土は、Ｃ軽石粒を含む褐色土を基調にしている。カマドは、区域外に存在すると思われるため現状では確認されなかった。遺物は土師器坏や須恵器片等が出土した。

Ｈ－５号住居跡（第６図、図版２）

調査区の北西に位置し、Ｂ－１からＢ－２グリットにかけて所在する。確認時は範囲の確定が困難であったため、規模と平面形態は想定線をも含んだものである。規模は、南北方向で約 3.7m 東西方向で約 3.5m 程を測り、平面形態は、方形を呈する。住居跡の主軸方位は、Ｎ－９２°－Ｅで覆土は、Ｃ軽石粒を含む褐色土を基調にしている。壁、床面はあまりはっきりしない。カマドは東壁中央部に位置する。残存状態は焼土範囲を残すのみで、形態はなしていない。カマドの左袖石とおもわれる安山岩が脆い状態で出土した。また、右脇に焼土の分布が検出できた。なお焼土は粘土が焼けた物と思われる。遺物は土師器坏１点である。

Ｈ－６号住居跡（第７・８図、図版２・３）

調査区の南西に位置し、Ｆ－１からＦ－２グリットにかけて所在する。確認時からＢ軽石粒の堆積が認められ、住居内もＢ軽石粒により充填されていた。規模は南北方向で約 5.4m 、東西方向で約 4.2m 程を測り、平面形態は南東部が張り出した歪んだ隅丸方形を呈する。住居跡の主軸方位はＮ－８３°－Ｅで、覆土はＢ軽石粒の純層に覆われていた。壁面は、あまりしっかりした造りではなく、張り出し部分は湾曲しながらたちあがる。確忍面より床面までの掘り込みは、浅い所で8.5cm、深い所で１７cmを測る。床面には直径８～１０cm、深さ５cm前後の円形の小ピットが散在し北西コーナーには、直径８０～９０cm、深さ２５cm前後のピットが確認された。形態は円形を呈す。また、焼土が３ケ所で認められ３ケ所とも火床は、堅く焼き固められていた。カマドは、南西コーナーに位置し、残存状態は側壁の一部と石を残すのみで形態はなしていない。火床は、堅く焼き固められていた。貯蔵穴はカマドの右脇に位置し長径７０cm、短径５０cm深さ２０cm前後の歪んだ楕円形を呈す。遺物はカマド内より土師器坏１点を出土した。

Ｈ－７号住居跡（第１０図、図版３）

調査区の南西に位置し、Ｆ－３からＧ－３グリットにかけて所在する。本住居は、１号土坑と重複しており、１号土坑のＢ軽石粒堆積状況から、本住居が先行する形となる。規模は測定可能な所で測り、南北方向で約 2.6m 、東西方向で約 2.4m を測る。平面形態は、歪んだ正方形を呈す。住

居跡の主軸方位は、N－６６°－Eである。覆土は上層にB軽石粒、その下層にC軽石粒を含む褐色土を基調にしている。壁の立ち上がりははっきりしない。確認面より床面までの掘り込みは、浅い所でおよそ２８cm、深い所で３０cm前後を測る。カマドは東壁中央部より北に位置する。残存状態は煙道部天井の一部と左側壁が比較的残っていたが、他の部分は覚乱を受け、焼土粒を残すのみであった。火床は軟らかく、炊き口部付近には、炭と灰の層が検出できた。規模は全長約 1.3m 、炊口部の幅３０cm、燃焼部の長４０cm、煙道部の長９０cm程を測る。遺物は土師器と須恵器の破片が数点出土した。

H－８号住居跡（第９図、図版３）

調査区の南西に位置し、C－３からC－４グリットにかけて所在する。住居範囲の確定は困難であったため、規模と平面形態は想定線をも含んだものである。規模は南北方向で約 3.5m 、東西方向で約 2.7m 程を測る。平面形態は隅丸方形を呈する。住居跡の主軸方位は、N－１３２°－Eで覆土はC軽石粒を含む褐色土を基調にしている。壁の立ち上がりは、はっきりしない。確認面より床面までの掘り込みは、浅い所でおよそ２８cm、深い所で３５cm前後を測る。床面は平坦で粘性を帯びる。床面中央部に床面下のピット１基が検出された。直径１m 前後、深さ約１７cmを測り、平面形態は円形を呈する。カマドは西壁中央よりやや北寄りに位置する。残存状態は左側壁の一部と、煙道部天井の一部が確認出来たのみで他の部分は不確定である。火床は焼土もあまり見られずしっかりしていない。規模は煙道部の長さ推定５０cmを測る、他は明確でない。遺物は床面下のピットより、石鏃一点を出土した。

H－９号住居跡（第11図、図版３）

調査区の中央に位置し、D－４からD－５グッリトにかけて所在する。カマド周辺部の確認は容易であったが、１８号住居との新旧関係は明確でなかった。土層断面により観察を行ったが、壁の立ち上がり、切り合い関係は確認できなった。規模、平面形態は想定線を含んだものである。規模は測定可能な所で南北方向約 3.04mを測る。東西方向は確認できない。平面形態は隅丸方形と思われるが判断しかねる。住居跡の主軸方位は、推定でN－３６°－Eで、覆土はC軽石粒を含む褐色土を基調にしている。壁の立ち上がりははっきりしない。確認面より床面までの掘り込みは３０cm前後を測り、床面は平坦であるが、明確ではない。カマドは、東壁中央部に位置する。残存状態は左の袖部を構築したと思われる白色粘土の一部と左側壁の一部が残っており、他の部分は残りが悪い。火床は、焼き固められてはいないが、良く締まった状態であった。なお、規模の測定までには到らない状態である。遺物はカマド付近から土師器甕の口縁部を検出した。

Ｈ－１０号住居跡（第12図、図版４）

調査区の中央部寄りに位置し、Ｇ－４からＧ－５グリットにかけて所在する。耕作土から掘り込まれている溝により、カマドの袖部は切られていた。規模は、南北方向で約 4.14m、東西方向で約 3.2m 程を測る。平面形態は隅丸方形を呈する。主軸方位は、Ｎ－９６°－Ｅで、覆土はＣ軽石粒を含む褐色土を基調にしている。壁の立ち上がりは、はっきりしない。確認面より床面までの掘り込みは２５cm前後を測り、あまり明確ではなかった。北西コーナー付近には焼土と炭の分布が検出された。カマドは東壁中央に位置し、残存状態は燃焼部の一部と煙道部の一部を残すのみで袖石は溝により切られている。燃焼部には、支脚石が検出された。火床は軟らかく焼土の分布を見る。規模は現況で燃焼部の長４０cm、煙道部の長約６０cmを測る。遺物は土師器・須恵器の破片、石等が数点出土した。

Ｈ－１１号住居跡（第13・14図、図版４）

調査区の中央南寄りに位置し、Ｆ－６からＧ－６グリットにかけて所在する。範囲の確認は比較的明瞭に行えた。規模は南北方向で約 4.0m 、東西方向で約 3.46m程を測る。平面形態は、隅丸方形を呈する。住居跡の主軸方位はＮ－８１°－Ｅで、覆土はＣ軽石粒を含む褐色土を基調にしている。壁は垂直に立ち上がり、確認面より床面までの掘り込みは浅い所で２７cm前後、深い所で４８cm程を測る。床面は平坦でよく踏み締められており、床面全体に貼床が認められ、中央部は１０～２０cm程落ち込んでいた。床面下にはピット４基が検出された。以下詳細を記す。

名称	直　径　Ｐ＝cm	深さcm	形　態	備　　考
Ｐ１	24	10	円形	南の壁際にそって位置する。
Ｐ２	24	10	〃	
Ｐ３	28	5.5	〃	
Ｐ４	長径56、短径40	10.5	楕円形	北東、コーナー付近に位置する。

貯蔵穴は、カマド右脇に位置し長径 84cm 、短径 66cm 、深さ 27cm 程を測る。平面形態は楕円形を呈す。カマドは東壁中央よりやや南寄りに位置する。残存状態は燃焼部内に片面が扁平に磨かれた凝灰岩製の支脚石を検出した。袖石は左袖が凝灰岩の切石（加工面４面）で設定されており、右袖は割った丸瓦を組み合わせて構築されていた。なおこの袖部の床面下から欠損した凝灰岩の破片を検出した。（袖石の一部が残ったものか？）規模は測定可能な所で炊口部幅 50cm 、燃焼部幅 50 ～60cm、燃焼部奥行き 50cm 前後を測る。出土遺物は土師器坏類、須恵器埦、甕類、平瓦等が多く出土しており、特に瓦では「十」のヘラ描きや「仿」押印（陽刻）を施した丸瓦の出土、「郷名＋名」を表わしたと考えられる文字瓦等が注目される。

Ｈ－１２号住居跡（第１５図、図版５）

調査区の中央南隅に位置し、Ｇ－６グリットに所在する。範囲確認のためトレンチを設定し８cm程掘り下げた結果、北壁の一部が検出できた。なお住居跡南壁は区域外である。規模は南北方向で約 3.36m程を測り、東西方向は区域外のため不明である。平面形態は長方形を呈すと思われる。住居跡の主軸方位はＮ－３７°－Ｅで、覆土はＣ軽石粒を含む褐色土を基調にしている。壁の立ち上りは、はっきりしない。確認面より床面までの掘り込みはトレンチの部分で１２cm前後、他は２２cm程を測る。床面ははっきりしないが、中央部付近から細長い炭の分布が見られた。カマドは東壁中央部に位置する。残存状態は凝灰岩の切石による袖石と支脚石が検出でき、袖石は右袖石４面、左袖石６面の加工面を残す。高さは現状で約３３cm前後を測りしっかりした形状であるが支脚石は比較的脆い状態であった。火床は、焼き固められていなく、焼土の分布もそれはど見ない。規模は測定可能な所で炊口の幅約３７cm、燃焼部の長約８０cm，燃焼部の幅は６０～７０cmを測る。遺物はカマド内より土師器坏１点と丸甕の破片が出土した。

Ｈ－１３号住居跡（第１６図、図版５）

調査区の東中央部に位置し、Ｅ－８からＦ－８グリットにかけて所在する。確認時においては、試掘トレンチにより焼土が確認されていたが住居の範囲は明瞭ではなかった。規模、平面形態は、想定線をも含んだものである。規模は南北方向で約 3.9 m、東西方向で約 3.8m 程を測る。平面形態は方形を呈すと思われる。住居跡の主軸方位はＮ－４４°－Ｗで、覆土はＣ軽石粒を含む褐色土を基調にしている。壁の立ち上がりははっきりしなく、確認面より床面までの掘り込みは、２０cm前後を測る。床面は平坦であるが、あまり明確ではない。カマドは北壁中央部に位置し残存状態は焼土の範囲を残すのみで、形態はなしていない。遺物は覆土中より土師器坏片を出土した。

Ｈ－１４号住居跡（第１７・１８図、図版５）

調査区の東南に位置し、Ｇ－９グリット内に所在する。確認時においてはカマド焼土部分は確認されたが、住居範囲については、不明寮であった。住居跡の一部は調査区域外である。規模は測定可能な所で測り、南北方向で約 3.8 m、東西方向で約 3.5m 程を測る。平面形態は方形を呈すと思われる。住居跡の主軸方位はＮ－４４°－Ｅで、覆土はＣ軽石粒を含む褐色土を基調にしている。壁の立ち上がりははっきりせず、確認面から床面までの掘り込みは２０cm前後を測る。床面は平坦で締まりがある。カマドは東壁中央よりやや南寄りに位置し、残存状態は焼土範囲を残すのみであった。袖石と思われる凝灰岩の切石や土製の支脚が住居内に散在していた。遺物は完形に近い土師器長甕７点、丸甕１点、坏２点を出土し、その他高杯などの破片も見られる。また須恵器では注口が２ケ所にある双口の瓶の出土は特筆されるものである。

Ｈ－１５号住居跡（第１９図、図版６）

調査区の東に位置し、Ｆ－１０グリット内に所在する。住居範囲は比較的容易に確認できた。規模は南北方向で約 3.5 m、東西方向で約 3.0m 程を測り、平面形態は、歪んだ隅丸方形を呈する。住居跡の主軸方位はＮ－７９°－Ｅで、覆土はＣ軽石粒を含む褐色土を基調にしている。壁の立ち上りははっきりしない。確認面から床面までの掘り込みは１０cm前後を測る。床面ははっきりしない。カマドは東壁中央より南に位置し、残存状態は焼土範囲を残すのみで形態はなしていない。遺物は坏、埦等が出土し、その他破片数十点を数える。

Ｈ－１６号住居跡（第２０・２１図、図版６）

調査区の東隅に位置し、Ｅ－１０からＦ－１０グリットにかけて所在する。確認時はカマド付近は明瞭であったが、北半分については、不明寮な部分が多く確認が困難であった。規模・平面形態は想定線を含んでいる。また住居跡内北西隅より土坑を１基検出した。耕作土より掘り込まれた溝が住居跡内を南北方向に走行していた。規模は測定可能な所で測り南北方向約 5.3 m、東西方向約 3.3m を測る。平面形態は隅丸方形を呈すと思われる。土坑は長径約 1.2m 、短径約 0.85m で深さは 0.5m 前後を測る。平面形態は楕円形を呈す。住居跡の主軸方位はＮ－８５°－Ｅで、覆土はＣ軽石粒を含む褐色土を基調にしている。壁の立ち上がりははっきりしない。確認面より床面までの掘り込みは１０cm前後を測り、床面はあまり明確ではない。カマドは東壁南隅に位置する。残存状態は焼土範囲を残すのみでカマドの形態はなしていない。遺物は覆土中より土師器片が数点出土した。

Ｈ－１７号住居跡（第２２・２３図、図版６・７）

調査区の中央に位置し、Ｄ－５からＥ－５グリットにかけて所在する。確認時においては、９号住居、１８号住居と重複関係にあった。トレンチを設定し切り合い関係を調査したが、北壁部が確認出来ただけで新旧関係、範囲等の確認は困難をきたした。なお規模・平面形態は想定線を含んだものである。規模は測定可能な所で測り、南北方向で約 4.0m 、東西方向で約 3.1m を測る。平面形態は隅丸方形を呈すと思われるが判断しかねる。住居跡の主軸方位は推定Ｎ－１２５°－Ｅで、覆土はＣ軽石粒を含む褐色土を基調にしていた。壁の立ち上がりは垂直に立ち上がり壁面は粘性に富む。確認面より床面までの掘り込みは１５～２０cm前後で床面は粘性を帯る。カマドは当住居範囲内で２ケ所検出できた。以下東カマド（１号カマド）・西カマド（２号カマド）と表記する。１号カマドは、東壁部北東コーナーに付設され、２号カマドは西壁中央部付近に位置する。なお２号カマドは本住居に伴なうものかは判断しかねる。残存状態として１号カマドは左袖石の一部と燃焼部の一部が検出できたが、形をとらえるまでには至らなかった。２号カマドは燃焼範囲とカマドの

構築材と思われる白色粘土の一部を検出したが１号カマドと同様形態はなしていない状態である。遺物は覆土中より土師器、須恵器の破片を数十点出土した。

Ｈ－１８号住居跡（第１１図、図版７）

調査区の中央に位置し、Ｅ－４からＥ－５グリットにかけて所在する。確認時においては、９号住居、１７号住居と重複関係にあった。新旧関係及び範囲等は、トレンチを設定し確認したが３住居とも壁の立ち上がりが明瞭でなく、確認は困難であった。なお規模・平面形態は想定線を含んだものである。規模は、測定可能な所で東西方向で約 3.2m を測り、南北方向では測定不可能であった。平面形態は隅丸方形と思われるが判断しかねる。住居跡の主軸方位は推定でＮ－９０°－Ｅである。覆土はＣ軽石粒を含む褐色土を基調にしている。壁の立ち上がりは、はっきりしない。確認面より床面までの掘り込みは１０cm前後で床面は平坦であるが明瞭でない。カマドは東壁中央部付近に位置する。残存状態は凝灰岩の切石が燃焼部を囲んだ状態で配され、全体に焼土の分布を見る。また灰層と炭の分布も確認された。遺物は土師器、須恵器とも比較的多く、甕、坏、埦などを出土、また鉄滓も確認できた。

Ｈ－１９号住居跡（第２４図、図版７）

調査区の西、中央に位置し、Ｄ－２グリット内に所在する。確認時は焼土の分布が確認されただけで住居範囲は明瞭ではなかった。なお規模・平面形態は想定線を含む。規模は南北方向で約 2.6m 、東西方向で約 3.9m を測る。平面形態は、隅丸方形と思われる。住居跡の主軸方位はＮ－３５°－Ｗで、覆土はＣ軽石粒を含む褐色土を基調にしている。壁の立ち上がりは、はっきりしない。確認面より床面までの掘り込みは１０～１５cm前後で床面は明確でない。カマドは北壁中央よりやや西寄りに位置する。残存状態は焼土範囲を残すのみであまり形態をなしていない。遺物は覆土中より土師器、須恵器片を数十点数える。

Ｈ－２０号住居跡（第２５図、図版７）

調査区の東北に位置し、Ｂ－２からＢ－３グリットにかけて所在する。確認時にカマド内の瓦と土師器埦が検出できたため、トレンチを設定し範囲を確認した。北壁の一部が途中で消失している状態であったが他は比較的明確に確認できた。規模は測定可能な所で測り南北方向で約 4.2m 、東西方向で約 4.3m を測る。平面形態は隅丸方形を呈すと思われる。住居跡の主軸方位はＮ－６８°－Ｅで、覆土はＣ軽石粒を含む褐色土を基調にしている。壁の立ち上がりは、はっきりしない。壁面は粘性に富む。確認面より床面までの掘り込みは５～８cm前後で床面は平坦でやや粘性を帯びる。また住居跡西壁隅より、土坑を１基検出した。規模は長径約 1.2m 、短径約 1.0m で深さ

は 30cm 前後を測る。平面形態は円形を呈すと思われる。カマドは、東壁中央よりやや南に位置する。残存状態は凝灰岩からなる右袖石の一部と構築材の平瓦が検出できたがカマドの残存状態が良好でなく、形態はなしていない。遺物は埦、坏、平瓦等が出土、その他に破片を数点数える。

Ｈ－２１号住居跡（第２６・２７図、図版７・８）

調査区の東南隅に位置し、Ｇ－８グリット内に所在する。表土削除時にカマドの一部が検出できたため、トレンチを設定し範囲を確認した。東壁の一部が消失している状態であった。規模は測定可能な所で測り、南北方向で約４．１ｍ、東西方向で約３．１ｍを測る。平面形態は隅丸方形を呈する。住居跡の主軸方位はＮ－８６°－Ｅで、覆土はＣ軽石粒を含む褐色土を基調にしている。壁の立ち上がりは、はっきりしない。壁面は粘性に富む。確認面より床面までの掘り込みは１０cm前後で床面は平坦でやや粘性を帯びる。また住居跡南壁脇より、半分欠損した直径３０cm、厚さ１２cm前後の円形の自然石を検出した。石の下から焼土と伴に５～６片の須恵器片を検出した。カマドは東壁中央より南に位置する。残存状態は構架材としての丸瓦が南から北にかけて傾斜した形で検出できた。なお袖部の丸瓦は一枚を数片に割り使用している。規模は炊口部幅５５cm前後を測るが他の部分は明確でない。遺物は土師器、須恵器とも多く、甕、坏、壷、埦等が出土した。

2　土 坑

本遺跡で検出された土坑は９基であるが、内２基は１６号、２０号住居跡内で検出されており、この項で取り上げる土坑は、この２基を省いた７基の土坑である。

1 号 土 坑（第３３図、図版９）

Ｆ－３グリット内に位置し７号住居の北壁を切って所在する。規模は長軸 1.2m 短軸 1.2m 深さ２５cm前後を測る。平面形は円形を呈する。覆土はＢ軽石を多く含む褐色を呈している。遺物は確認面から須恵器、灰釉陶器片等が数点出土した。

2 号 土 坑

当初の確認では土坑と思われたが、精査段階で消失したため欠番とした。

3 号 土 坑（第３３図、図版９）

Ｅ－９グリット内に位置する。規模は長軸 2.5m 、短軸 1.3m 、深さ 60cm 前後を測る。平面形は長方形を呈する。覆土は、上層でＣ軽石粒を含む粘質の黒色土で、層位が下がるに従い粘性を帯びる。遺物は縄文片３片程出土したが摩滅が著しい。

4 号 土 坑（第３３図、図版９）

Ｅ－１０グリット内に位置する。規模は長軸 2.0m 、短軸 1.1m 、深さ 60cm 前後を測る。平面形は長方形を呈する。覆土は上層でＣ軽石粒を含む粘性の黒色土で、層位が下がるに従い粘性を帯びる。遺物は確認面で摩滅した石斧１点が出土した。

5 号 土 坑（第３３図、図版９）

Ｄ－１グリット内に位置する。規模は長軸 1.2 m、短軸 1.15m、深さ 56cm 前後を測る。平面形は円形を呈する。覆土はＣ軽石粒を含む褐色土を基調にしている。遺物は覆土から須恵器片、土師器片数点が出土した。

6 号 土 坑（第３３図、図版９）

Ｅ－２グリット内に位置する。規模は長軸 1.25m、短軸 1.2 m、深さ 53cm 前後を測る。平面形は円形を呈する。覆土はＣ軽石粒を含む褐色土を基調にしている。遺物は確認面上で土師器片、須恵器片、灰釉陶器片を、覆土中では石鏃等がそれぞれ出土した。

7 号 土 坑（第３３図、図版９）

Ｅ－１グリット内に位置する。規模は長軸 1.5 m、短軸 1.3 m、深さ 50cm 前後を測る。平面形は円形を呈する。覆土はＣ軽石粒を含む褐色土を基調にしている。遺物は確認面上で、土師器片を覆土中より円礫を１点それぞれ出土した。

3　そ の 他

1 グ リ ッ ト（第２８図、図版８）

調査区の西壁脇に位置し、Ｄ－０からＥ－０グリットにかけて所在する。確認時に土器片の散布が見られたため、住居跡の存在が懸念されていたが、既に撹乱を受けており住居跡は確認できなかった。遺物は灰釉陶器皿、須恵器埦、等を出土した。

2 グリット（第２９・３０図、図版８）

調査区西南隅に位置し、Ｆ－０からＧ－０グリットにかけて所在する。グリット内からカマド２基を確認したが、耕作時の溝２条により概に切られた状態であった。住居範囲は耕作時に撹乱を受けたのか確認はできなかった。

Ｆ－０グリット内のカマド（１号カマド）は崩れた状態で検出でき、焼土を残すのみで形態はなしていない。

Ｇ－グリット内のカマド（２号カマド）は上から潰された状態で確認できた。燃焼部上には土師器の甕が設置された状態で出土した。炊口部は凝灰岩の切石により、構築されており一部左袖部に補強材として丸瓦の使用が認められた。規模は測定可能な所で測り全長８０cm前後、炊口部幅５０～５５cm、燃焼部幅５０～６０cmを測る。遺物は土師器（甕・坏・高坏）、須恵器（埦・皿・甕）の破片が散在し、土錘、鉄片等も出土した。

3 グリット（第１０図、図版８）

調査区南西隅に位置し、Ｇ－２からＧ－３グリットにかけて所在する。グリット内から堅く焼き固められていた焼土跡が２ケ所で確認できたが、遺構は既に撹乱を受けており形をとどめてはいなかった。出土遺物は須恵器片、鉄製品等が出土した。

4 グリット（第３１図、図版９）

調査区中央に位置し、Ｅ－４からＦ－４グリットにかけて所在する。１０cm前後掘り下げて石の集石を確認した。カマドの一部と思われるが、焼土を少量残すのみで形態はなしていない状態であった。遺物はカマド内より須恵器の埦１点とその周辺で破片を６～７点出土した。

弥勒遺跡出土遺物観察表

註：法量は①口径②底径③高台径④器高⑤長さ⑥広端⑦狭端⑧幅⑨厚さをcmで、( ) は推定値を示す。瓦は布目側を測定した。

No	出土場所	種類	法量	胎土焼成	色調	器形・整形の特徴	遺存備考	図版
1	H -2-8	須恵器埦	①(14.0) ③7.1 ④5.5	普通還元	灰色	体部直線的に立ち上り口縁部で緩く外反。体部内外面横ナデ、内面底部横ナデ、底部右回転糸切り後雑な付高台	½残	10
2	H-2 鉄1	鉄製品刀子	⑤4.0 ⑧1.0			断面形はV字形を呈し、刀子の一部と思われる。		19
3	H -4-1	土師器坏	①(12.0) ④4.2	普通酸化	鈍い橙色	体部緩やかに彎曲、内湾する口縁部。体部外面ヘラ削り、内面ナデ口縁部内外面横ナデ。	ほぼ完形	10
4	H -5-1	土師器坏	①(12.4) ④4.0	普通酸化	鈍い橙色	丸底の底部から緩く内湾、口縁部緩く内傾。体部外面ヘラ削り、内面ナデ口縁部外面横ナデ。	ほぼ完形	10
5	H -6-1	土師器坏	①(14.2) ②6.7 ④4.0	普通酸化	橙色	器肉の厚い底部から直線的に外反し、口縁部で立ち気味口縁、体部内外面横ナデ底部右回転糸切り未調整。	ほぼ完形	10
6	H -8-1	石鏃	⑨最大 0.4 重さ 850g			刃部両面から交互押圧剥離、鋸歯状刃、凸基有茎、茎部欠損。	チャート?	10
7	H -8S1	磨石	⑤15.6 ⑧7.6 ⑨4.8			河原石を転用、断面楕円形、2面に擦痕あり。	安山岩	19
8	H -9-1	土師器甕	①(20.4)	普通酸化	橙色	口縁部直立して上位で外反、弱い「コ」の字状。胴上位横位ヘラ削り口縁部内外面横ナデ。	口縁部½残	10
9	H -10S2	多孔石	⑤13.4 ⑨9.6			両平坦面に錐揉み状の凹穴あり、½欠損10号住居カマド袖右に転用か？	安山岩	19
10	H -11~11	土師器台付甕	①(11.4) ④(14.5)	普通酸化	鈍い褐色	胴上部に最大径を有し「コ」の字気味に立ち上がる口縁部。胴上位～中位にかけ横位ヘラ削り胴下位縦位ヘラ削り、内面胴部ナデ、口縁横ナデ。	台部欠損他ほぼ完形	10
11	H -11-14	土師器甕	①17.9	普通酸化	橙色	胴上位から直立して外反する。「コ」の字口縁部胴上位に最大径を有す。胴上位横位ヘラ削り胴上位縦位ヘラ削り、内面胴部ナデ口縁部ナデ。	胴下位欠損	10
12	H -11-17	土師器坏	①(11.8) ②7.8 ④3.5	普通酸化	橙色	平底の底部から体部かけ丸味をもつ底部中央に穿孔あり底部ヘラ削り、体部下位ヘラ削り、中位ナデ。口縁部内外面横ナデ、底部内面ヘラ痕有り。	ほぼ完形	11
13	H -11-20	土師器坏	①(12.0) ②8.4 ④3.2	普通酸化	橙色	H-11-17 と同様の特徴を有す。H-11-17 と内外面調整は同じ、底部ヘラ痕は無し。	完形	11
14	H -11-27	丸瓦	⑦16.5 ⑨2.4	粗還元	暗青灰色	凸面素文縦方向ナデ、凹面布目一部ヘラ状具による縦位の摩消し右側面面取り。3～4mmの小石を含む。	狭端部から½残	20
15	H -11-28	平瓦	⑤26.5 ⑥25.2 ⑦21.0 ⑨3.0	普通還元	暗青灰色	凸面素文縦方向ナデ、凹面布目をヘラ状具により縦方向に摩消し側面ナデ調整。3～4mmの小石を含む。	完形	20
16	H -11-29	丸瓦	⑦14.3 ⑨1.5	密還元	灰色	玉縁式瓦凸面素文、横方向ナデ、凹面布目側面上左右面取り、砂粒を含む。	玉縁部から½残	20
17	H -11-31	丸瓦	⑥17.6 ⑨2.0	密還元	浅黄色	凸面縄叩後ナデによる摩消し、凹面布目接合痕を残す。右側面桶の圧痕あり、狭雑鉱物を含まない細かい胎土。	広端部から½残	20
18	H -11-32	丸瓦	⑤39.1 ⑦15.6 ⑨2.1	粗還元	灰色	凸面素文縦方向ナデ粘土紐左巻き上げ痕、ヘラ描き文字あり凹面布目側面上下左右面取り、石英、小石を含む。	広端部一部欠損	20
19	H -11-33	丸瓦	⑦14.5 ⑨2.5	粗還元	暗灰色	凸面素文縦方向ナデ、粘土紐左巻き上げ痕、凹面布目、「十」のヘラ描きあり。側面ナデ調整。石英、小石を含む。	狭端部から½残	20
20	H -11-34	丸瓦	⑨1.9	普通還元	鈍い橙色	凸面素文斜め方向ナデ凹面布目、側面ナデ調整3～4mmの小石を所々含む。	狭端部から½残	20
21	H -11 ヵ3	須恵器埦	①(1.47) ③7.1 ④5.7	普通還元	灰白色	高台を付した底部から直線的に外反し口縁部に至る。口縁・体部横ナデ、底部回転糸切り後付高台。	体部一部欠損	11
22	H -11 ヵ5	丸瓦	⑨2.1	粗還元	浅黄橙色	凸面素文、不定方向ナデ、凹面布目、左側面、面取り雲母粒子を含む。	狭端部より½残	20
23	H -11 ヵ8	丸瓦	⑦13.5 ⑨1.7	密還元	灰色	凸面素文、縦方向ヘラナデ、凹面布目、両側面、面取り狭雑鉱物をあまり含まない。	狭端部から½残	21
24	H -11 ヵ9	丸瓦	⑨1.9	粗還元	淡黄橙色	凸面素文、縦方向ヘラ削り、煤付着、凹面布目、煤付着右側面面取り、石英、雲母粒子を含む。	狭端部より½残	21
25	H -11ヵ10	丸瓦	⑤42.2 ⑨1.6	粗酸化	橙色	凸面素文、粘土紐左巻き上げ痕「仿」押印（陽刻）あり凹面布目接合痕一部ヘラ摩消し、石英、雲母粒子を含む	狭端部欠損	21
26	H -11ヵ15	土師器甕	①20.3	普通酸化	橙色	胴上部は緩やかな丸味口縁部内傾し上位で外反「コ」の字口縁がくずれた形。胴上位外面横位ヘラ削り、中位斜位ヘラ削り、胴部内面ナデ、口縁部内外面横ナデ。	½残	11
27	H -11ヵ17	須恵器坏	①(13.0) ④3.9	密還元	青灰色	立ち上がりに丸味をもち内彎しながら口縁部に至る。口縁体部内外面横ナデ底部右回転糸切り後調整。	口縁部から体部へ亀裂	11
28	H -11S1	磨石	⑤20.2 ⑧8.2 ⑨4.3 重さ 1190g			河原石を転用、断面形は扁平な三角形、2面に擦痕あり	安山岩	19
29	H -12 -1	土師器甕	胴径 27.0	粗酸化	鈍い褐色	底部から胴部にかけ境が明瞭でない。胴中位に最大径を有す。胴下位外面斜位ヘラ削り、内面横位ヘラナデ。	底部・胴部一部残	11
30	H-12確1	土師器坏	①(12.8) ④(4.9)	普通酸化	明赤褐色	彎曲する体部から緩く内傾し口唇部は外反する口縁部。体部外面ヘラ削り、内面放射状暗文の研き、口縁部内外面横ナデ。	½残	12
31	H -13 -1	土師器坏	①(21.2) ④(6.2)	密酸化	鈍い橙色	緩く、内彎する体部から強い稜線を有し外反する口縁部体部外面ヘラ削り、内面ナデ口縁部内外面横ナデ。	½残	12
32	H -14 -1	須恵器双口瓶	②7.5 ④(16.9)	普通還元	灰色	体部下位中央部くびれ内部2室に仕切られる口縁部外反外面沈線により作出された凸帯5条めぐるその間一条の波状文。口縁部4条の波状文底部脚部痕残す。内面口縁部ナデ体、底部ナデ。	口縁・脚部欠損	12
33	H -14 -2	土師器坏	①(13.0) ④4.9	粗酸化	鈍い橙色	底部と体部を描く沈線をもつ。体部と口縁部を描く稜線は明瞭でない。体、底部外面ヘラ削り、内外面黒色処理口縁部内外面横ナデ。	口縁部½欠損	12

No	出土場所	種類	法量	胎土焼成	色調	器形・成形の特徴	遺存備考	図版
34	H -14 -6	土師器甕	①19.4 ④26.9	粗 酸化	鈍い褐色	平底の底部から丸味をもって立ち上がり最大形を有す。胴中位に至る。口縁部「ハ」の字状に外反。胴上位～中位縦位ヘラ削り下位斜位ヘラ削り、内面胴中位横ナデ、下位ナデ。	ほぼ完形	12
35	H -14 -7	土師器高坏	②(5.0) ④脚部 (15.2)	普通酸化	橙 色	脚部は大きくラッパ状に開く、器肉は均一である。脚部外面縦位ナデ内面横ナデ輪積痕を残す。	脚部のみ残	12
36	H -14 -9	土師器長甕	①20.0 ④37.3	粗 酸化	鈍い褐色	平底の底部から彎曲しながら立ち上り胴中位、上位は直立気味、口縁部緩く外反。胴部全面縦位のヘラ削り、内面横ナデ、口縁部内外面横ナデ。	ほぼ完形	12
37	H -14-10	土師器丸胴甕	①16.4 ②6.8 ④ 22.4	粗 酸化	淡黄色	平底の底部から胴部で大きく張る丸胴口縁部開き気味に外反。胴上位横位ヘラ削り、中位斜位ヘラ削り、内面ヘラナデ、口縁部内外面横ナデ。	½ 残	13
38	H -14-11	土師器長甕	①16.6 ④(30.7)	普通酸化	鈍い橙色	胴部下位に最大径を有し上位でややすぼむ、口縁部緩く外反するが歪あり。胴部全面縦位ヘラ削り、内面上位中位横位ヘラナデ、胴下位ヘラ削り、口縁部内外面横ナデ	底部欠損	13
39	H -14-12	土師器坏	①(14.0) ④3.9	普通酸化	鈍い褐色	体部は扁平を呈し稜線を有して口縁部に至る。体部外面ヘラ削り内面ナデ口縁部内外面横ナデ。	内外面煤付着½残	13
40	H -14-13	土師器長甕	①18.6 ④(31.0)	粗 酸化	鈍い褐色	胴部下位は脹らみをもち同中位から上位にかけて直立気味に立ち上がる、口縁部大きく反って開く。胴部外面全面縦位ヘラ削り、内面横位ヘラナデ、口縁部内外面横ナデ。	底部欠損	13
41	H -14-14	土師器長甕	①20.0 ②(6.5) ④38.2	粗 酸化	鈍い褐色	胴下位～上位にかけ緩やかに脹らみ中位に最大径を有す口縁部緩く外反。胴上位～中位外面縦位ヘラ削り、下位斜位ヘラ削り、内面全面横位ヘラナデ、口縁部内外面横ナデ。	底部欠損	13
42	H -14-15	土師器長甕	①19.0 ②5.4 ④35.5	粗 酸化	橙 色	平底の底部緩やかに外反する胴下位、脹らみをもつ中位及び上位、口縁部反って開く。胴部外面全面縦位ヘラ削り、内面横ナデ口縁部内外面横ナデ。	完 形	13
43	H -14-16	土師器長甕	①18.9 ④(31.8)	粗 酸化	橙 色	胴部下位緩く外反し、中位～上位は直立に立ち上がる、緩く外反する口縁部。胴部外面全面縦位ヘラ削り、内面横ナデ口縁部内外面横ナデ。	底部一部欠損	13
44	H -15 -1	須恵器塊	①(15.4) ③7.0 ④5.7	粗 還元	灰 色	体部は彎曲気味に立ち上がり、口縁部緩く外反。口縁・体部内外面横ナデ底部回転糸切り後付高台。	体部⅓欠損	13
45	H -15 -2	土師器坏	①(13.4) ②5.9 ④3.4	普通酸化	鈍い橙色	体部は立ち上がりに丸味をもち、口縁部で開き気味に外反する。口縁・体部内外面横ナデ、底部右回転糸切り未調整。	体部⅓欠損	14
46	H -18 -1	土師器坏	①(12.4) ④ 3.6	粗 酸化	橙 色	平底の底部から丸味をもって立ち上がり口唇部で小さく内彎する。底部外面ヘラ削り、体部内外面指頭圧痕あり口縁部内外面横ナデ。	⅓ 欠 損	14
47	H -18 -4	土師器甕	①(21.0)	普通酸化	橙 色	口縁部は胴上より直立して上位で外反する、「コ」の字口縁を呈す。胴上位外面横位ヘラ削り、内面横位ヘラナデ口縁部内外面横ナデ。	口縁部破片	14
48	H -18-13	須恵器塊	①(15.0) ④4.6	普通還元	灰 色	体部内彎しながら立ち上がる。口縁・体部内外面横ナデ底部回転糸切り後付高台。	½ 残	14
49	H -18-14	土師器台付甕	①(10.6) ④脚部 7.0	粗 酸化	鈍い褐色	台部は大きく開き裾部がさらに外反。台部内外面横ナデ	台 部 残	14
50	H -18-17	土師器甕	①(15.0) ④(9.8)	普通酸化	橙 色	脹らみをもつ胴上位から直立して上位で外反する「コ」の字状口縁を呈す。胴上位外面横位ヘラ削り、内面ナデ口縁部内外面横ナデ。	口縁部破片	14
51	H -18-18	須恵器塊	①(16.4) ③7.8 ④5.6	普通還元	褐灰色	丸味をもつ体部から口縁部に至り、口唇部で外反。口縁体部内外面横ナデ、底部右回転糸切り後付高台、内外面煤付着。	½ 残	14
52	H -18カ1	土師器甕	① (21.1)	普通酸化	橙 色	胴部上位から直立気味に立ち上がり上位で外反する口縁部。胴上位外面横位ヘラ削り、口縁部内外面横ナデ、輪積痕跡残す。	口縁部½残	14
53	H-18鉄1	鉄 滓	長径 13.0 短径 11.0 ⑨3.0			大きさは、手掌大であり、底部に凸状の突起物あり、鍛冶滓と思われる。		15
54	H -20 -3	土師器坏	①(9.1) ②6.2 ④1.6	粗 酸化	鈍い橙色	器肉の厚い底部から直線的に外反する体部に至る。口縁・体部内外面横ナデ底部右回転糸切り未調整。	⅔ 残	15
55	H -20 -4	土師器坏	①13.0 ②7.4 ④4.2	粗 酸化	鈍い橙色	全体に器肉は厚く体部から口縁部にかけて直線的に外反する。口縁・体部内外面横ナデ底部右回転糸切り未調整	体部一部欠損	15
56	H-20カ1	平 瓦	⑨2.6	粗 酸化	橙 色	凸面：素文、不定方向ナデ煤付着、凹面：布目、左側面面取り煤付着３～５cmの小石を含む。	狭端部から⅓残	21
57	H-20カ2	土師器塊	①15.0 ②8.3 ④5.6	粗 酸化	鈍い橙色	全体に器肉は厚く、体部は丸味をもち口縁部に至る。口縁・体部内外面横ナデ底部摩滅著しく調整不明。	全体に摩滅著しい完形	15
58	H -21 -1	須恵器坏	①12.8 ②6.0 ④4.2	粗 還元	灰白色	底部から内彎気味に立ち上がる体部を経て口縁部に至る。口縁・体部内外面横ナデ底部右回転糸切り未調整。	ほぼ完形	15
59	H -21 -3	須恵器坏	①12.2 ②5.3 ④4.5	粗 還元	黒 色	体部脹らみをもって立ち上がり器肉の厚い口縁部に至る。内外面全面黒色処理、内面黒色処理後ヘラ研き。	ほぼ完形	15
60	H -21 -5	須恵器坏	①12.2 ②5.7 ④4.1	普通還元	灰白色	底部より直線的に外反する体部を過て口縁部に至る。口縁・体部内外面横ナデ底部右回転糸切り未調整。	体部⅓欠損	15
61	H -21-21	土師器甕	①(23.9)	粗 酸化	橙 色	脹みのある胴部からやや内傾し、上位で外反する口縁部に至る。胴上位外面横位ヘラ削り、中位縦位ヘラ削り内面ナデ、口縁部内外面横ナデ。	⅓ 残	15
62	H -21-24	須恵器坏	①13.0 ②7.4 ④3.5	普通還元	灰白色	上げ底気味の底部から脹みをもつ体部を経て、小さく外反する口縁部に至る。口縁・体部内外面横ナデ、底部右回転糸切り未調整。	完 形	16
63	H-21カ1	須恵器坏	①13.4 ②5.8 ④4.3	普通還元	灰 色	直線的に外反する体部を経て口縁部に至る。口縁・体部内外面横ナデ、底部右回転糸切り後付高台。	完 形	16
64	H-21カ2	須恵器塊	①14.4 ③7.3 ④5.5	普通還元	灰 色	体部下位に丸味をもち直線的に外反し口縁部に至る。口縁・体部内外面横ナデ、底部右回転糸切り後付高台。	完 形	16
65	H-21カ3	須恵器塊	①14.8 ③(6.0) ④5.0	普通還元	灰 色	体部は丸味をもって立ち上がり口縁部に至る。口縁・体部内外面横ナデ、底部右回転糸切り後付高台。	体部一部欠損	16

No	出土場所	種類	法量	胎土焼成	色調	器形・成形の特徴	遺存備考	図版
66	H-21カ4	須恵器蓋	①20.2 ④(5.3)	粗 還元	灰白色	天井部器肉厚く彎曲し口縁部に至る。口縁は開き気味に外反。天井部外面回転ヘラ削り、内面横ナデ口縁・体部内外面横ナデ鈕痕あり。	⅓ 残	16
67	H-21カ5	須恵器甕	③(11.0)	密 還元	暗青灰色	胴下位～中位は丸味をもって立ち上がり上位は強く内傾する。胴部内外面横ナデ、底部回転ヘラ切り後付高台。	頸部欠損	16
68	H-21カ6	須恵器塊	①18.0 ③7.8 ④7.8	普通還元	灰白色	底部から僅かに脹らみをもち外反する口縁部に至る。口縁・体部内外面横ナデ底部右回転糸切り後付高台。	完 形	16
69	H-21カ7	丸 瓦	⑤43.5 ⑥19.7 ⑨2.0	粗 酸化	赤橙色	凸面：素文縦方向ナデヘラ描き文字あり、凹面：布目両側面面取り２～３mmの小石を多く含む。	広端部一部欠損	21
70	H-21カ9	土師器甕	①19.4 ④26.9	普通酸化	橙 色	脹らみをもつ胴上位直立して外反する「コ」の字状口縁を呈す。底部小さい平底。胴上位外面横位ヘラ削り、中下位縦位ヘラ削り内面横位ヘラナデ、口縁部内外面横ナデ。	完 形	16
71	H-21カ10	土師器甕	①(19.9)	普通酸化	鈍い橙色	胴上位に脹らみをもち口縁部は「コ」の字を呈す。胴上位外面横位ヘラ削り、中位縦位ヘラ削り内面横位ヘラナデ指頭圧痕あり。	¼ 残	17
72	H-21カ12	土師器甕	①(11.6) ④(11.4)	普通酸化	鈍い橙色	胴上位に脹らみをもち口縁部彎曲して外反。胴上位外面横位ヘラ削り、中位縦位ヘラ削り内面ナデ口縁部内外面横ナデ。	⅓ 残	17
73	H-21カ13	須恵器高台付皿	③7.1 ④2.9	密 還元	灰白色	高台を付した底部から直線的に外反し口唇部で大きく開く。口縁・体部内外面横ナデ、底部右回転糸切り後付高台。	体部欠損	17
74	H-21カ17	平 瓦	⑥27.0 ⑨2.1	普通還元	青灰色	凸面：素文、側面左右からのナデヘラ記号あり、凹面：布目、側面上左右面取り２～３mm小石を含む。	広端部から½残	21
75	H-21カ18	丸 瓦	⑤40.0 ⑥22.5 ⑦14.8 ⑨3.2	粗 還元	暗青灰色	凸面：素文、縦方向ナデヘラ描文字あり、凹面布目、側面上左右面取り。砂粒を多く含む。	完 形	21
76	H-21S7	磨 石	⑤29.2 ⑨9.2			½欠損した大型の円礫使用、断面は扁平を呈す。平坦面と端部に擦痕あり。下から土器、焼土を確認。	安山岩	19
77	1G-1	灰釉皿	①13.3 ③7.1 ④2.7	密 還元	灰白色	底部から緩く彎曲しながら立ち上がり口縁部に至る。口縁・体部内外面横ナデ、底部回転糸切り後横ナデ。	体部一部欠損	17
78	1G-2	須恵器塊	①11.6 ③6.8 ④4.5	粗 還元	暗青灰色	体部中位に丸味をち、口縁部で開き気味に外反。口縁・体部内外面横ナデ、底部右回転糸切り後付高台。	体部一部欠損	17
79	1G-3	須恵器塊	①11.8 ③6.2 ④4.1	粗 還元	灰白色	体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部で開き気味に外反。口縁・体部内外面横ナデ、底部右回転糸切り後付高台。	体部一部欠損	17
80	2G-6	須恵器土錘	①2.0 ⑤6.0 中央径 3.5 穿孔径 1.0	普通還元	灰白色	胴中央部に最大径を有し、両端ですぼむビア樽型を呈す。	完 形	19
81	2G-19	須恵器塊	①15.5 ③8.2 ④5.8	密 還元	灰白色	体部器肉厚く下位に丸味をもつ、口縁部開き気味に外反。口縁・体部内外面横ナデ、底部糸切り後付高台。	体部一部欠損	17
82	2G-21	須恵器高台付皿	①13.6 ③8.3 ④2.5	普通還元	灰白色	高台を付した底部から直線的に外反する。口縁・体部内外面横ナデ、底部右回転糸切り後付高台。	体部½欠損	17
83	2G-28	須恵器土錘	①0.8 ⑤5.4 中央径1.5 穿孔径 0.4	粗 還元	灰白色	胴部は細長く全体に丸味をもつ。	完 形	19
84	2G-33	鉄製品釘	⑤8.2			断面形は四角を呈し、頭部が曲がる。先端部は細く薄い。		19
85	2G-39	土師器土錘	①1.2 ～1.4 ⑤3.2 中央径2.0 穿孔径 0.3	粗 酸化	赤橙色	胴中央部に最大径を有し両端ですぼむ、ビア樽形を呈す。	両端部欠損	19
86	2G-カ1	土師器甕	①21.5 ②4.9 ④26.5	普通酸化	赤橙色	小さい平底から胴上位に最大径を有す。口縁部彎曲し外反する。胴上位外面横位ヘラ削り、中、下位斜位ヘラ削り、口縁部内外面横ナデ、内面中位に接合痕あり。	⅔ 残	18
87	2G-カ2	丸 瓦	⑤40.0 ⑨2.4	普通酸化	鈍い橙色	凸面：素文縦方向ナデ、粘土紐左巻き上げ痕、狭端部薄い器厚。凹面：布目、右側面面取り、内外面煤付着。	左側面部欠損	21
88	3G-1	鉄製品不明	⑤6.7 ⑧5.0 ×5.0			断面形は四角を呈す。全体の形はとどめない。		19
89	3G-7	鉄製品刀子	⑤5.2 ⑧1.2			断面形はＶ字形を呈す。刀子の一部と思われる。		19
90	3G-9	鉄製品不明	⑤4.5			錆化が激しく形をとどめない。		19
91	4G-2	須恵器塊	③6.4	粗 還元	灰白色	体部下位に丸味をもち直線的に外反する。体部内外面横ナデ、底部糸切り後付高台。	⅓ 残	18
92	2トレ-1	土師器坏	①9.6 ②6.4 ④2.0	普通酸化	鈍い橙色	平底の底から直線的に外反する短い体部。体部内外面横ナデ、底部右回転糸切り未調整。	完 形	18
93	2トレ-2	土師器坏	①9.8 ②6.0 ④2.1	普通酸化	鈍い橙色	平底の底部から直線的に外反する短い体部。体部内外面横ナデ、体部外面煤付着、底部右回転糸切り未調整。	完 形	18
94	2トレ-3	土師器坏	①10.4 ②6.4 ④2.1	普通酸化	鈍い橙色	平底の底部から直線的に外反する短い体部。体部内外面横ナデ、底部右回転糸切り未調整。	ほぼ完形	18
95	2トレ-5	土師器坏	①9.4 ②6.2 ④1.7	普通酸化	鈍い橙色	平底の底部から開き気味の短い体部。体部内外面横ナデ、底部右回転糸切り未調整。	完 形	18
96	2トレ-8	土師器坏	①8.8 ②4.6 ④2.1	普通酸化	鈍い橙色	直線的に外反する体部、口唇部に面をもつ口縁部。口縁・体部内外面横ナデ底部右回転糸切り未調整。	ほぼ完形	18
97	2トレ-10	土師器坏	①9.5 ②6.3 ④1.8	普通酸化	鈍い橙色	平底の底部から直線的に外反する短い体部。体部内外面横ナデ、体部外面煤付着底部右回転糸切り未調整。	完 形	18
98	2トレ-11	土師器坏	①10.0 ②6.0 ④1.8	普通酸化	鈍い橙色	平底の底部から直線的に外反する短い体部。体部内外面横ナデ、底部右回転糸切り未調整。	完 形	19
99	D-4S1	打製石斧	⑤16.1 ⑧8.0 ⑨2.5			形状は細長く胴中央部緩くくびれる分銅型。片面に礫面を残す。摩滅著しい。	頁 岩	19
100	D-7S1	磨 石	⑤18.2 ⑧17.2 ⑨5.2			河原石転用、形状は円礫で扁平である。片面擦痕あり。	安山岩	19

Ⅲ　おわりに

弥勒遺跡は前橋市元総社町字弥勒に位置し、染谷川の河岸台地上に在り、古代上野国の中枢をなした国府推定域や国分僧寺・尼寺を周辺に要するなど、これらとの関連が考えられる遺跡である。調査は住居跡２１軒、土坑９基（内２基は住居内に在る。）を確認したが遺存状態は悪く、平安時代の住居跡が主体をなしている。古墳時代後期の住居跡を２軒確認できた。以下、当遺跡における、遺構・遺物の特徴を記して結びとしたい。

遺構について

1　平安時代の住居跡は、横長の隅丸方形を呈するプランが多く、カマドは東壁南寄りに位置し、２号、１１号、１５号、１６号、２０号、２１号住居跡に見られる。

2　貼床を施す住居跡は、基本土層の３層付近まで掘り込まれ、その後貼床を設ける傾向にある。貼床はほぼ全面に貼られて在り、３号、４号、１１号、住居跡に認られた。

3　カマド構築材として、丸瓦、平瓦が凝灰岩の切石と伴に使用され、丸瓦１３、平瓦３、玉縁式瓦１が出土しており丸瓦の量が多い。瓦の使用方法は、そのままの形で構架材に用いる他、数片に割り袖石の補強もしくは袖石の代わりとして使用されていた。顕著なものとして１１号、２１号住居跡２グリット内２号カマドが上げられる。なおカマド構築に瓦を使用した例として、近隣する草作遺跡を上げることができる。

出土遺物について

1　土師・須恵器は、古墳時代後期から平安時代にかけてのものが出土している。古墳時代後期の土器は、１２号、１４号住居跡に見られ、１２号住居跡出土の坏は南関東における鬼高Ⅰの様相を示している。特筆する土器として、１４号住居跡出土の甕が上げられ、下ぶくれした体部は、内部を２室に仕切られ２つの注口をもち、器面には沈線により造り出された凸帯と口縁部から体部下位にかけて櫛描波状文が施されており、同時に出土の坏、高坏、甕類は、５世紀末から７世紀代と時間的幅が認められる。

平安時代の土器は６号、９号、１１号、１５号、１８号、２０号、２１号住居跡、１グリット２グリット、２トレンチなどで確認でき、特に１１号、１８号、２１号住居跡で、口縁部が「コ」の字状を呈す甕と「コ」の字が崩れ始めたものが出土しており９世紀後半から１０世紀前半代の様相を呈すと思われる。２グリット内２号カマドから出土した甕は「コ」の字状口縁を意識した甕と思われ、９世紀前半から中頃の時期のものと考えたい。また、１グリット内より出土

した灰釉陶器皿は、器形の特徴から東濃糸虎渓山１号窯式に比定できよう。

Ｂ軽石に埋積された６号住居跡出土の坏は皿状を呈しており、全体に器肉が厚く、底径は口径の約½を示し、底部は右回転糸切り未調整であった。１２世紀前半代の可能性が考えられる。

２０号住居跡と２トレンチ内から一般にカワラケまたは灯明皿と呼ばれている土師器の小皿が出土した。器肉は全体に厚く、内面は浅く扁平気味である。底径は大きく口径の約⅔程を測る。しかし２トレンチ－８の小皿は器肉が他の小皿より薄く、ぼってりとした感じはない。口唇部は面取りがされており底径も口径の約½程で、他との違いが認られた。

2　出土した文字瓦

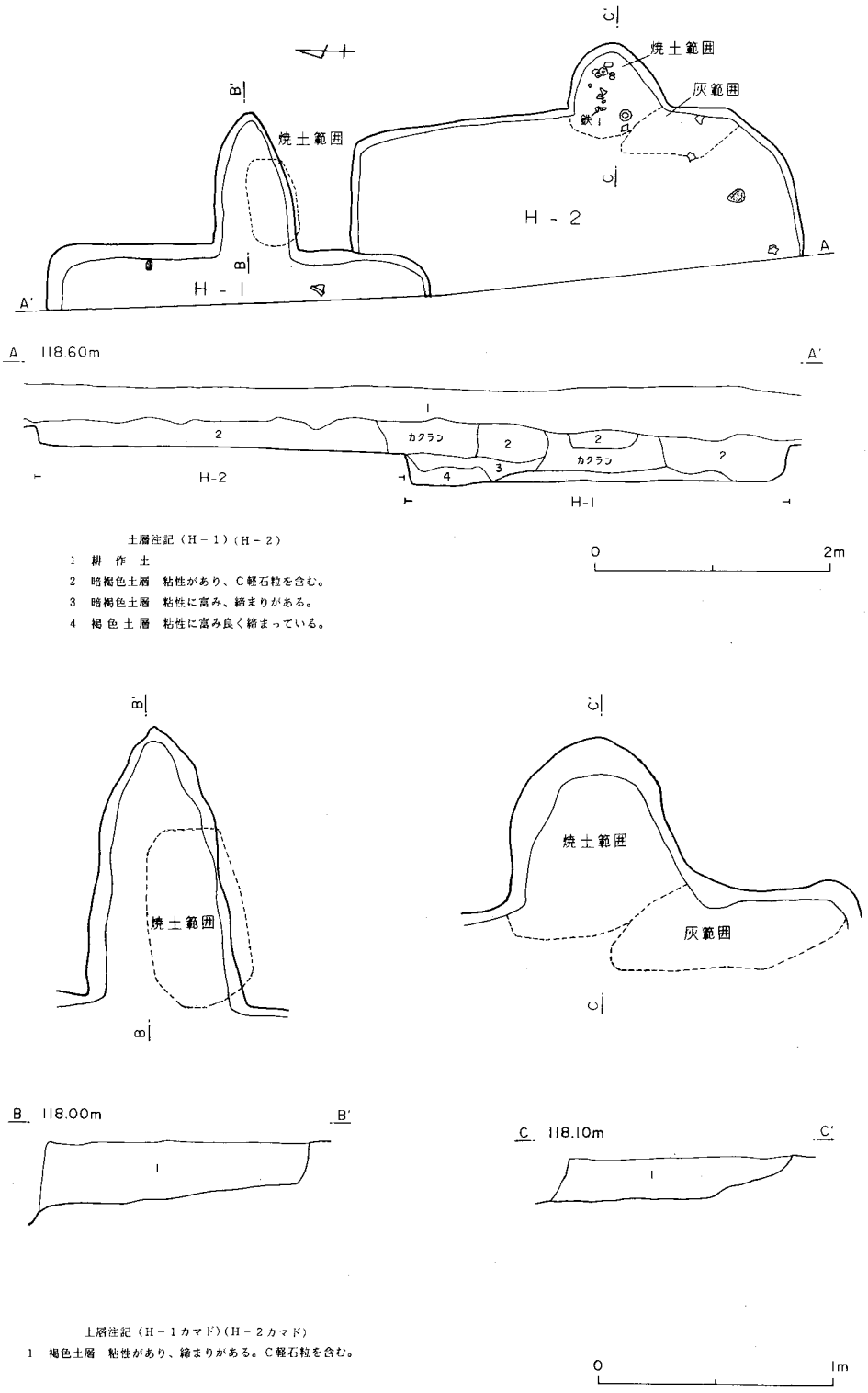
No	内　　容	種　　類	部　　位	出土位置	備　　考	図版No
1	仿（佐）	押印（陽刻）	丸瓦凸面	11号住 ｶﾏﾄ10	佐位郡（佐位郷）の省略型と考えられる。	22
2	□子里長？	ヘラ描き	丸瓦凸面	11号住 No 32	「郷名＋名」の型と思われる。	22
3	十	ヘラ描き	丸瓦凹面	11号住 No 33		22
4	□（不明）	ヘラ描き	丸瓦凸面	21号住 ｶﾏﾄ 7	欠損のため一部残る。	22
5		ヘラ描き	丸瓦凸面	21号住 ｶﾏﾄ17		22
6	山？	ヘラ描き	丸瓦凸面	21号住 ｶﾏﾄ18		22

なお、注目される点は、No１の「仿」の押印で、同様のものと思われる押印瓦が上野国分寺跡及び上植木廃寺跡から出土しており、このことから、これらの瓦は上野国分寺からもたらされた可能性があると考えられる。

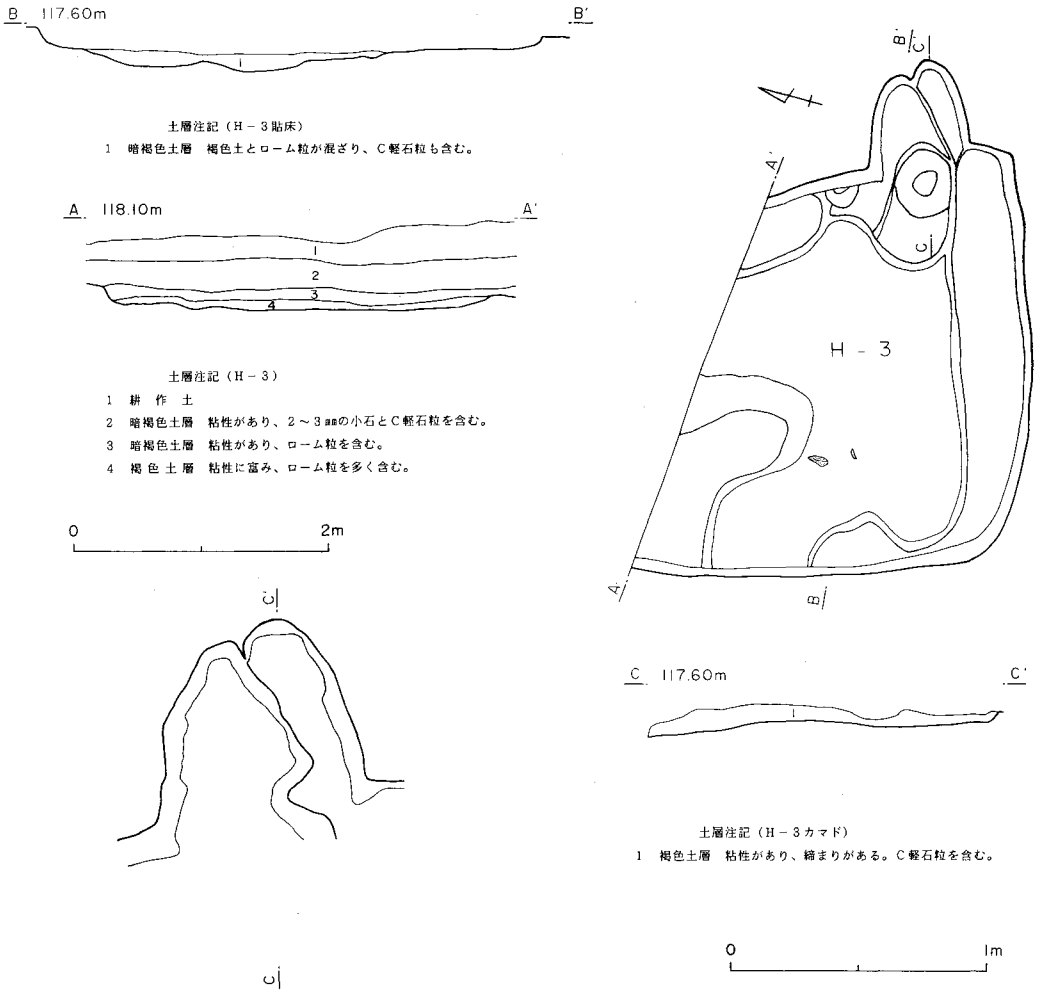
最後に御指導、御助言及び御協力戴いた方々に感謝すると共にこの報告書が今後の調査・研究の一助になることを期待して結びと致します。

参考文献

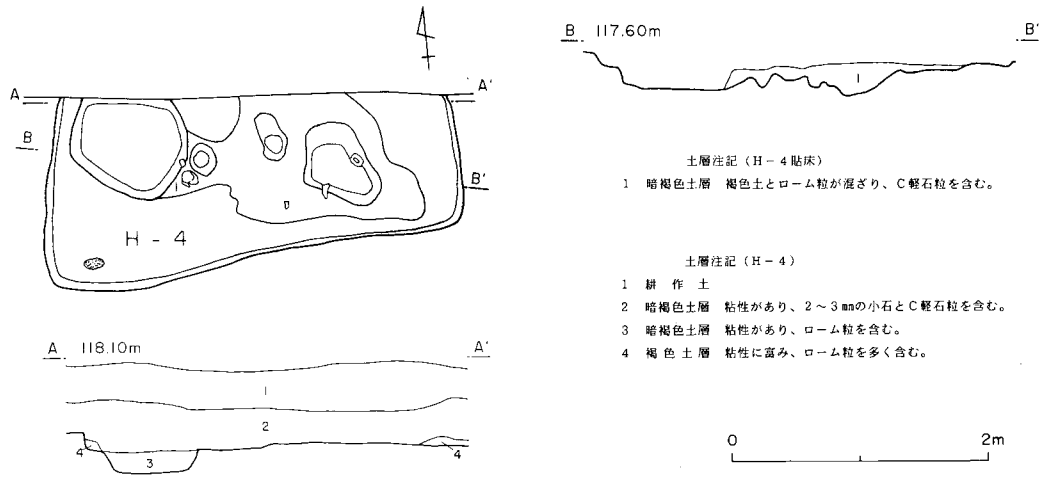
「草作遺跡」（前橋市埋蔵文化財発掘調査団）１９８５
「清里・陣場遺跡」（財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団）１９８１
「陶邑古窯址群Ⅰ」（平安学園考古学クラブ）１９６６
「中尾遺跡」（財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団）１９８４
「鳥羽遺跡」（財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団）１９８６
「上植木廃寺」（昭和６１年度発掘調査概報　伊勢崎市教育委員会）１９８６
「三河国分寺跡」（豊川市教育委員会）１９８９
坂口一・三浦京子　「奈良・平安時代の土器編年」　群馬県史研究２４号　群馬県史編纂委員会　１９８６
坂口一　「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」研究紀要４
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　１９８７
茂木由行　「群馬県における鬼高式土器の編年」群馬考古通信第９号　群馬県考古学談話会　１９８４
前沢和之　「上野国分寺について」（レジメより）群馬県教育委員会　１９８６



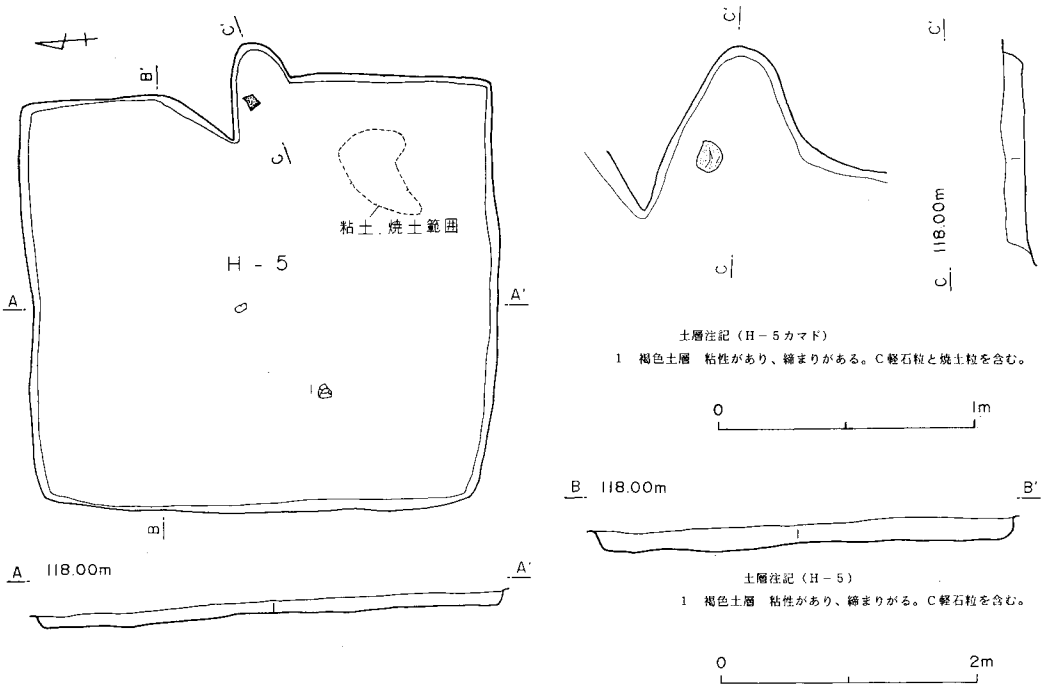
第3図　1号住居跡・2号住居跡・カマド実測図



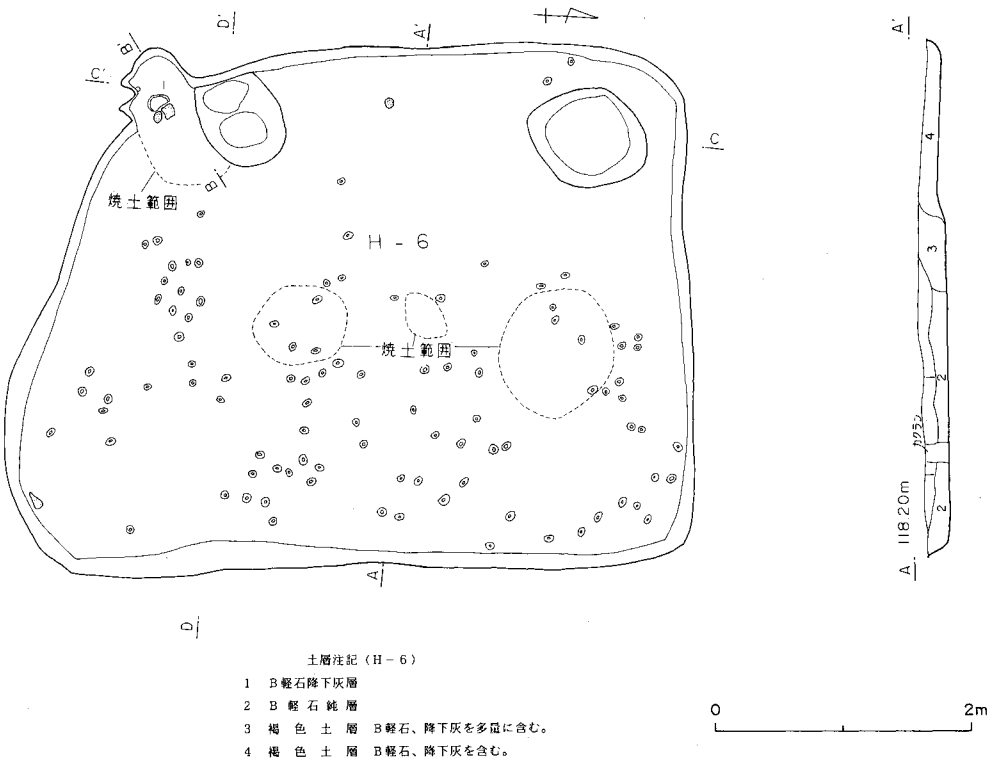
第4図　3号住居跡・カマド実測図



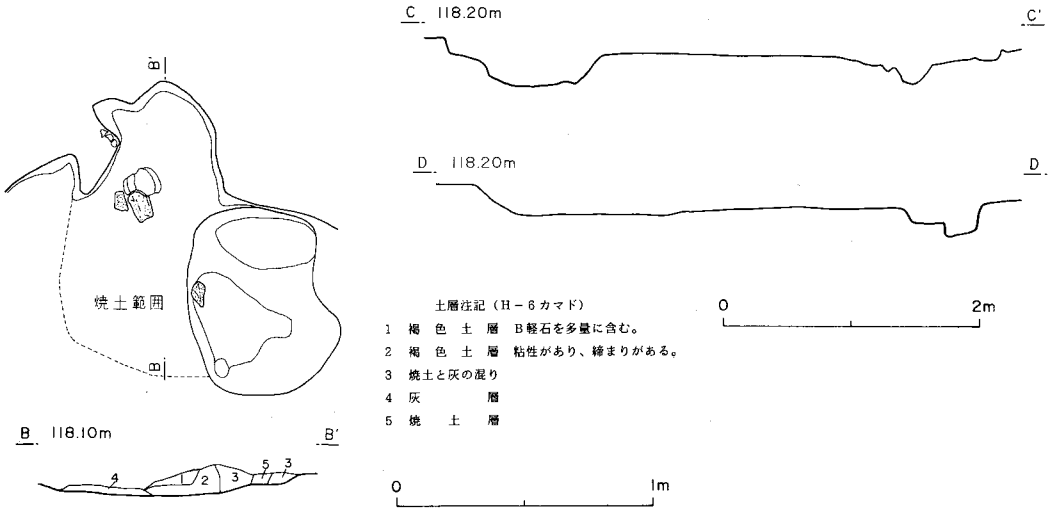
第5図　4号住居跡実測図



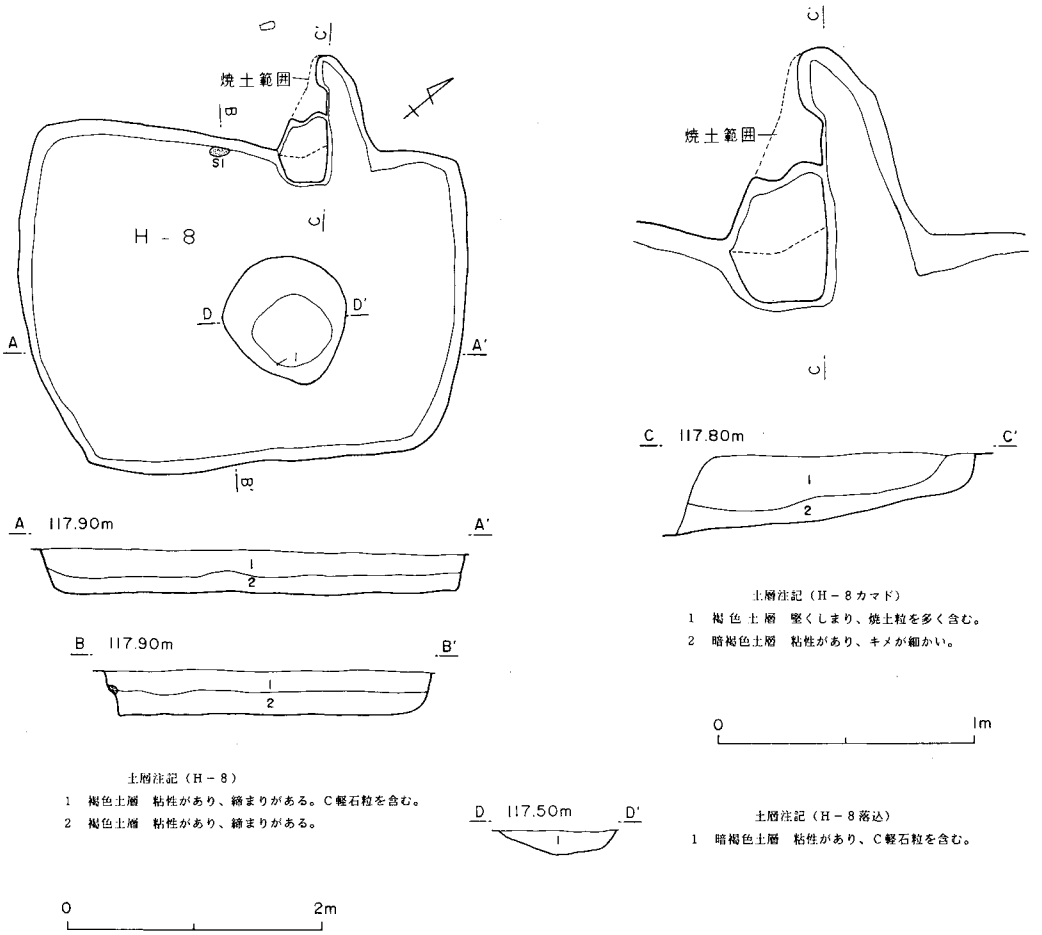
第6図　5号住居跡・カマド実測図



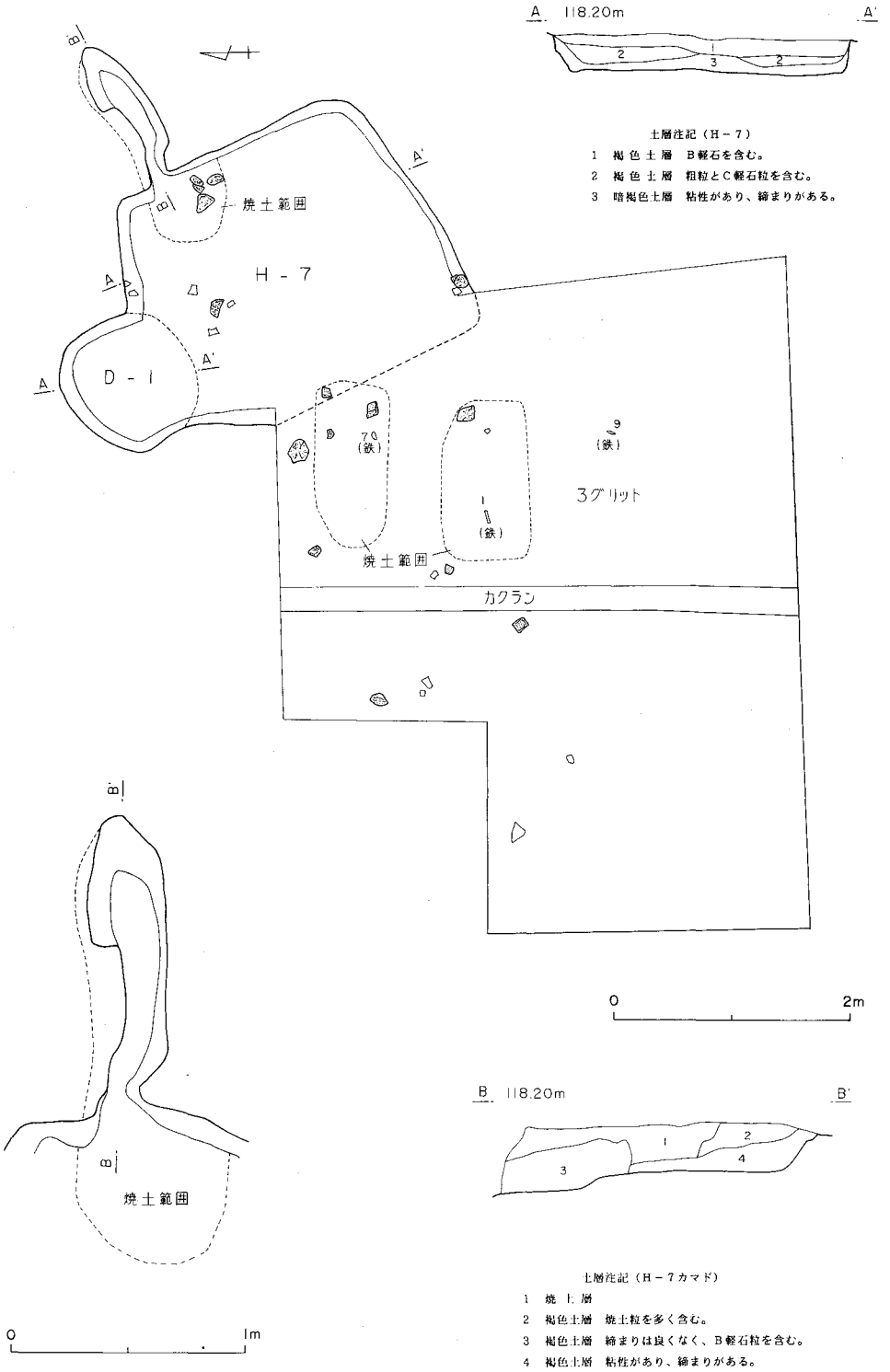
第7図　6号住居跡実測図



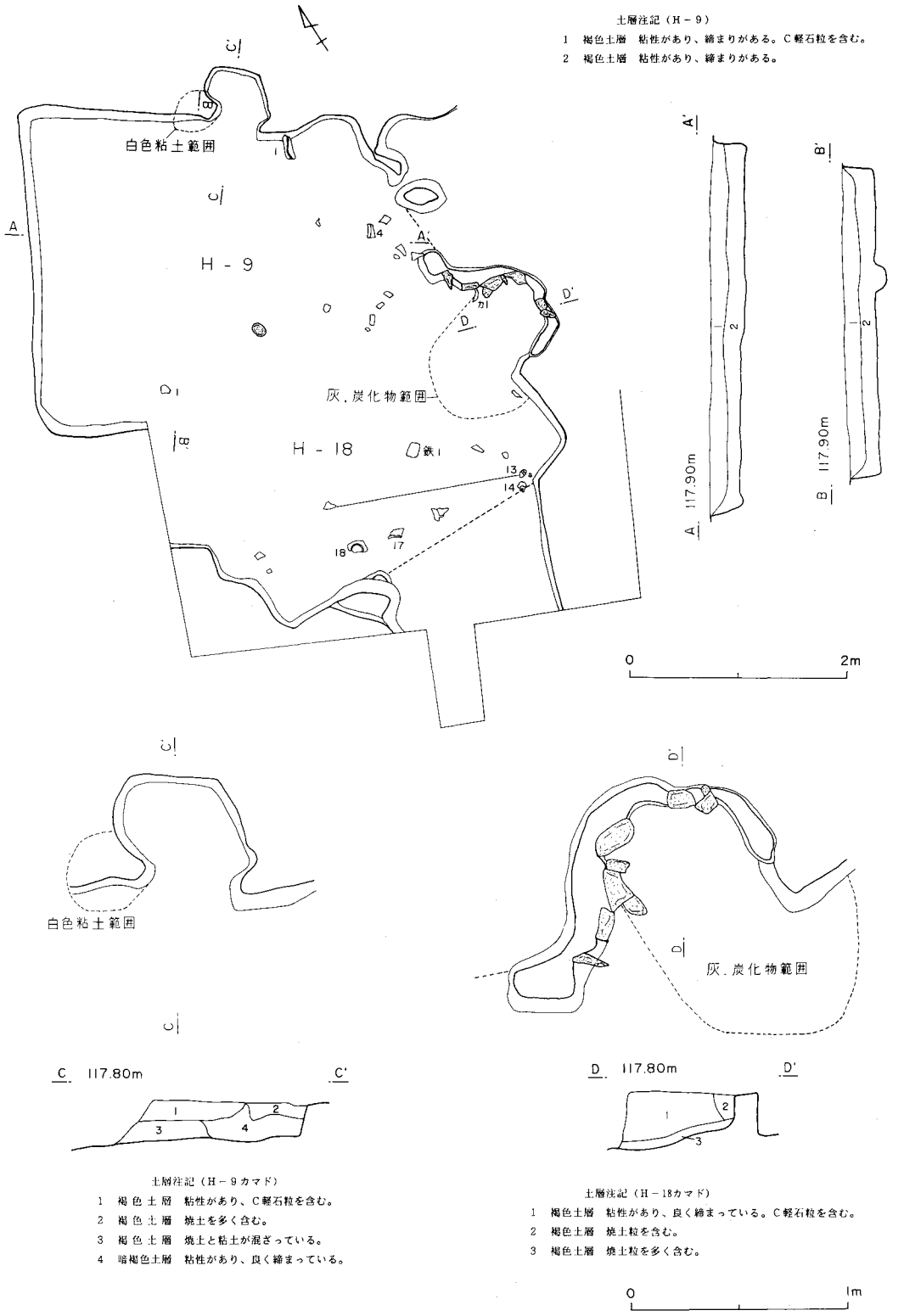
第8図　6号住居跡・カマド・エレベーション実測図



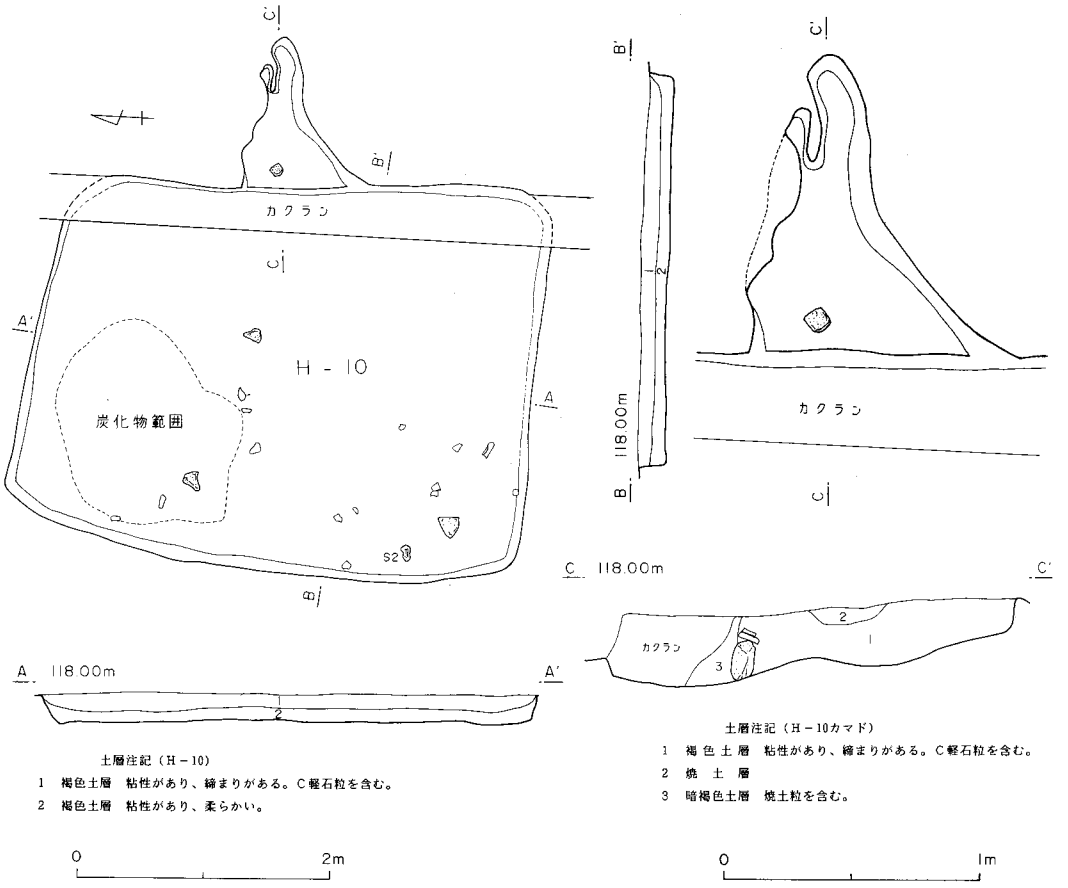
第9図　8号住居跡・カマド実測図



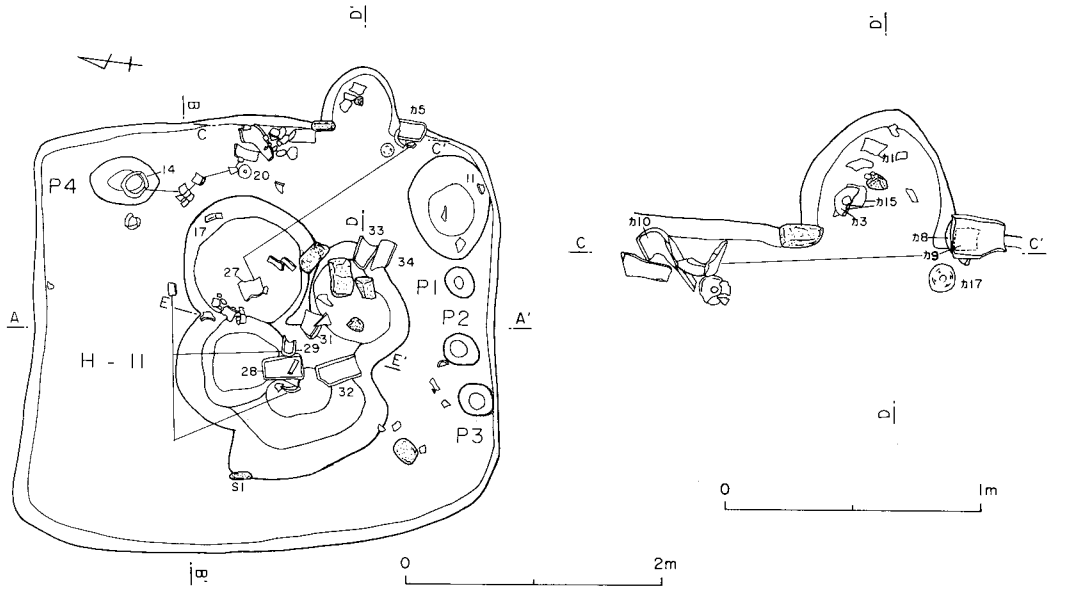
第10図　7号住居跡・カマド・3グリット実測図



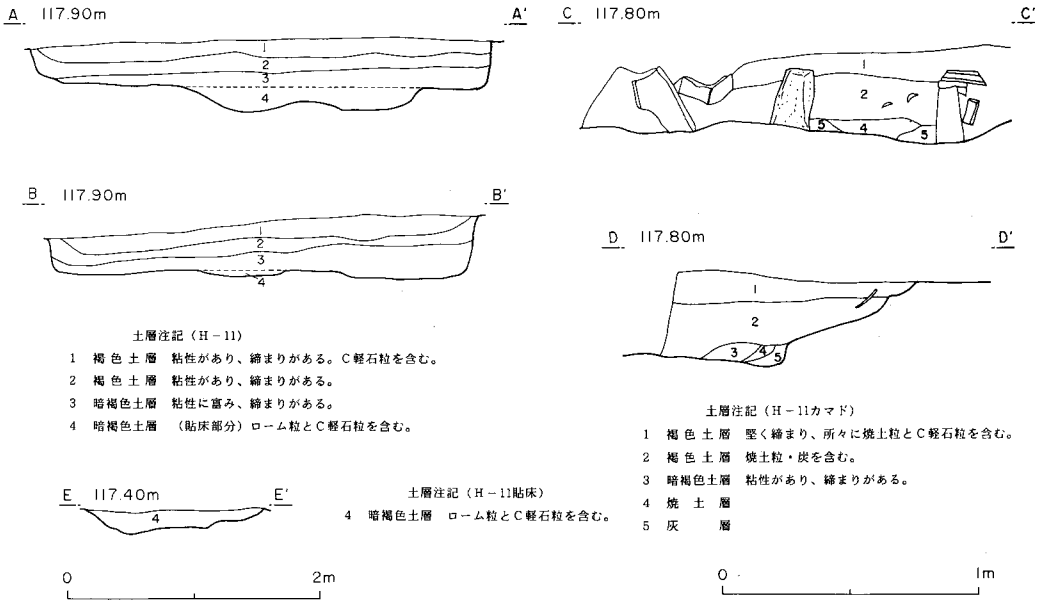
第11図　9号住居跡・18号住居跡・カマド実測図



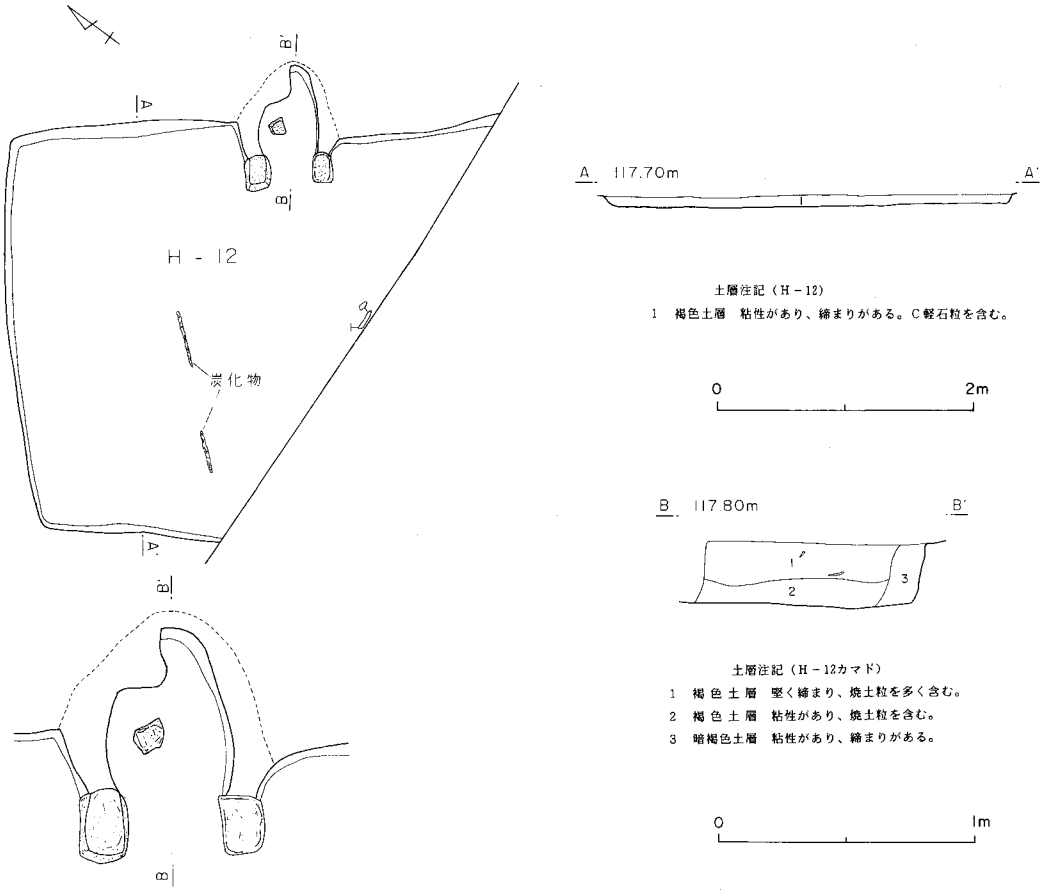
第12図　10号住居跡・カマド実測図



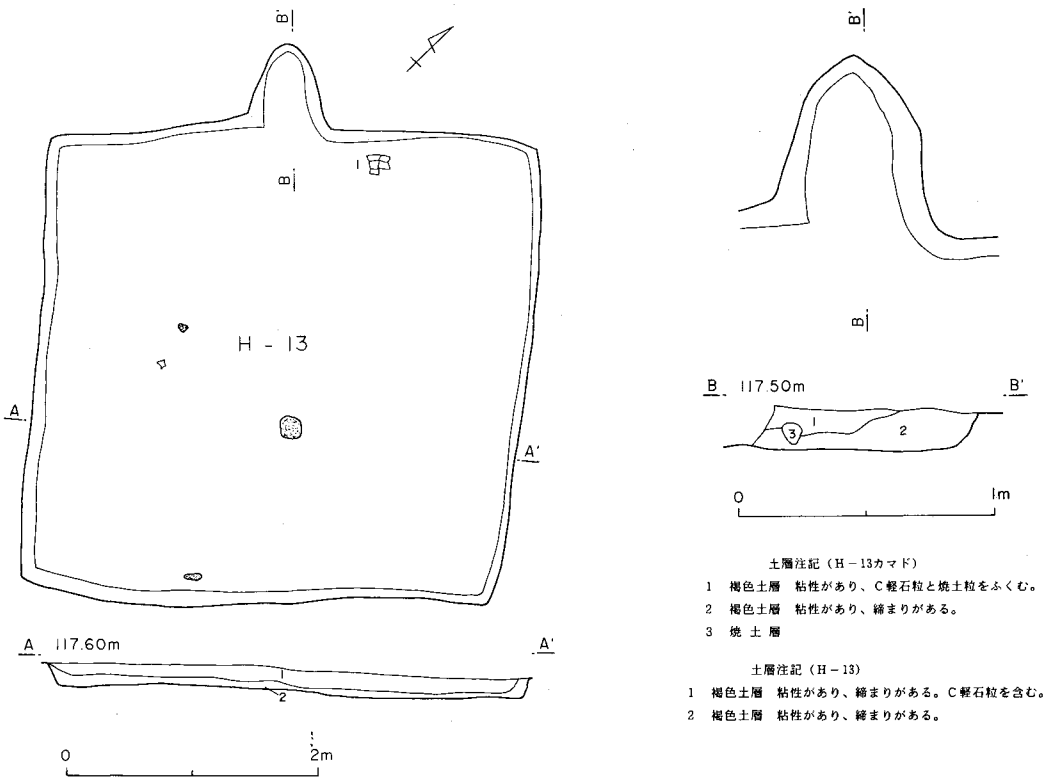
第13図　11号住居跡・カマド実測図



第14図　11号住居跡・カマド実測図



第15図　12号住居跡・カマド実測図



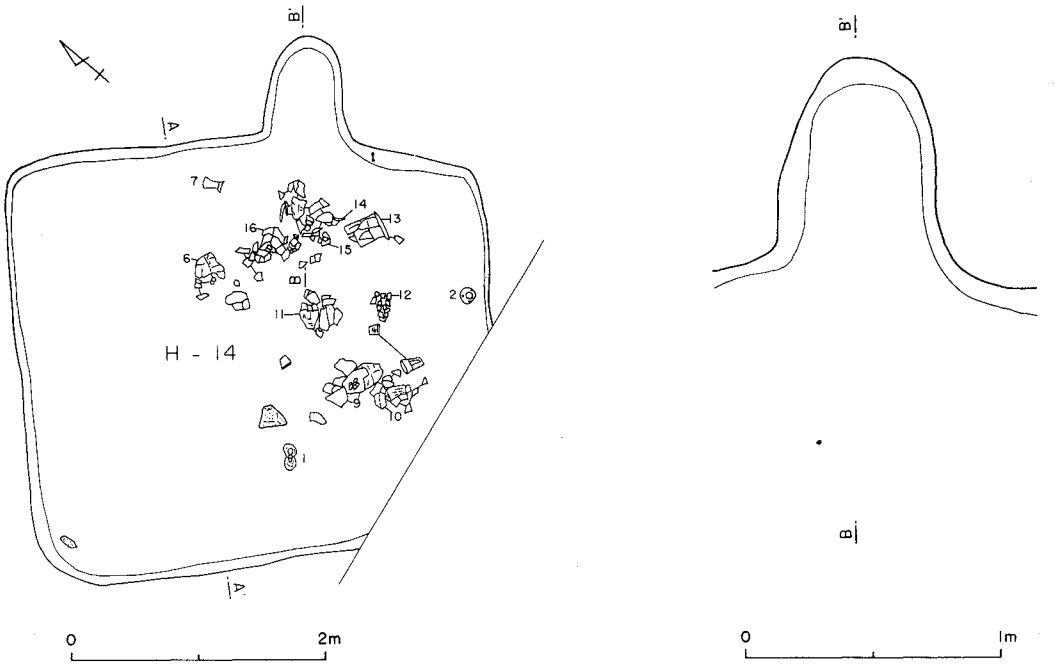
土層注記（H－13カマド）

1　褐色土層　粘性があり、C軽石粒と焼土粒をふくむ。
2　褐色土層　粘性があり、締まりがある。
3　焼土層

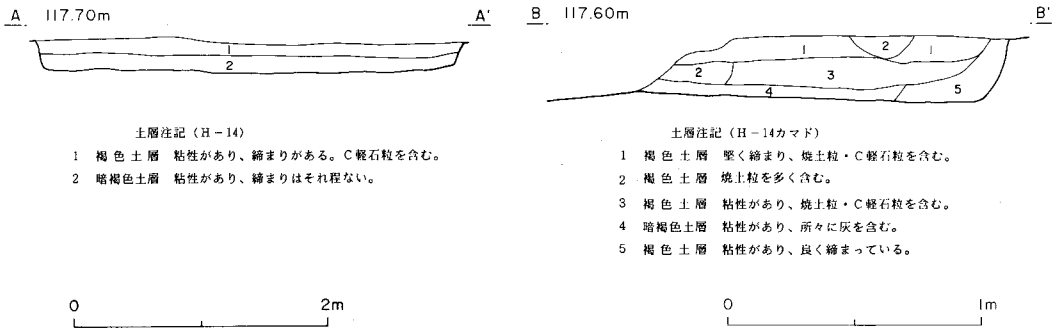
土層注記（H－13）

1　褐色土層　粘性があり、締まりがある。C軽石粒を含む。
2　褐色土層　粘性があり、締まりがある。

第16図　13号住居跡・カマド実測図



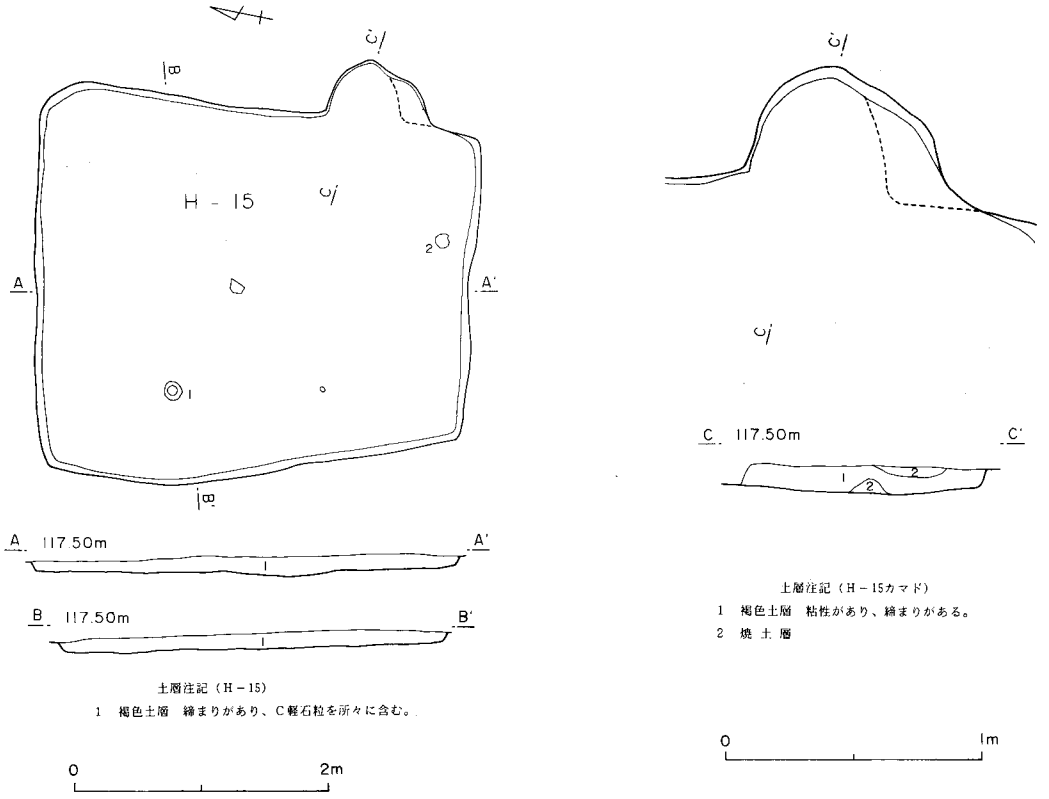
第17図　14号住居跡・カマド実測図



土層注記（H－14）
1　褐色土層　粘性があり、締まりがある。C軽石粒を含む。
2　暗褐色土層　粘性があり、締まりはそれ程ない。

土層注記（H－14カマド）
1　褐色土層　堅く締まり、焼土粒・C軽石粒を含む。
2　褐色土層　焼土粒を多く含む。
3　褐色土層　粘性があり、焼土粒・C軽石粒を含む。
4　暗褐色土層　粘性があり、所々に灰を含む。
5　褐色土層　粘性があり、良く締まっている。

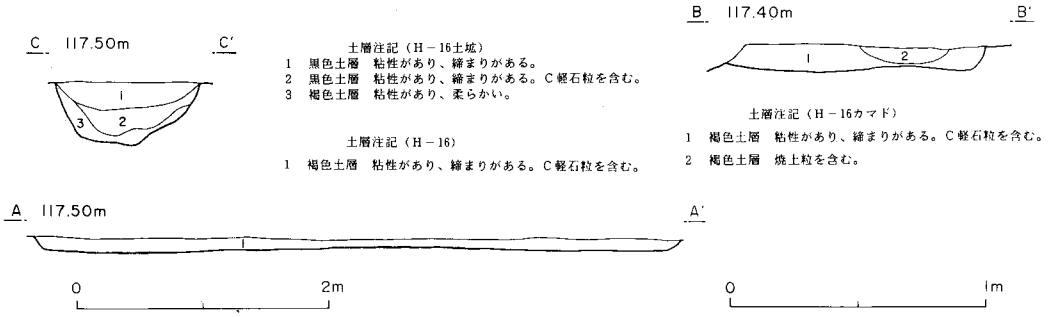
第18図　14号住居跡・カマド実測図



土層注記（H－15）
1　褐色土層　締まりがあり、C軽石粒を所々に含む。

土層注記（H－15カマド）
1　褐色土層　粘性があり、締まりがある。
2　焼土層

第19図　15号住居跡・カマド実測図

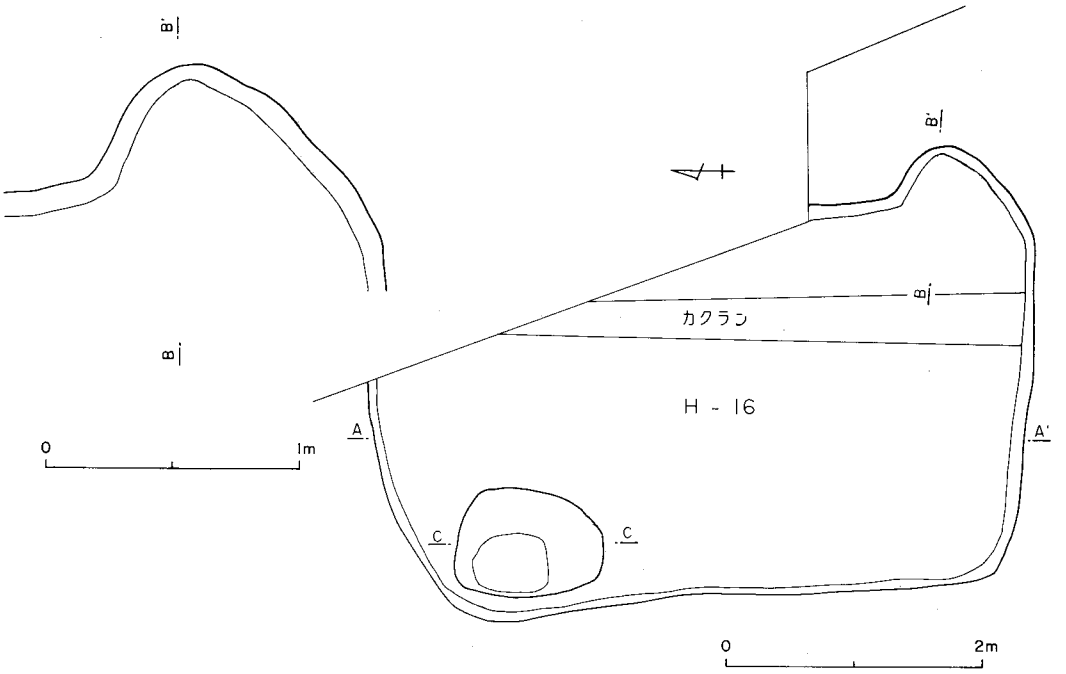


土層注記（H－16土坑）
1　黒色土層　粘性があり、締まりがある。
2　黒色土層　粘性があり、締まりがある。C軽石粒を含む。
3　褐色土層　粘性があり、柔らかい。

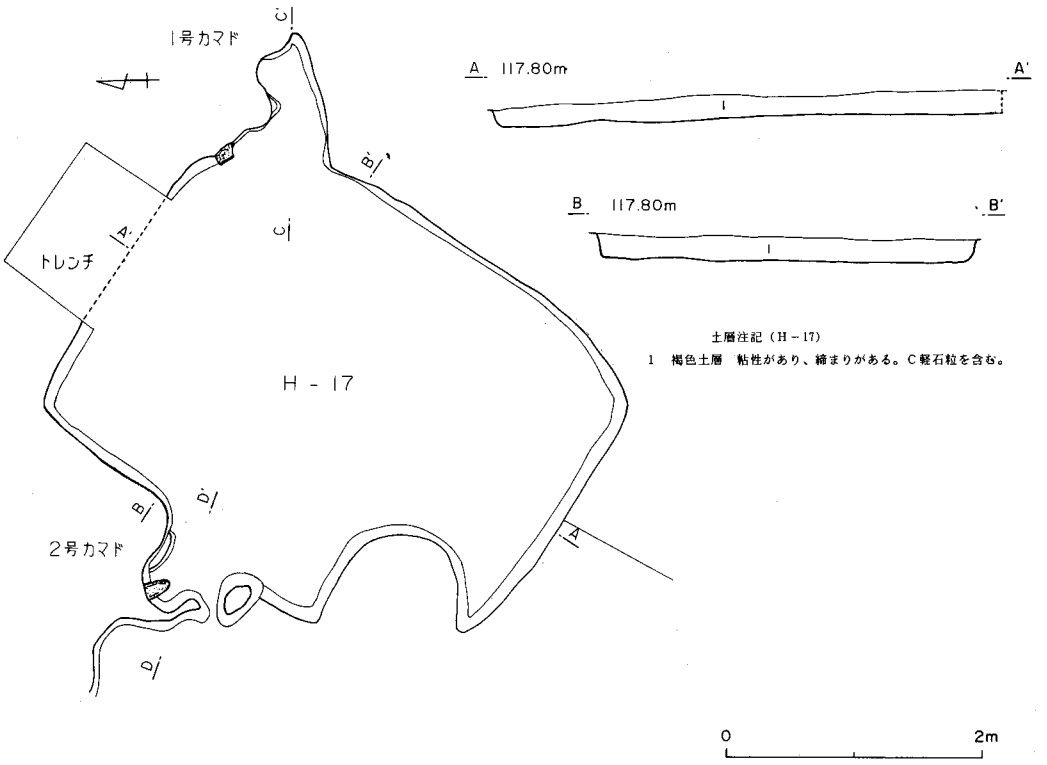
土層注記（H－16）
1　褐色土層　粘性があり、締まりがある。C軽石粒を含む。

土層注記（H－16カマド）
1　褐色土層　粘性があり、締まりがある。C軽石粒を含む。
2　褐色土層　焼土粒を含む。

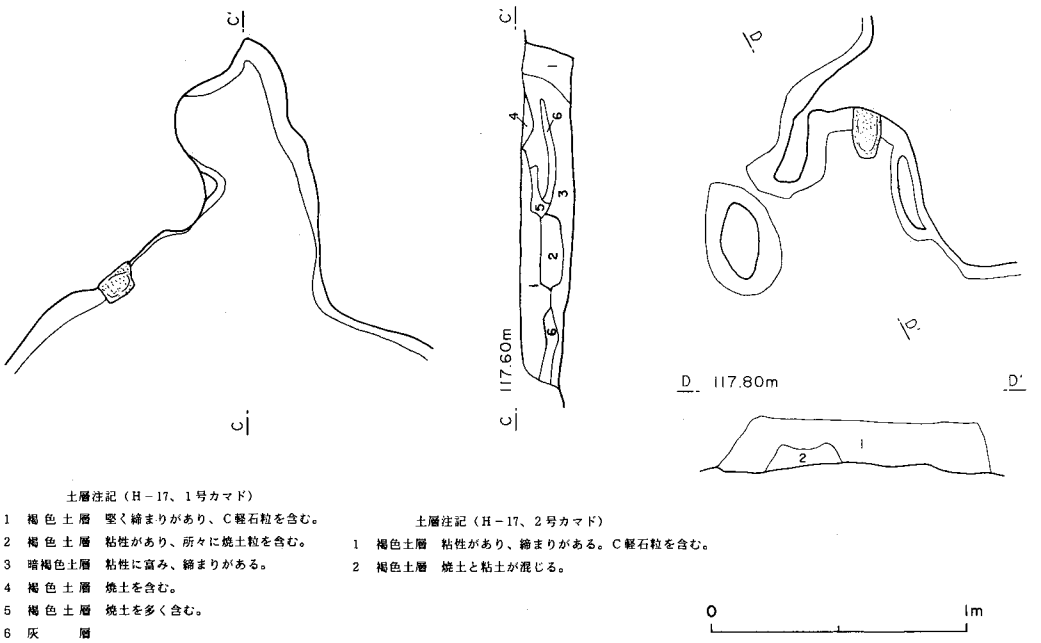
第20図　16号住居跡・カマド実測図



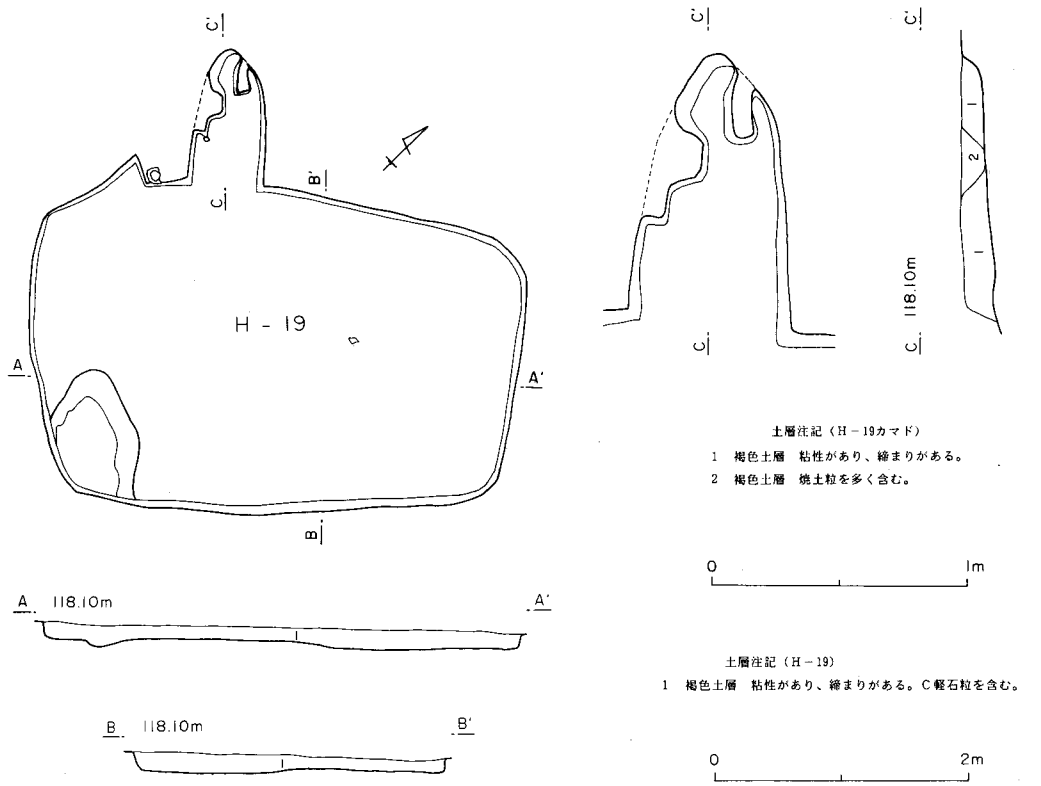
第21図　16号住居跡・カマド実測図



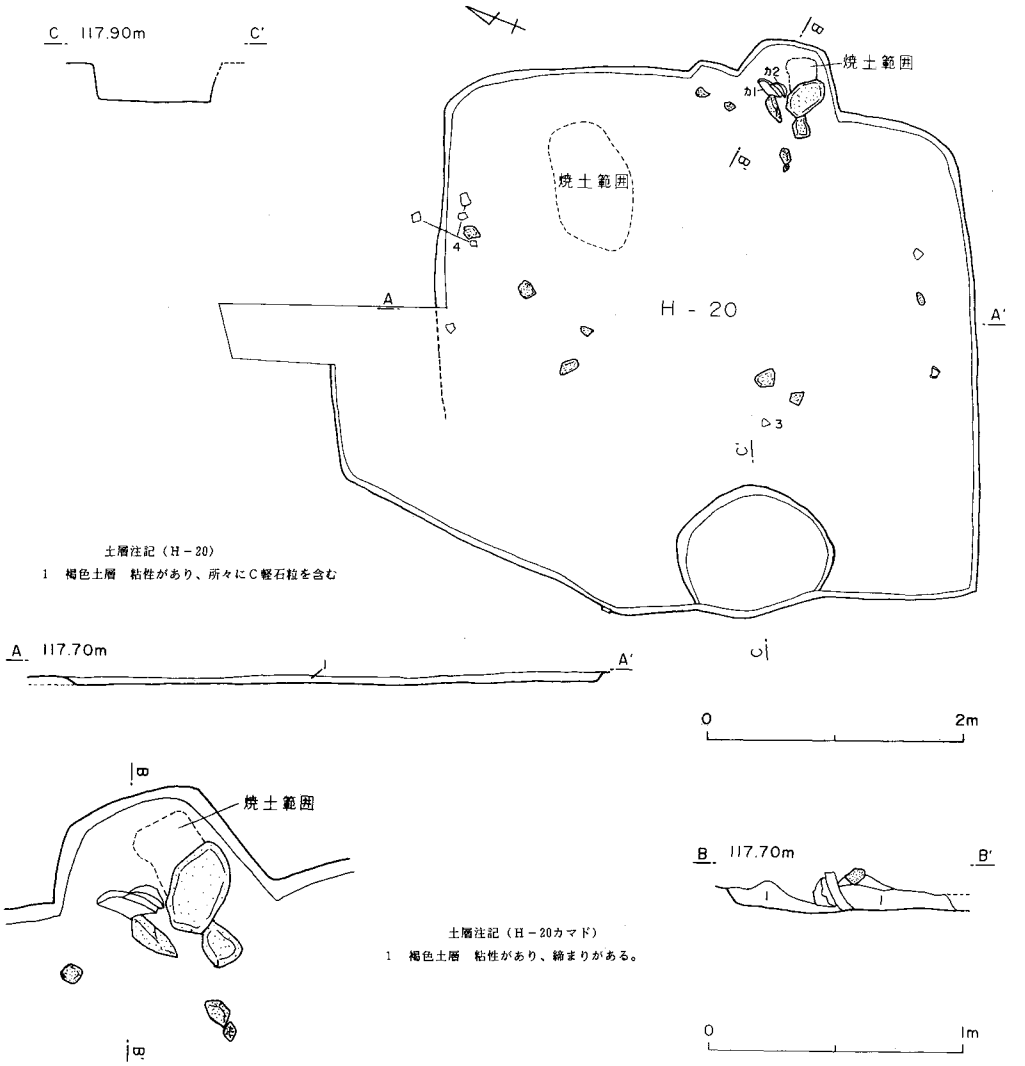
第22図　17号住居跡実測図



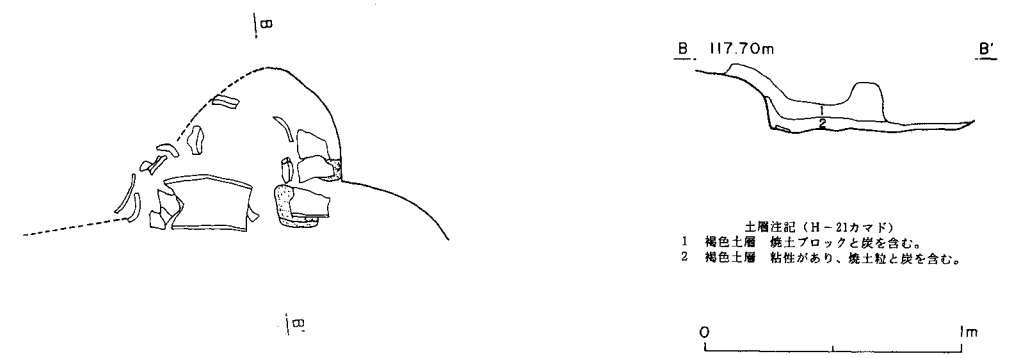
第23図　17号住居跡1号、2号、カマド実測図



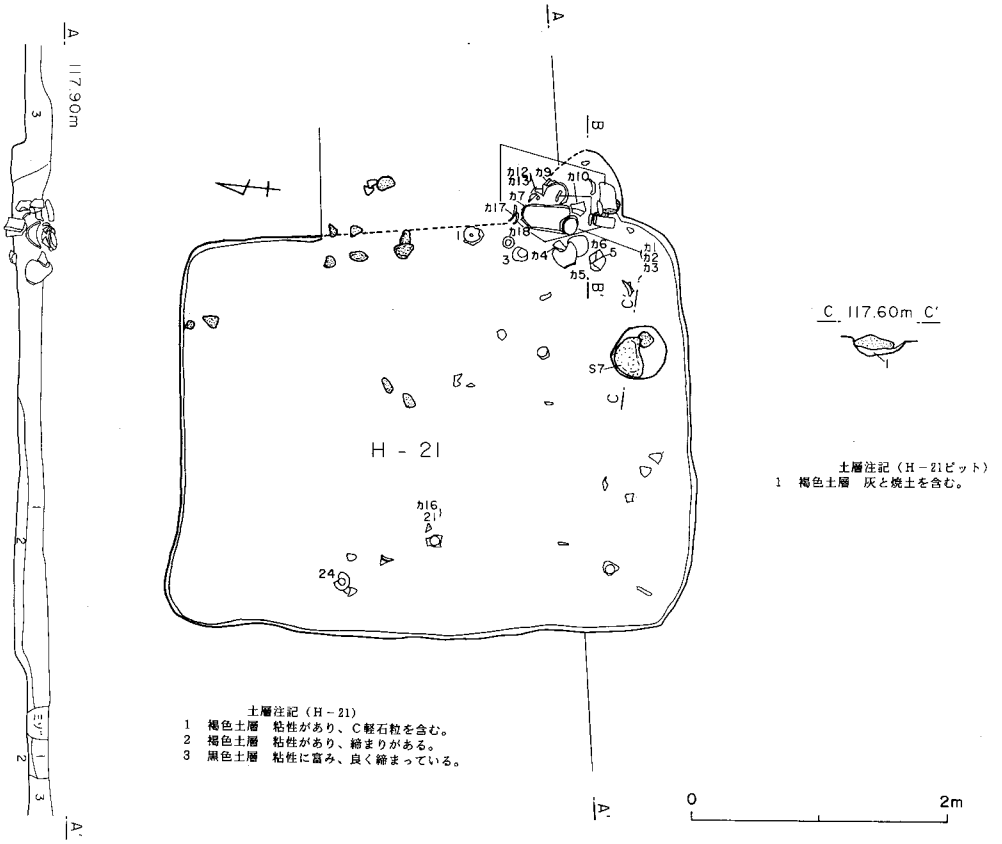
第24図　19号住居跡・カマド実測図



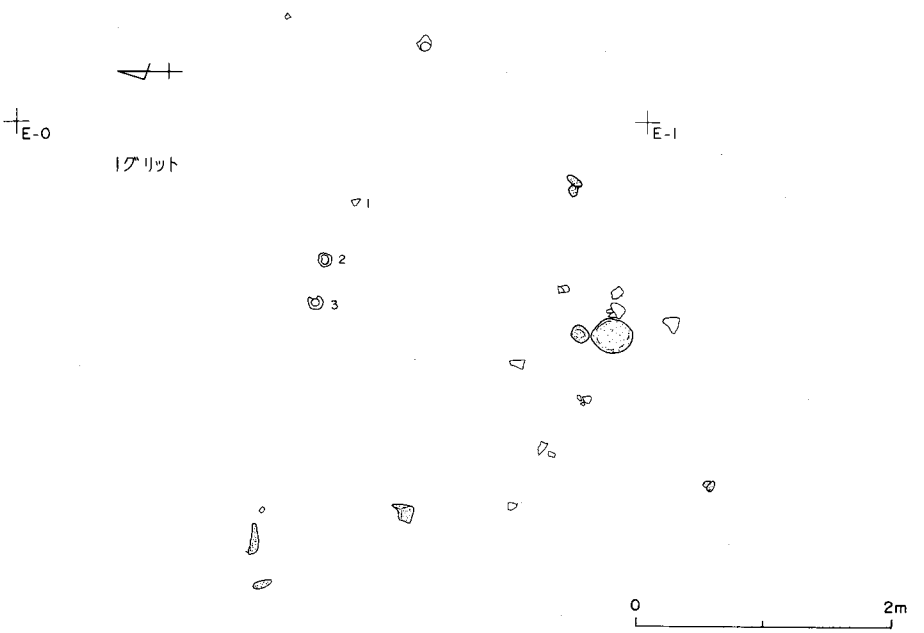
第25図 20号住居跡・カマド実測図



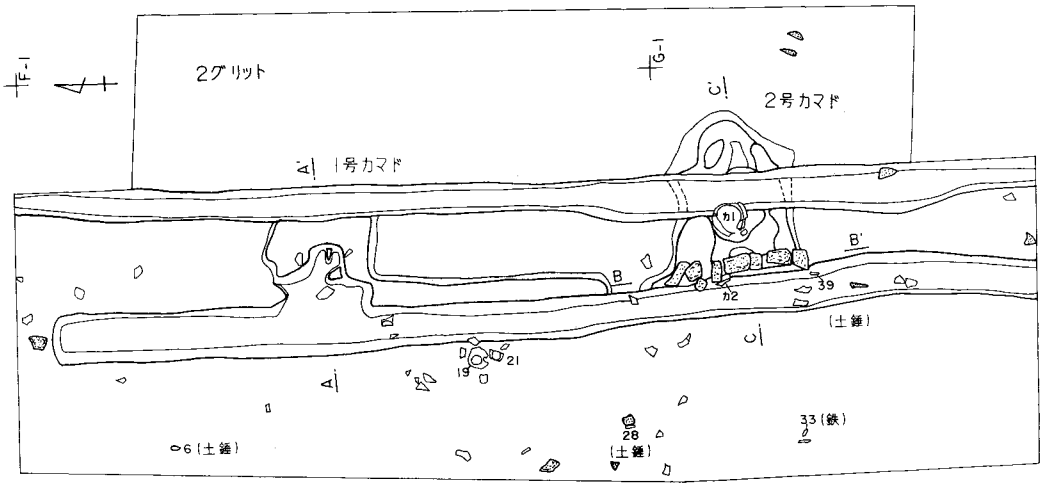
第26図 21号住居跡カマド実測図

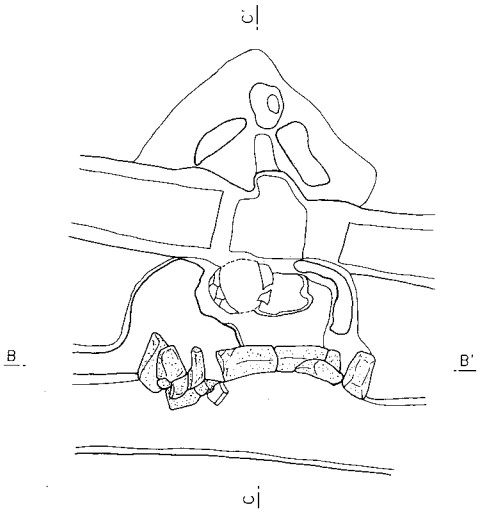


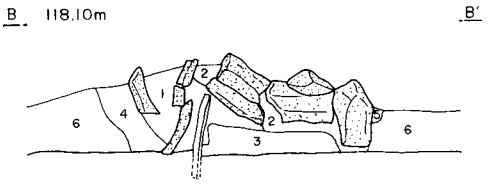
第27図　21号住居跡実測図



第28図　1グリット実測図

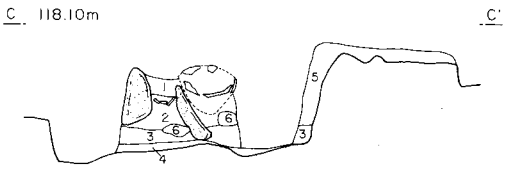






土層注記（2グリット2号カマド）

1　褐色土層　粘性があり、締まりがある。
2　褐色土層　2～3㎜の小石、焼土粒を含む。
3　褐色土層　炭と灰の混ざる厚い層。締まりがある。
4　褐色土層　粘性があり、所々にローム粒を含む。
5　黒色土層　粘性があり、締まりがある。
6　ローム層

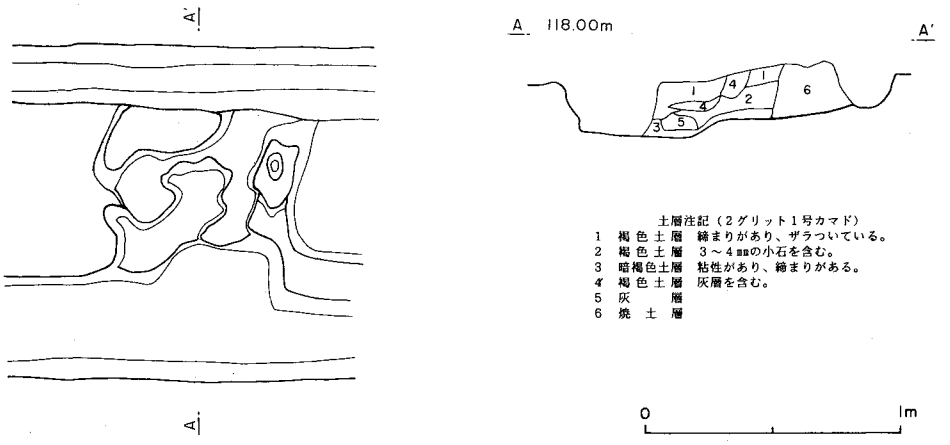


土層注記（2グリット2号カマド）

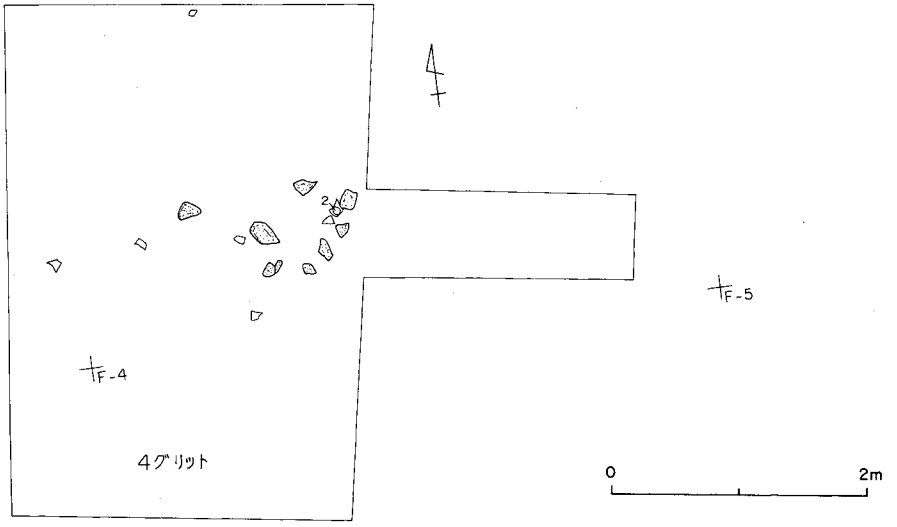
1　褐色土層　炭を多く含む。
2　褐色土層　焼土を多く含む。
3　暗褐色土層　灰と炭を多く含む。
4　灰　　層
5　褐色土層　焼土と小石を多く含む。
6　焼土ブロック　堅く焼けた焼土（落ちた天井の一部）。

0　1m

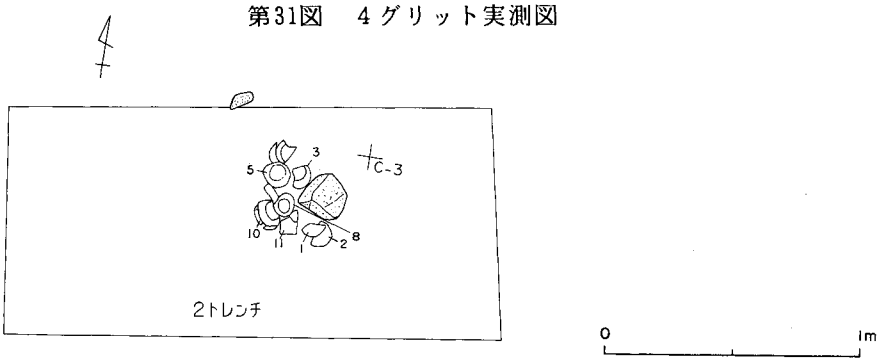
第29図　2グリット2号カマド実測図



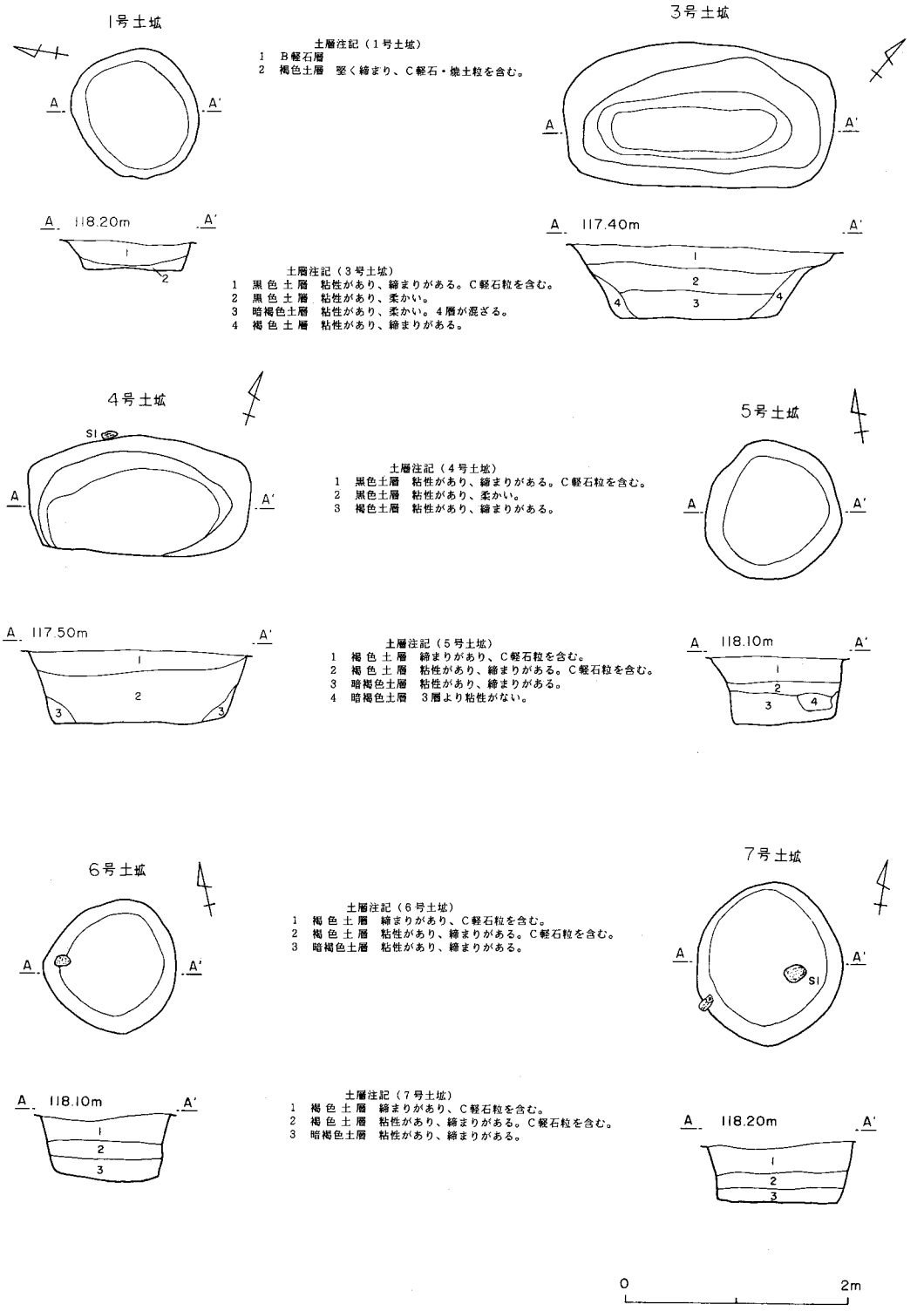
第30図　2グリット1号カマド実測図



第31図　4グリット実測図

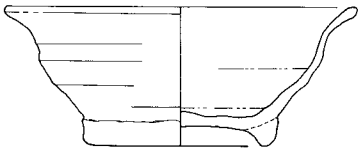


第32図　2トレンチ実測図

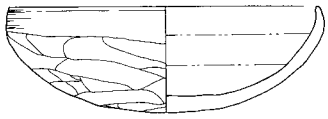


第33図　土坑1・3・4・5・6・7号実測図

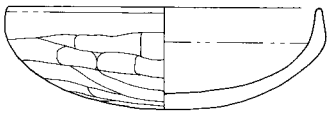
遺物実測図　1



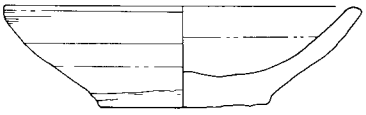
H－2－8



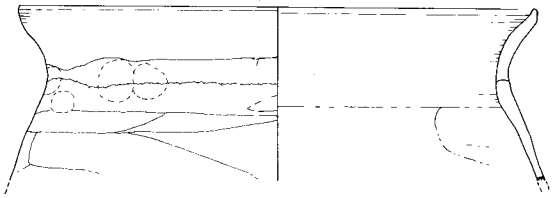
H－4－1



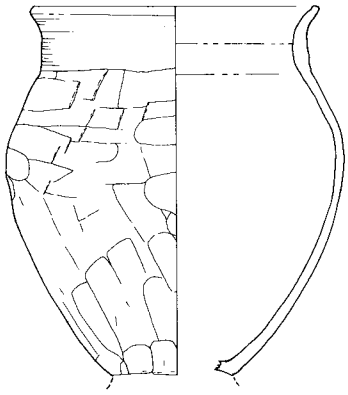
H－5－1



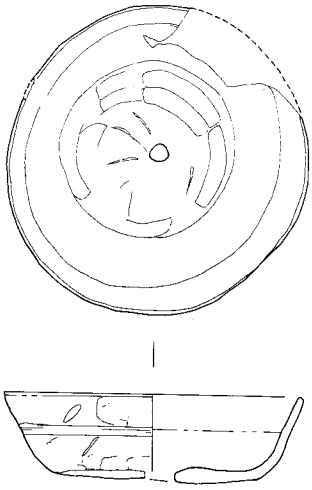
H－6－1



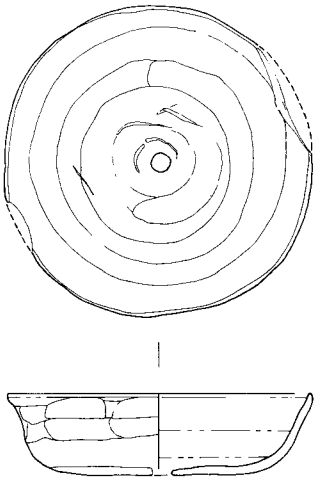
H－9－1



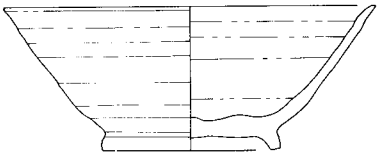
H－11－11



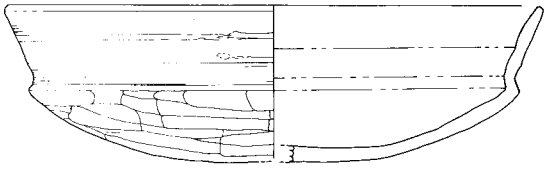
H－11－17



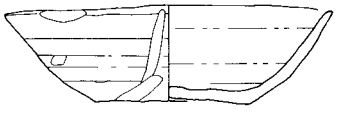
H－11－20



H－11カ3

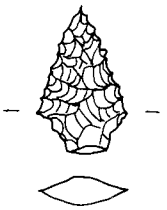


H－13－1



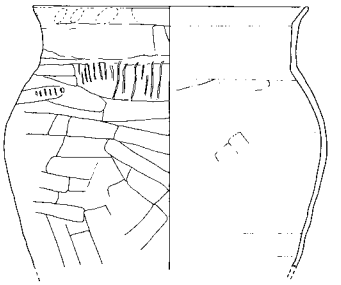
H－11カ17

0　1/3　10cm

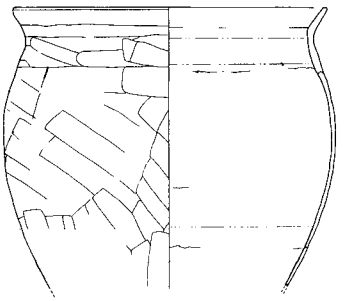


H－8－1

0　1/1　2.5cm

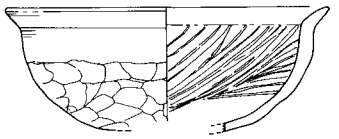


H－11－14

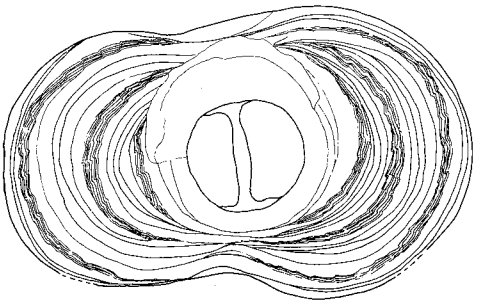


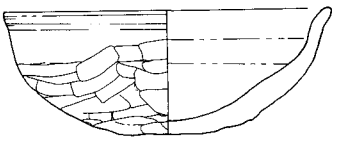
H－11カ15

0　1/5　20cm

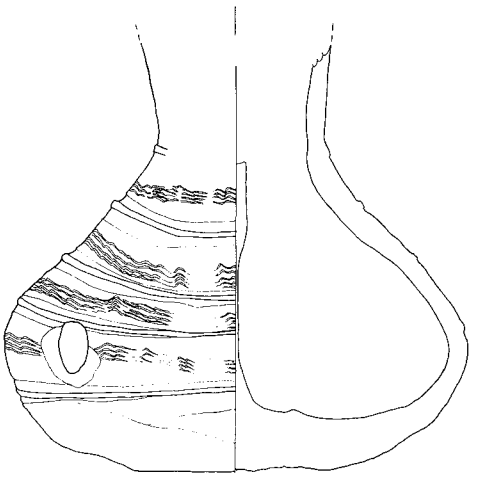


H－12確1



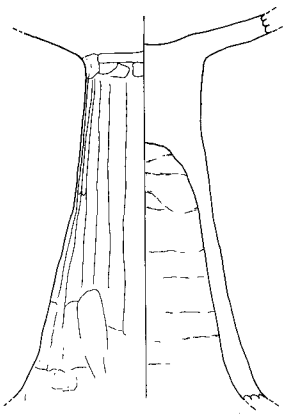


H－14－2



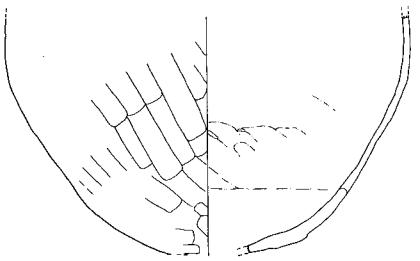
H－14－1

0　1/3　10cm

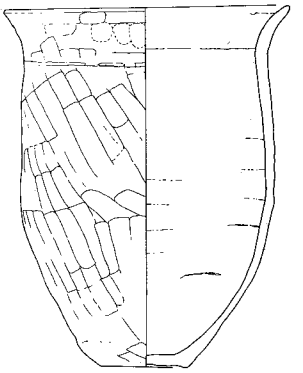


H－14－7

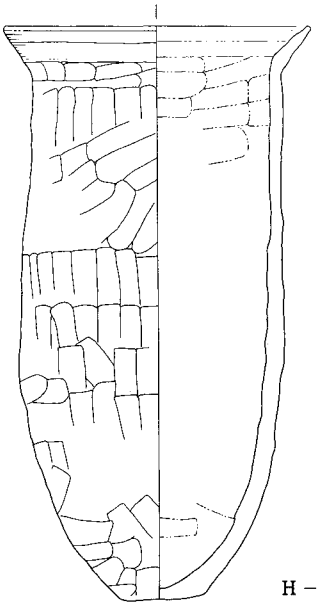
遺物実測図　3



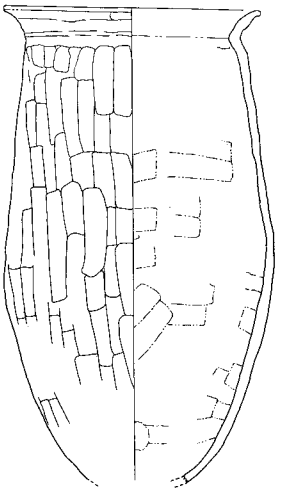
H－12－1



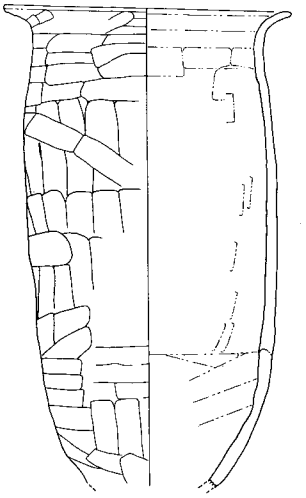
H－14－6



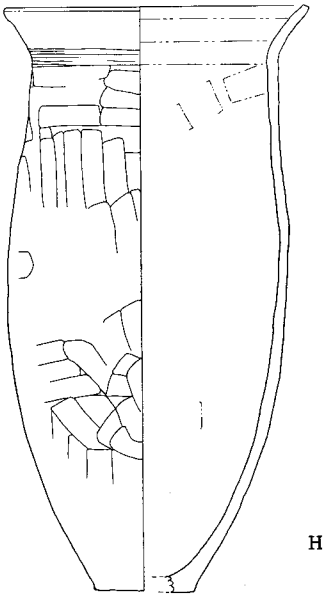
H－14－9



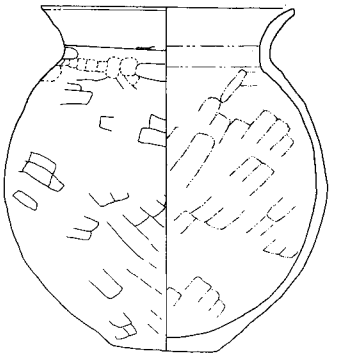
H－14－11



H－14－13



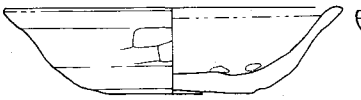
H－14－14



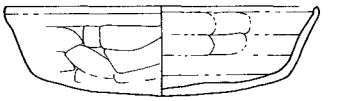
H－14－10

0　1/5　20cm

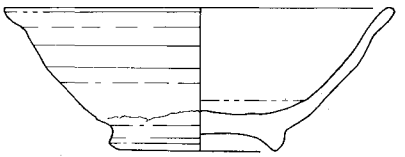
H－14－12



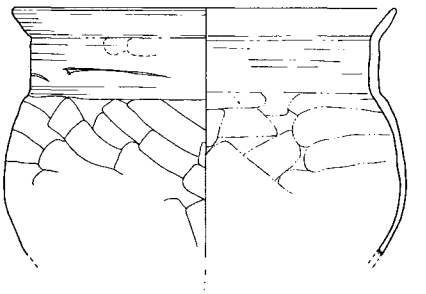
H－15－2



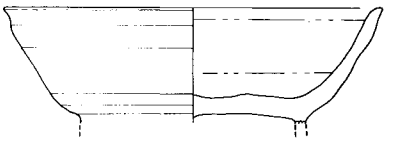
H－18－1



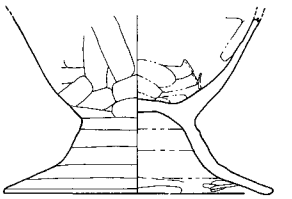
H－15－1



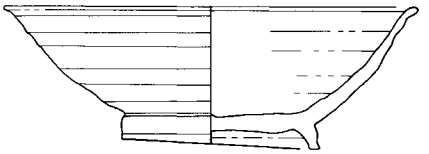
H－18－17



H－18－13

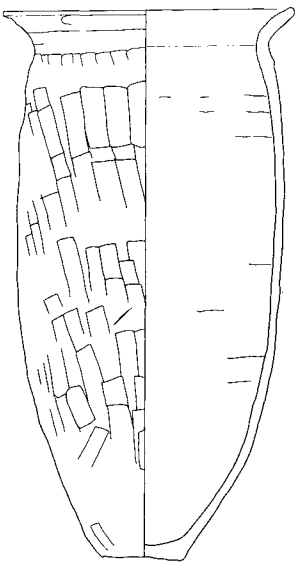


H－18－14

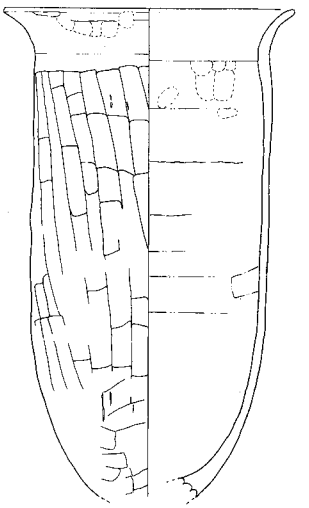


H－18－18

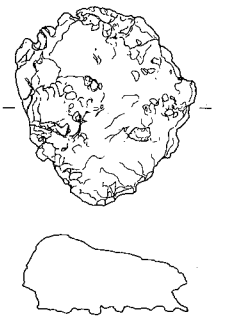
0　1/3　10cm



H－14－15



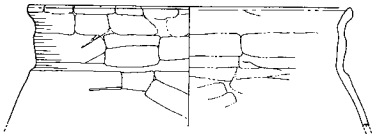
H－14－16



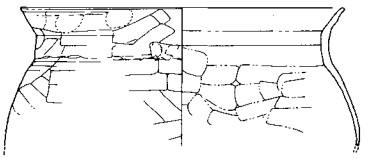
H－18鉄1

0　1/5　20cm

遺物実測図　5



H－18－4

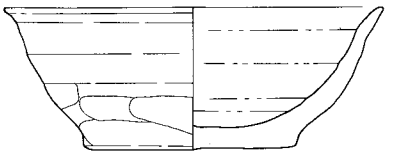


H－18カ1

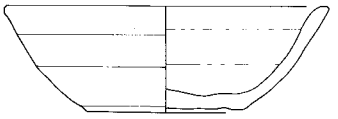
0　1/5　20cm

H－20－3

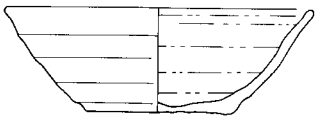
H－20－4



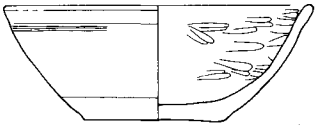
H－20カ2



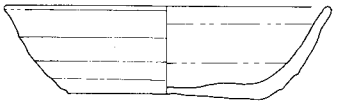
H－21－1



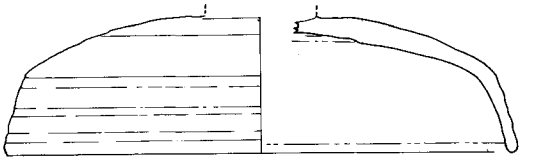
H－21－5



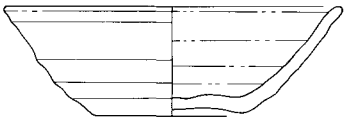
H－21－3



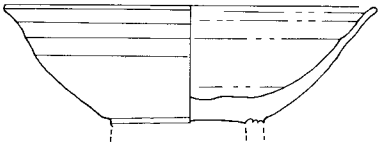
H－21－24



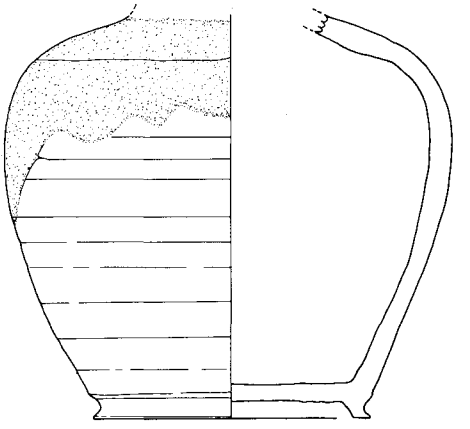
H－21カ4



H－21カ1

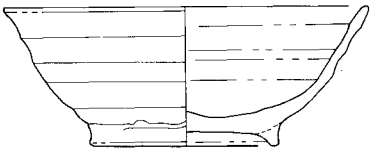


H－21カ3

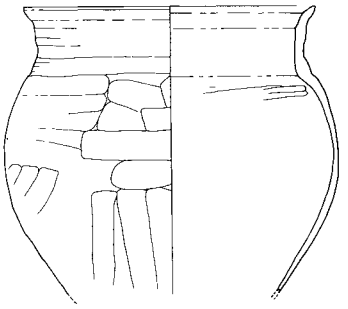


H－21カ5

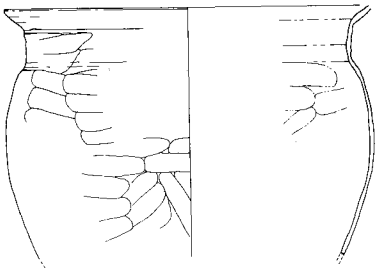
0　1/3　10cm



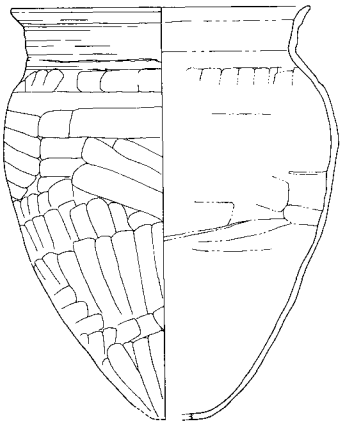
H－21カ2



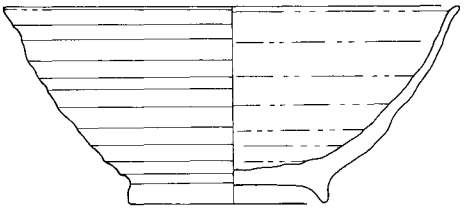
H－21カ12



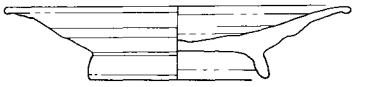
H－21－21



H－21カ9

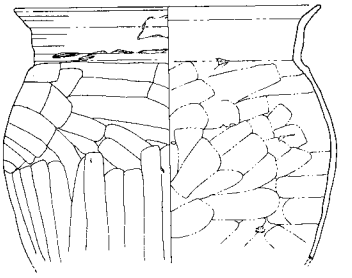


H－21カ6

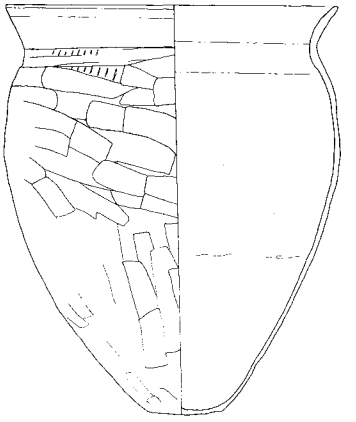


H－21カ13

0　1/3　10cm



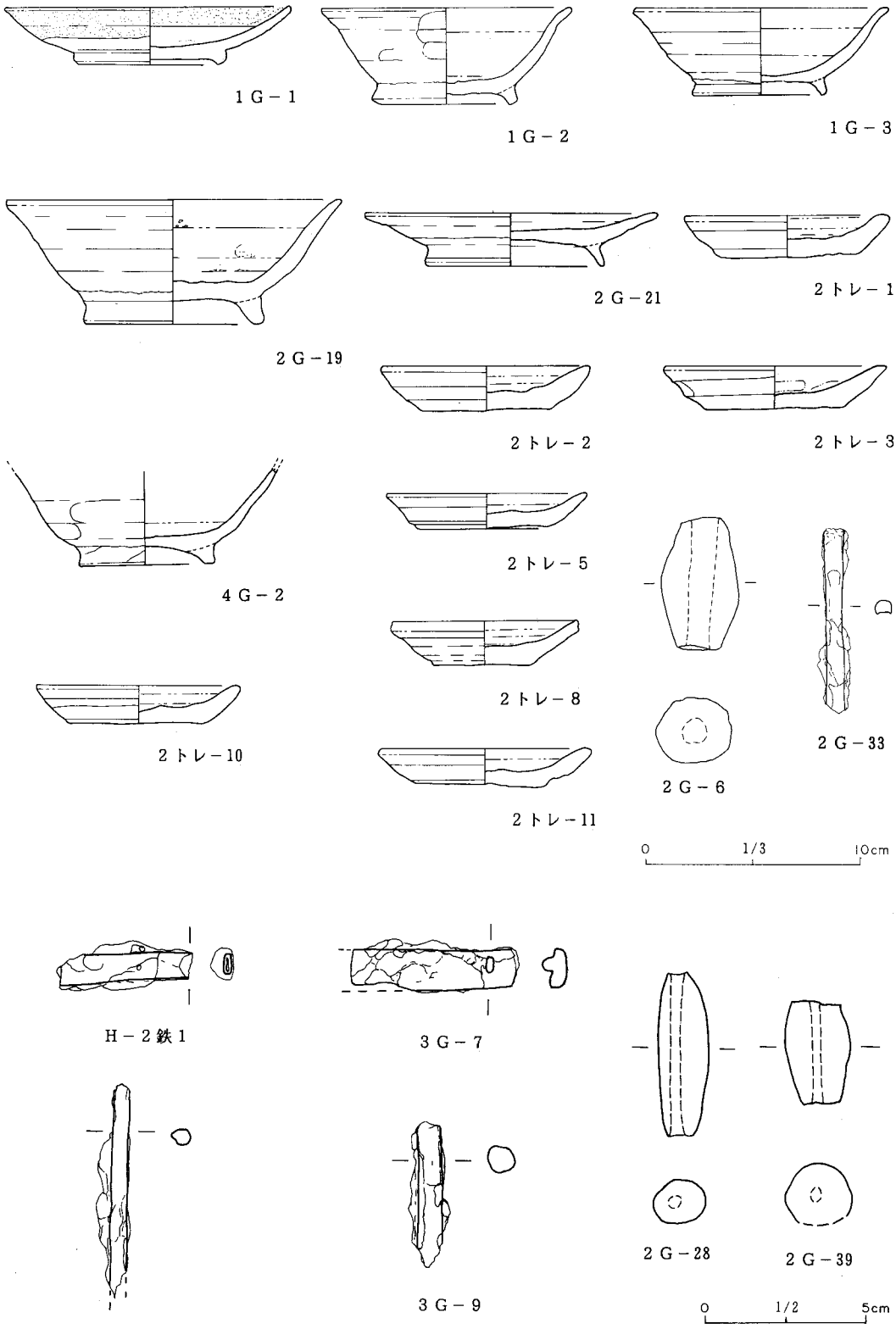
H－21カ10

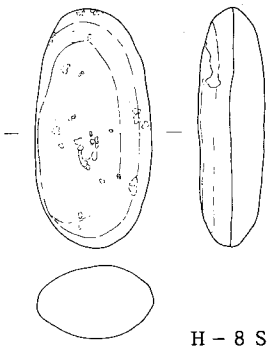


2G－カ1

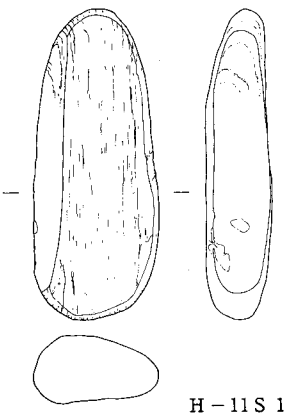
0　1/5　20cm

遺物実測図　7

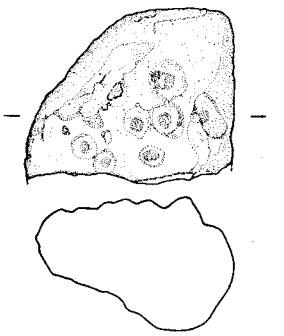

1G－1
1G－2
1G－3
2G－19
2G－21
2トレ－1
2トレ－2
2トレ－3
4G－2
2トレ－5
2トレ－8
2トレ－10
2トレ－11
2G－33
2G－6
0　1/3　10cm
H－2鉄1
3G－7
3G－1
3G－9
2G－28
2G－39
0　1/2　5cm



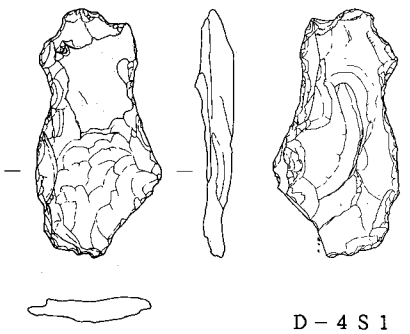
H－8 S 1



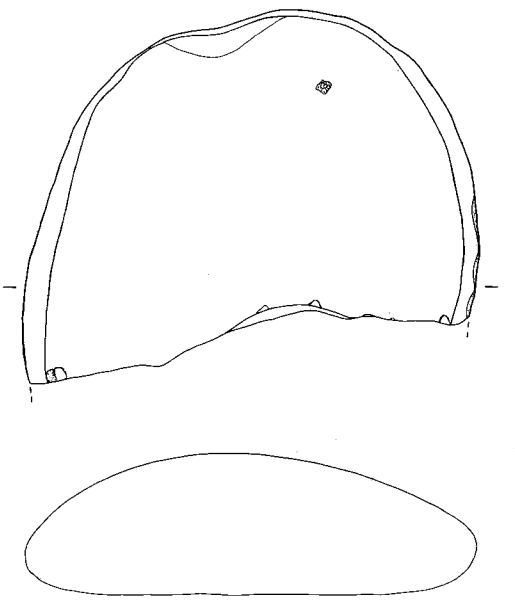
H－11 S 1



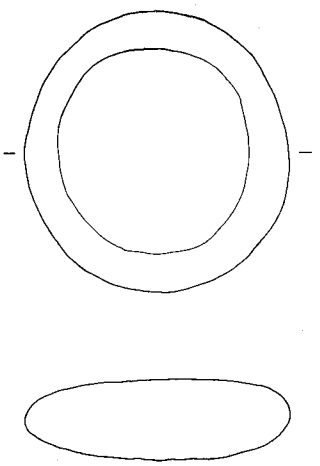
H－10 S 2



D－4 S 1

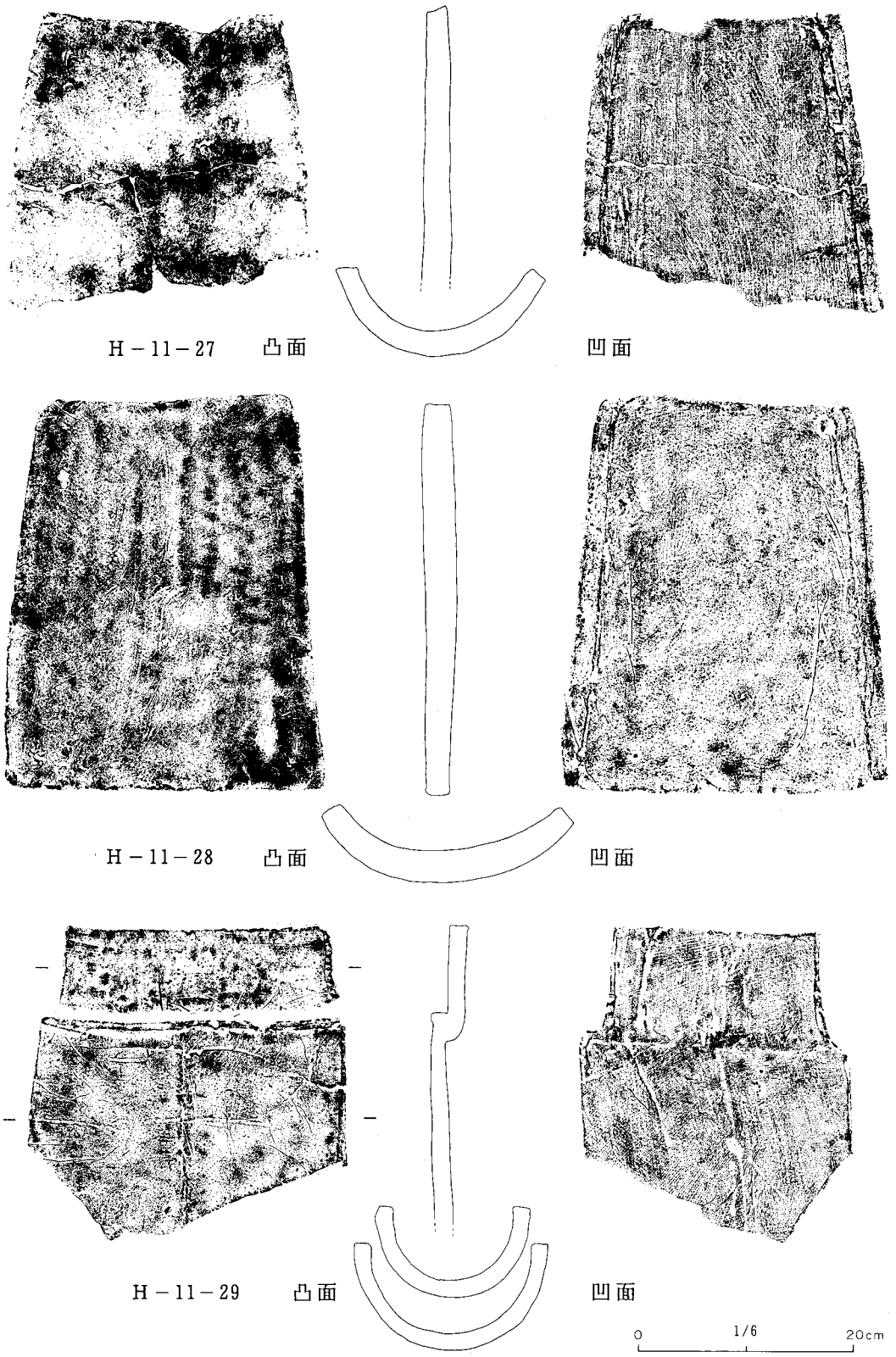


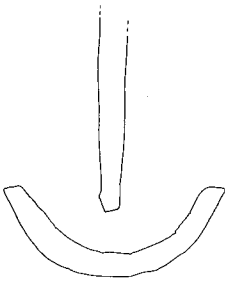
H－21 S 7



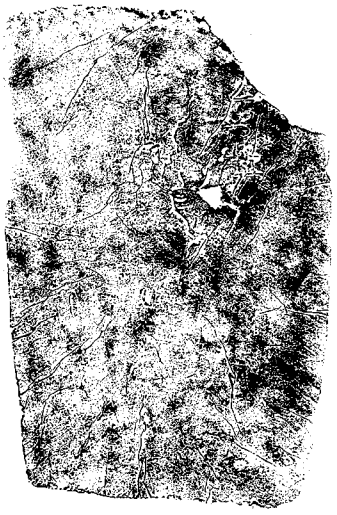
D－7 S 1

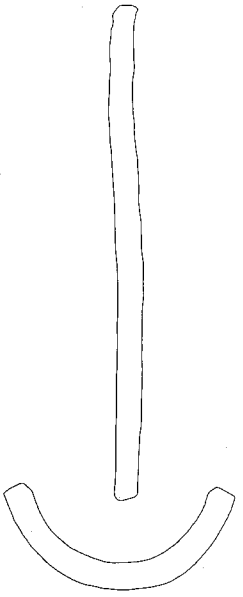
0　1/5　20cm

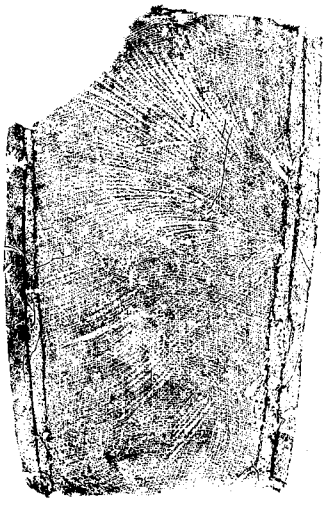

H－11－27　凸面
凹面
H－11－28　凸面
凹面
H－11－29　凸面
凹面
0
1/6
20cm



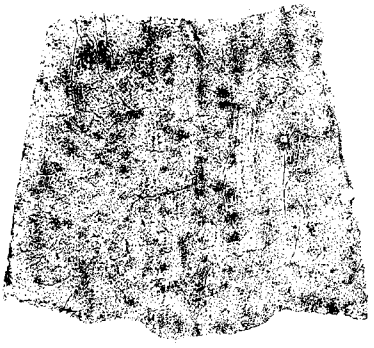
H－11－31　凸面　　凹面

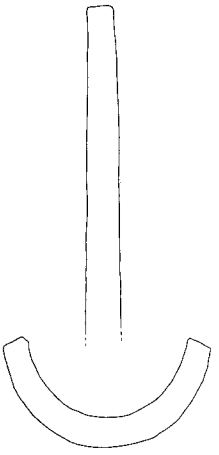


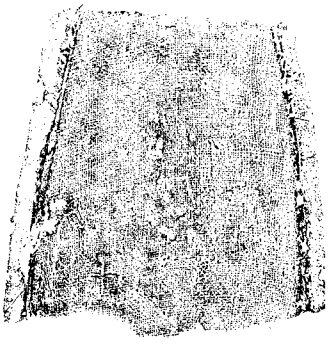




H－11－32　凸面　　凹面

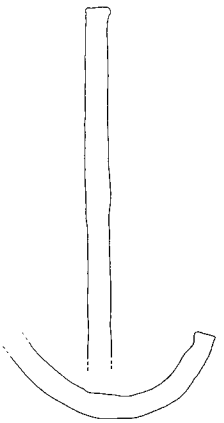


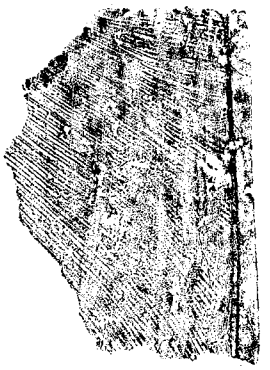




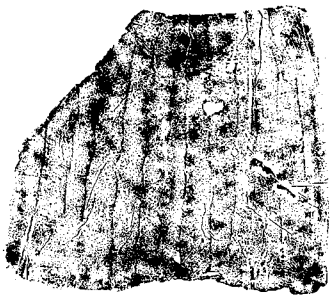
H－11－33　凸面　　凹面

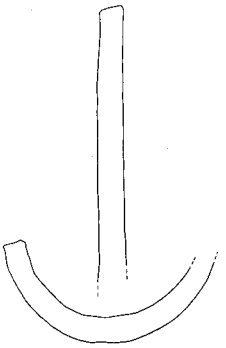
0　1/6　20cm

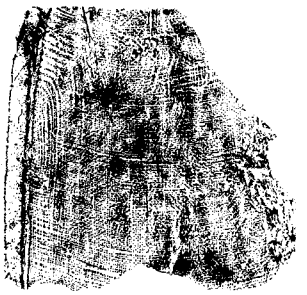




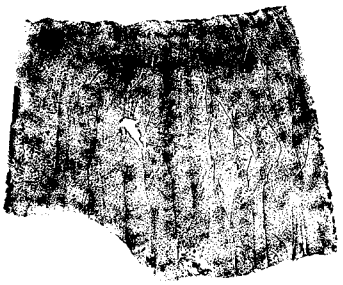
H－11－34　凸面　　凹面

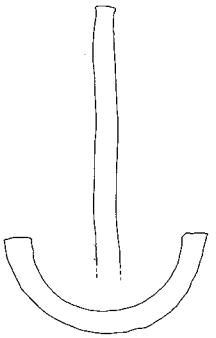


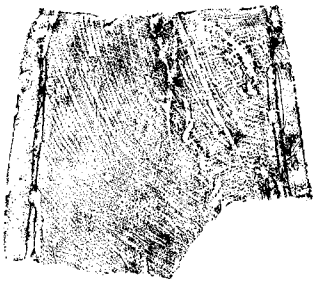




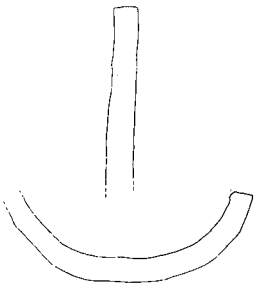
H－11カ5　凸面　　凹面

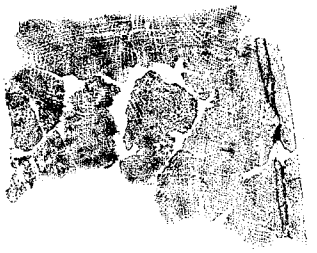






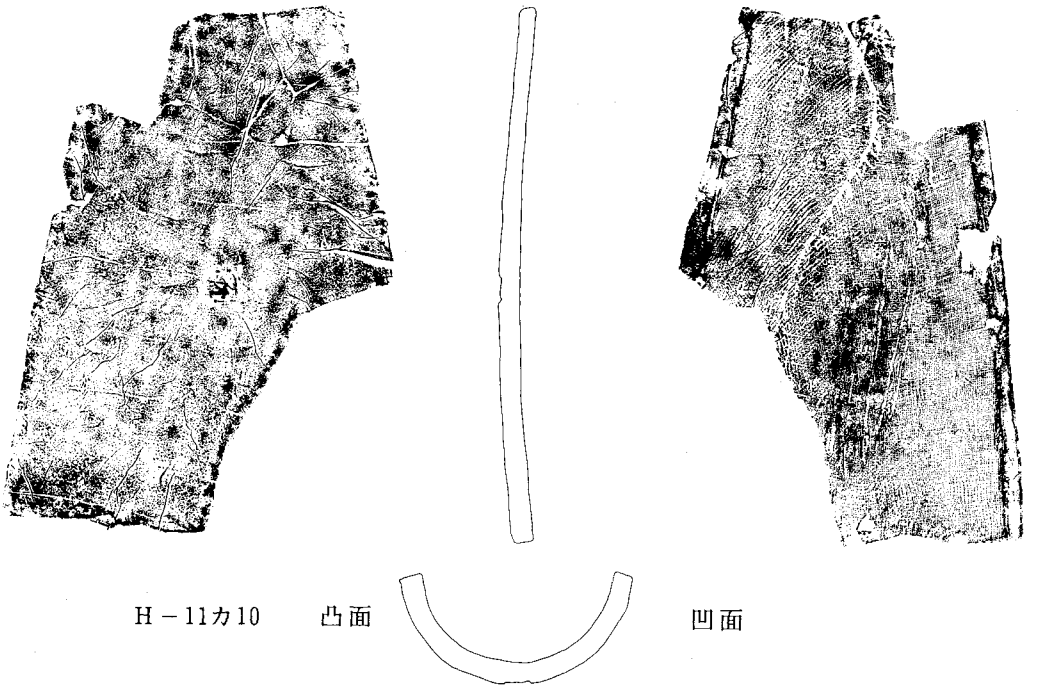
H－11カ8　凸面　　凹面



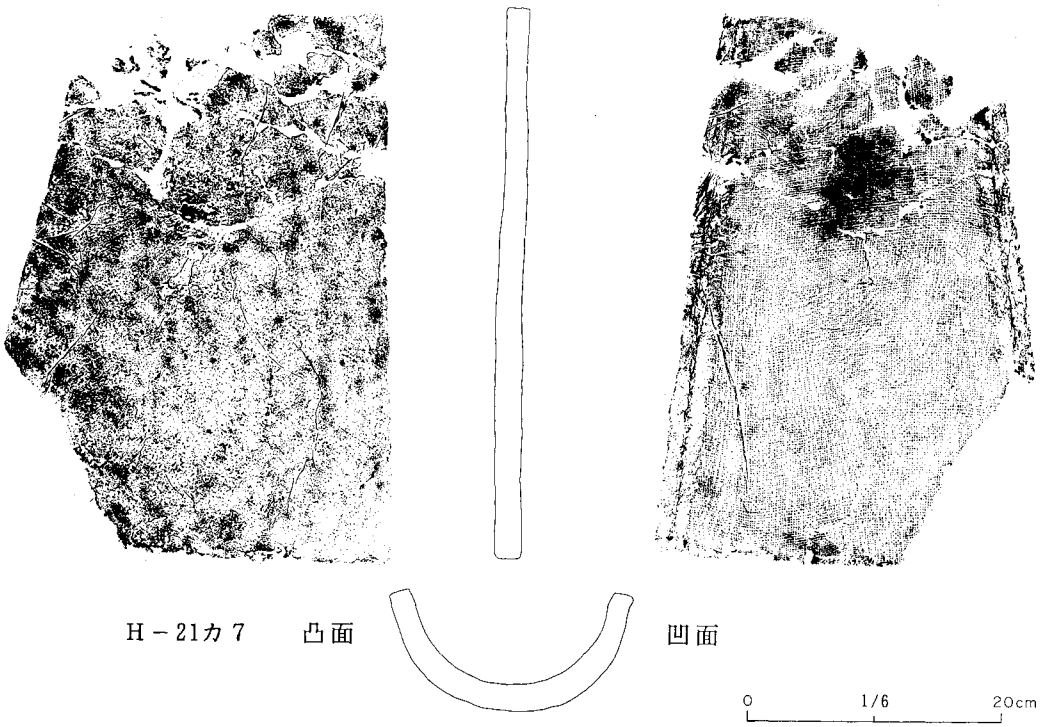


H－11カ9　凸面　　凹面

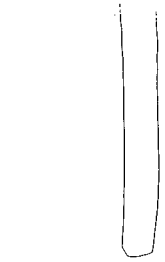
0　1/6　20cm



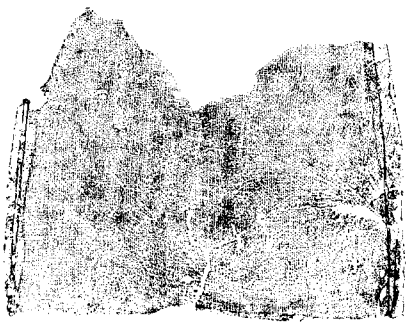
H－11カ10　凸面　凹面



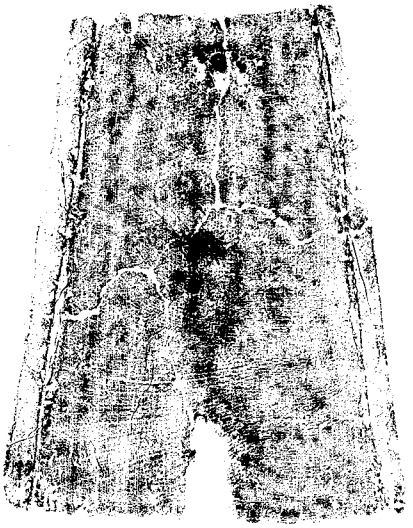
H－21カ7　凸面　凹面



H－20カ1　凸面　凹面

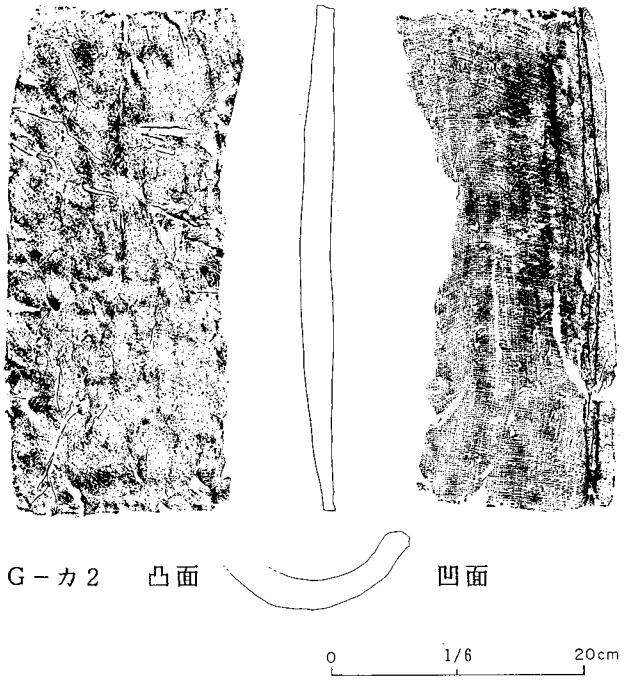


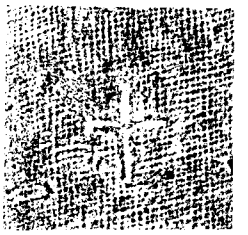
H－21カ17　凸面　凹面



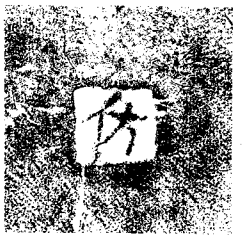
H－21カ18　凸面　凹面

0　1/6　20cm



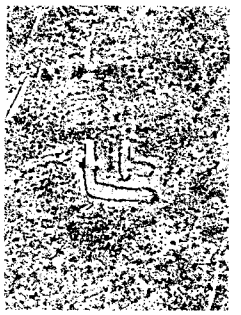


H－11－33



H－11カ10

H－11－32



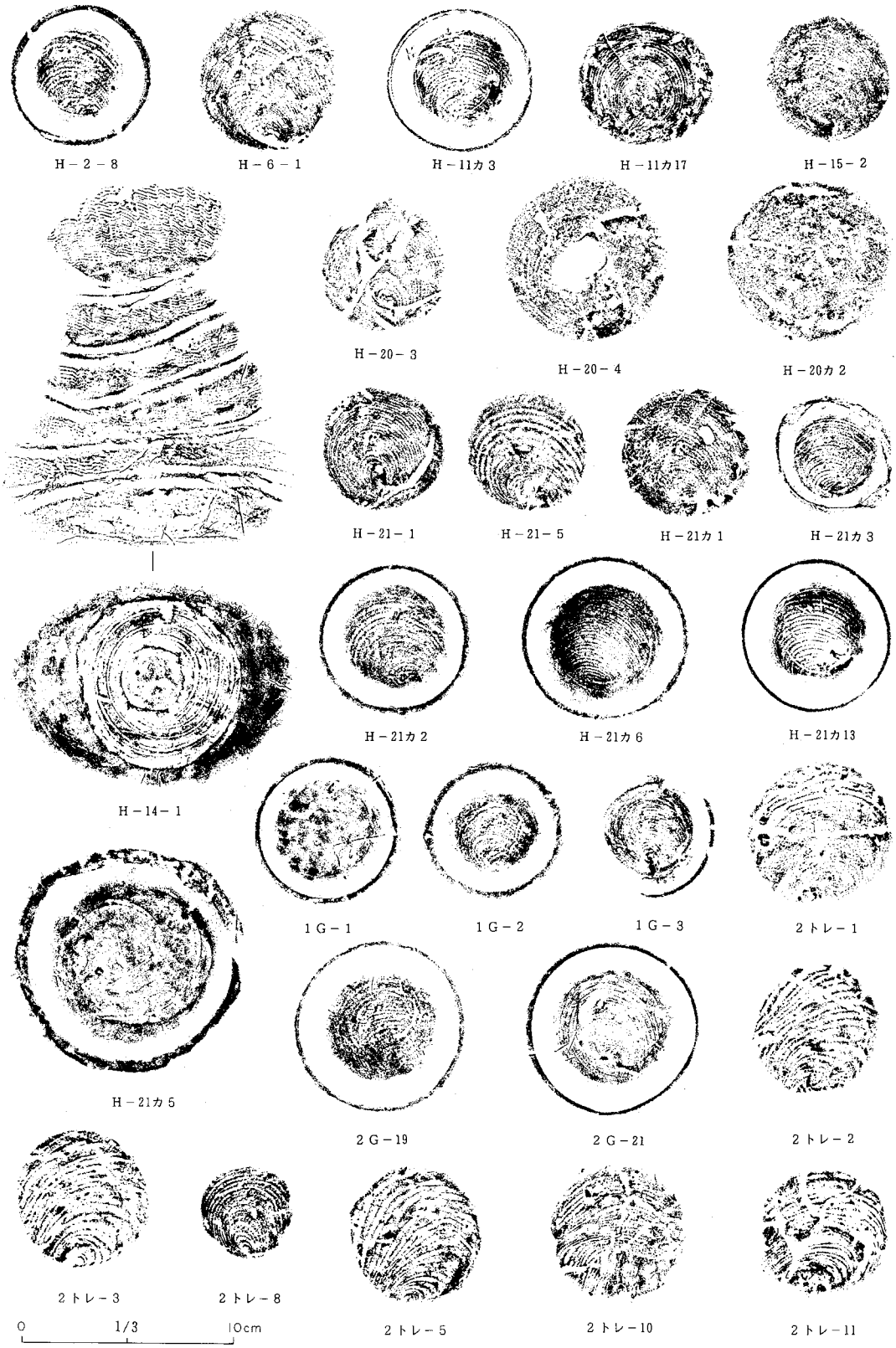
H－21カ17

H－21カ18

H－21カ7

0　1/2　5cm

遺物拓本　1


H－2－8
H－6－1
H－11カ3
H－11カ17
H－15－2
H－20－3
H－20－4
H－20カ2
H－21－1
H－21－5
H－21カ1
H－21カ3
H－14－1
H－21カ2
H－21カ6
H－21カ13
1G－1
1G－2
1G－3
2トレ－1
H－21カ5
2G－19
2G－21
2トレ－2
2トレ－3
2トレ－8
2トレ－5
2トレ－10
2トレ－11
0
1/3
10cm

調査前現況（東より）

調査前現況（西より）

作業風景（東より）

作業風景（北より）

1号住居跡

1号住居跡カマド

2号住居跡

2号住居跡カマド

図版　2

3 号住居跡

3 号住居跡カマド

3 号住居跡貼床範囲

4 号住居跡

4 号住居跡貼床範囲

5 号住居跡

5 号住居跡カマド

6 号住居跡

6号住居跡カマド

7号住居跡

7号住居跡カマド

8号住居跡

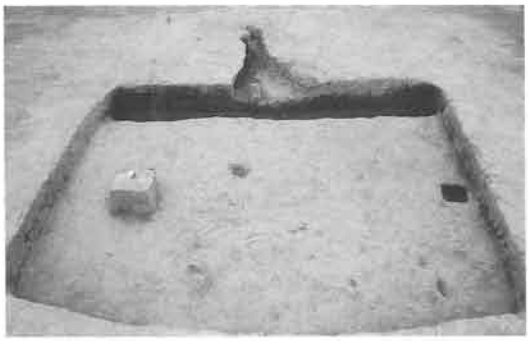
8号住居跡カマド

8号住居跡出土遺物状況

9・17・18号住居跡

9号住居跡カマド

図版　4



10号住居跡

10号住居跡カマド

11号住居跡

11号住居跡出土遺物状況

11号住居跡出土遺物状況

11号住居跡カマド

11号住居跡カマド出土遺物状況

11号住居跡貼床セクション

12号住居跡

12号住居跡カマド

13号住居跡

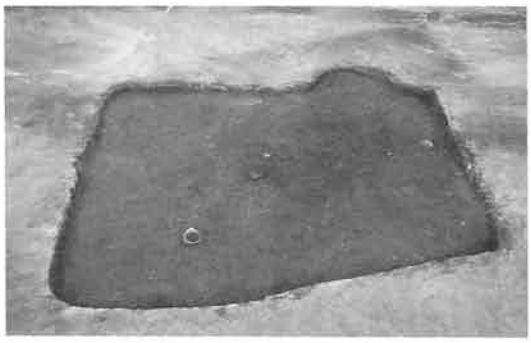
13号住居跡カマド

14号住居跡

14号住居跡出土遺物状況

14号住居跡出土遺物状況

14号住居跡カマド

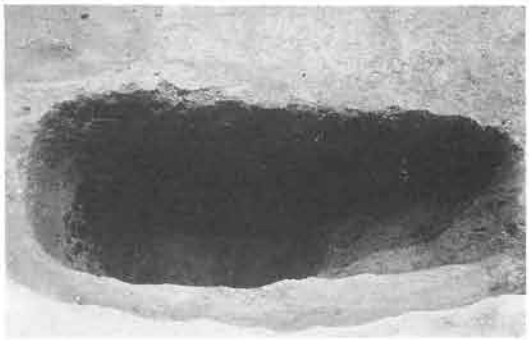


15号住居跡

15号住居跡カマドセクション

16号住居跡

16号住居跡カマドセクション



16号住居跡土坑

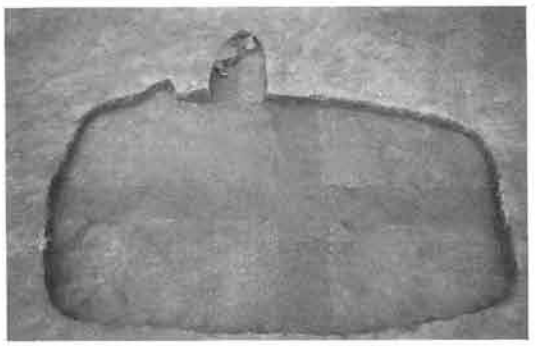
17号住居跡

17号住居跡１号カマド

17号住居跡２号カマド

9・17・18 号住居跡

18号住居跡カマド



19号住居跡

19号住居跡カマド

20号住居跡

20号住居跡カマド

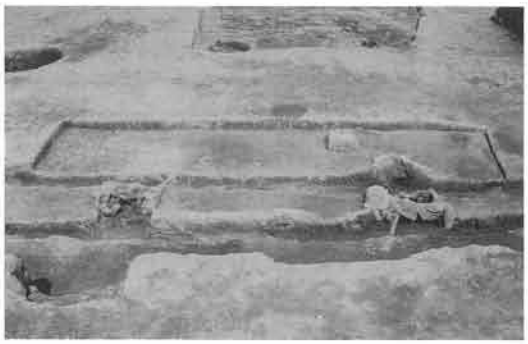
21号住居跡出土遺物状況

21号住居跡出土遺物状況

21号住居跡カマド出土遺物状況

21号住居跡ピット内の石

1グリット出土遺物状況



2グリット1・2号カマド跡

2グリット1号カマド跡

2グリット2号カマド跡

2グリット2号カマド跡

3グリット出土遺物状況

4 グリット出土遺物状況

1 号土坑

3 号土坑

4 号土坑

5 号土坑

6 号土坑

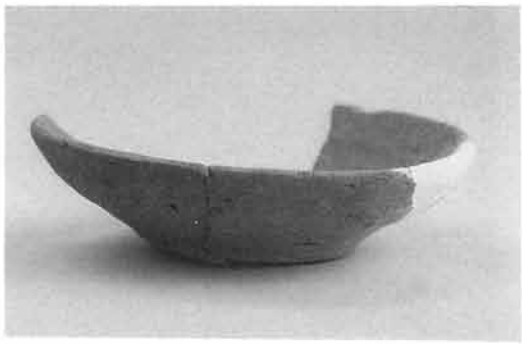
7 号土坑

2 トレンチ出土遺物状況

H－2－8

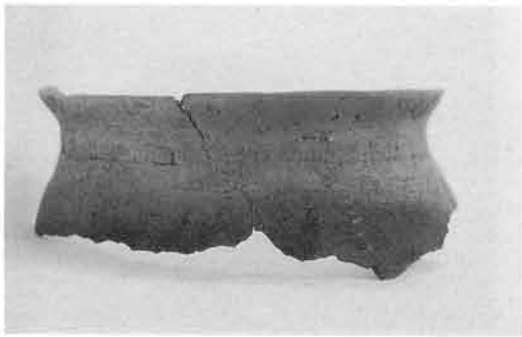
H－4－1

H－5－1



H－6－1

H－8－1



H－9－1

H－11－11

H－11－14

H－11－17

H－11－17

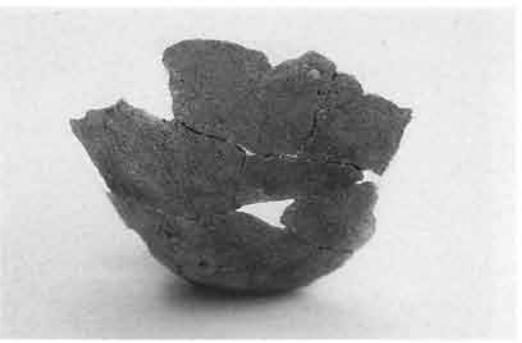
H－11－20

H－11－20

H－11カ3

H－11カ15

H－11カ17

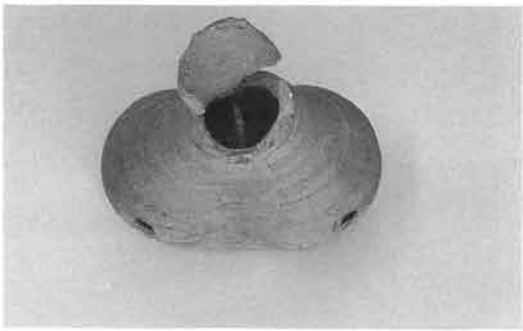


H－12－1

H－12確 1

H－13－ 1

H－14－ 1



H－14－ 1

H－14－ 2

H－14－ 6

H－14－ 7

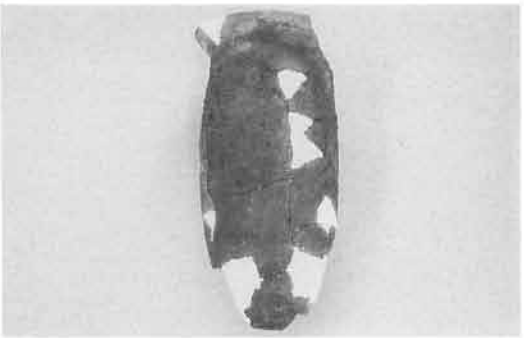
H－14－ 9

H－14－10

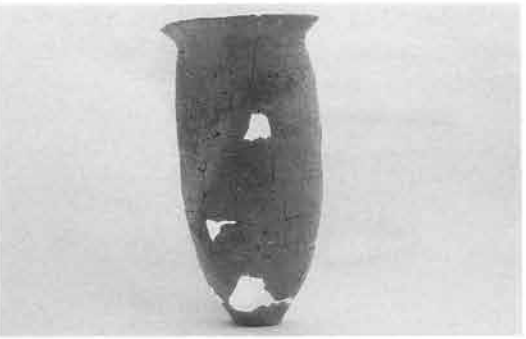
H－14－11

H－14－12

H－14－13



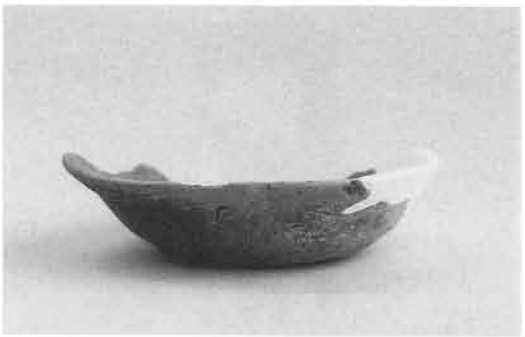
H－14－14



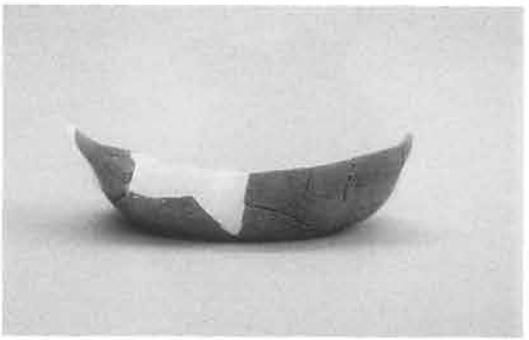
H－14－15

H－14－16

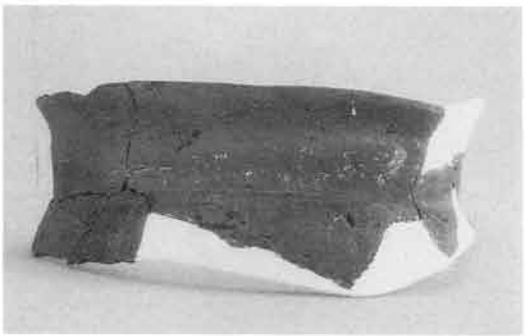
H－15－1



H－15－2



H－18－1



H－18－4

H－18－13

H－18－14

H－18－17

H－18－18

H－18カ1

H－18鉄 1

H－20－ 3

H－20－ 4

H－20カ 2

H－21－ 1

H－21－ 3

H－21－ 5

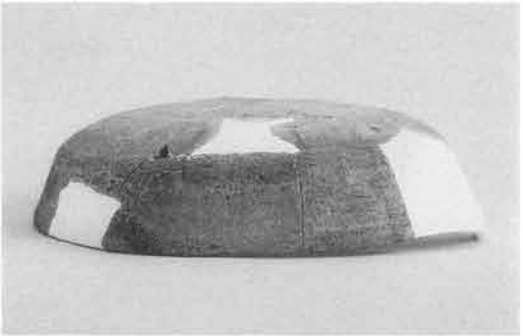
H－21－21

H－21－24

H－21カ 1

H－21カ 2

H－21カ 3



H－21カ 4

H－21カ 5

H－21カ 6

H－21カ 9

H－21カ10

H－21カ12

H－21カ13

1G－1

1G－2

1G－3

2G－19

2G－21

図版　18

２Ｇ－カ１

４Ｇ－２

２トレ－１

２トレ－２

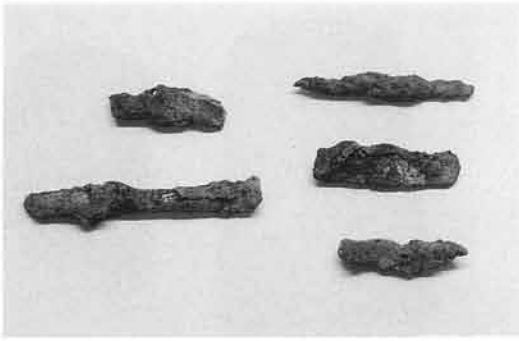
２トレ－３

２トレ－５

２トレ－８

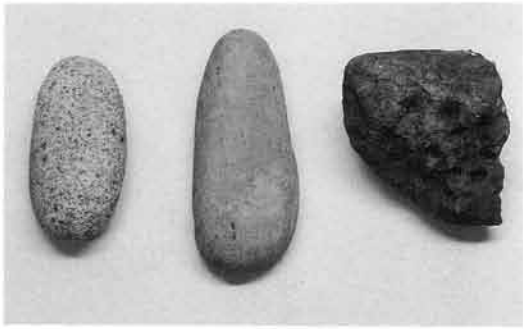
２トレ－10

2トレ－11

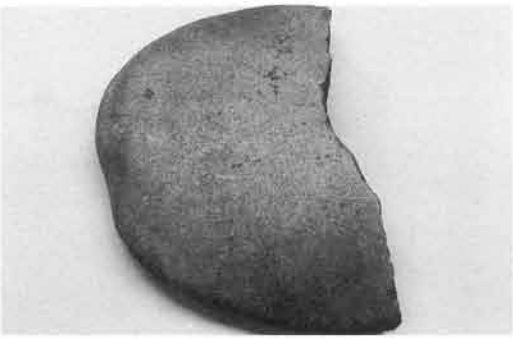


H－2鉄1　　3G－1
2G－33　　3G－7
3G－9

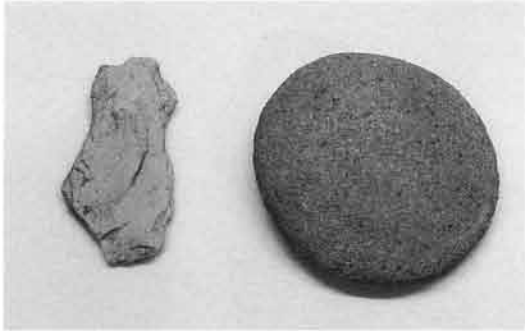
2G－6　　2G－28　　2G－39



H－8S1　　H－11S1　　H－10S2

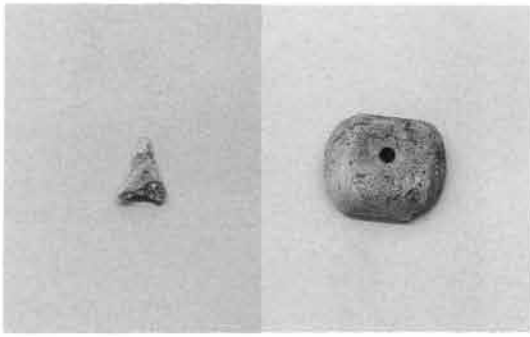


H－21S7



D－4S1　　D－7S1

確認2



D－6覆土　　試掘1

図版　20

H－11－28　　H－11－27　　凸面

H－11－28　　H－11－27　　凹面

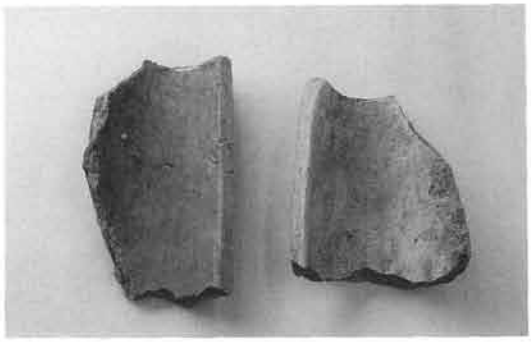
H－11－29　　H－11－31　　凸面

H－11－29　　H－11－31　　凹面

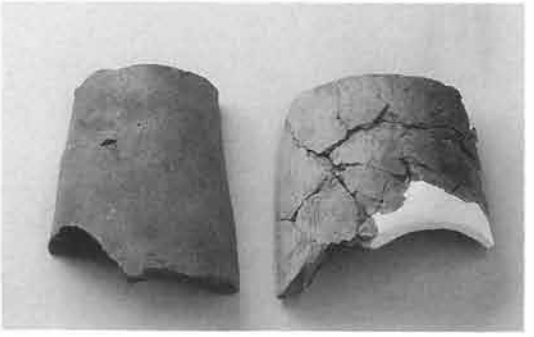
H－11－32　　H－11－33　　凸面

H－11－32　　H－11－33　　凹面

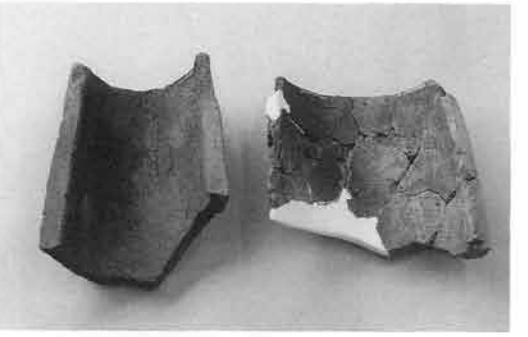
H－11－34　　H－11カ5　　凸面



H－11－34　　H－11カ5　　凹面



H－11カ 8　　H－11カ 9　　凸面

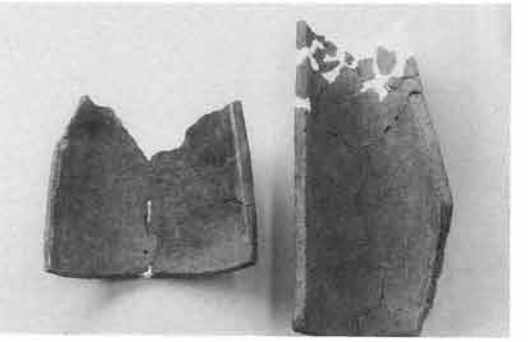


H－11カ 8　　H－11カ 9　　凹面

H－11カ10　　H－20カ 1　　凸面

H－11カ10　　H－20カ 1　　凹面

H－21カ17　　H－21カ 7　　凸面



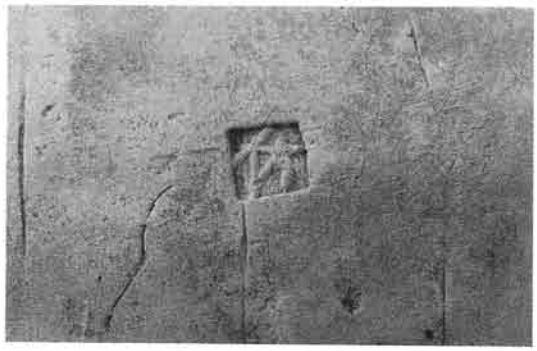
H－21カ17　　H－21カ 7　　凹面

H－21カ18　　2 G－カ 2　　凸面

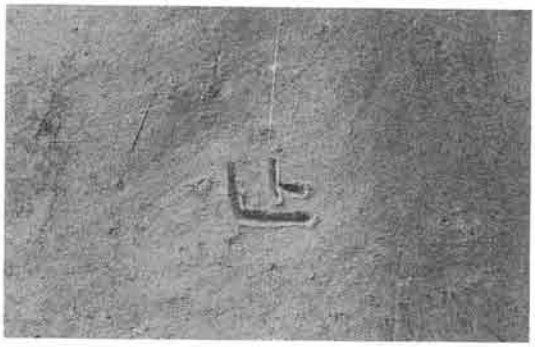
H－21カ18　　2 G－カ 2　　凹面

H－11－32

H－11－33



H－11カ10

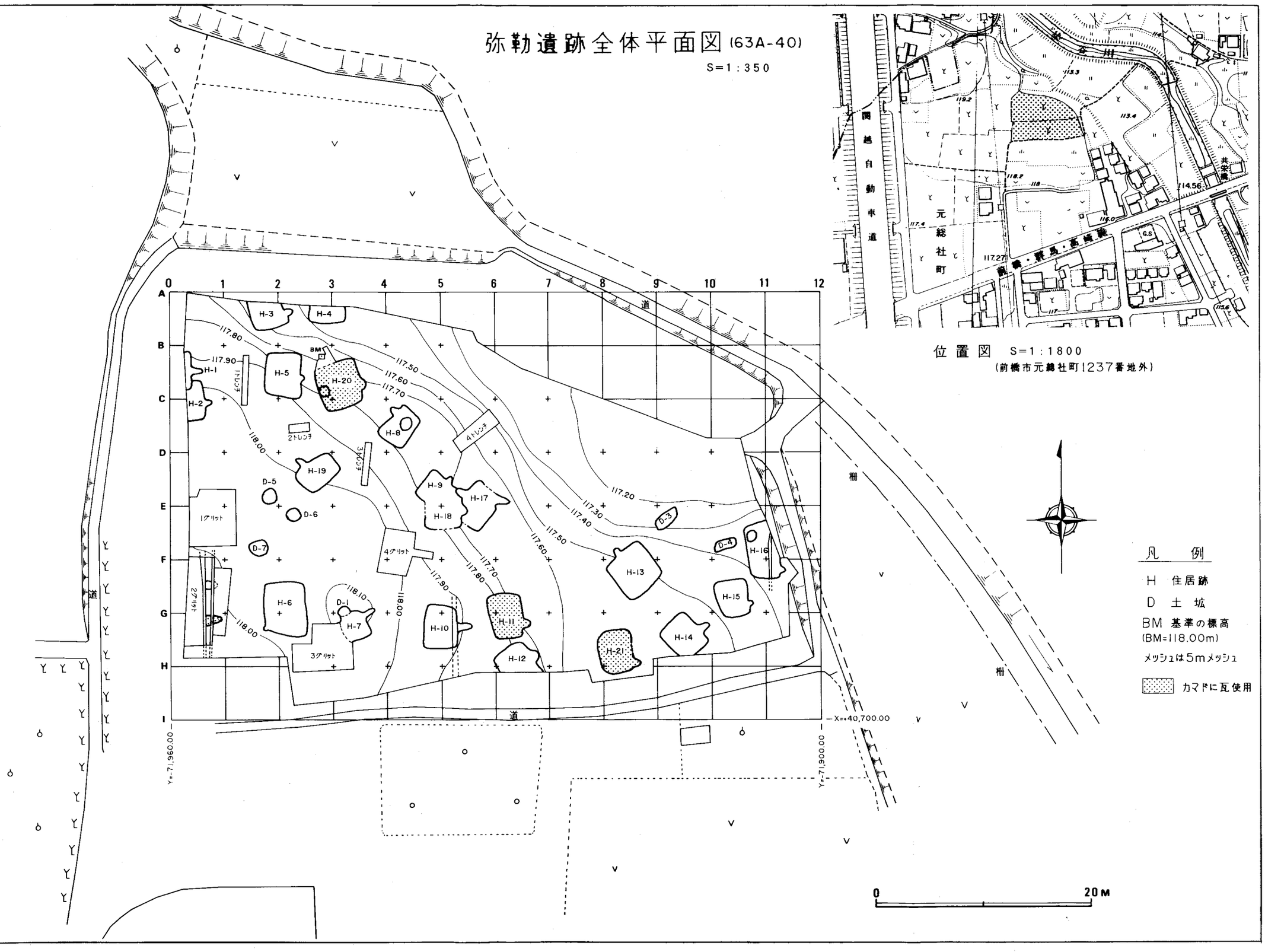


H－21カ17

H－21カ18

弥勒遺跡全体平面図 (63A-40)

S=1:350



位置図 S=1:1800
(前橋市元総社町1237番地外)

凡例

H 住居跡

D 土坑

BM 基準の標高
(BM=118.00m)

メッシュは5mメッシュ

カマドに瓦使用

宅地造成事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

弥勒遺跡

平成２年３月２０日　印刷
平成２年３月２５日　発行

発行者　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町６６４番地の４

編集　スナガ環境測設株式会社
前橋市青柳町２１１番地の１

印刷　上毎印刷工業株式会社
前橋市天川大島町３０５番地の１